

---

# 絶望（げんそう）の終焉/仮面の戦士と魔法少女

Hiro

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

絶望<sup>げんそう</sup>の終焉 / 仮面の戦士と魔法少女

### 【Nコード】

N7477W

### 【作者名】

Hiro

### 【あらすじ】

学園都市に住む無能力者の高校生である上条当麻は奇妙な夢を見ていた。

ある日、少年は謎の少女に出会う。

風都の私立探偵こと左翔太郎は相棒のフィリップと刑事である照井竜と共に見滝原市に向かっていた。

仮面の戦士と魔法少女が出会うとき絶望<sup>げんそう</sup>に終わりが訪れる。

## 第1話 失った『K』 / 少年は不法侵入者？（前書き）

とある魔術の禁書目録と魔法少女まどか マギカと仮面ライダーW  
をクロスオーバーさせていただきました。

至らない所が多々あると思いますがどうかよろしくお願いします。

## 第1話 失った『K』 / 少年は不法侵入者？

タスケテ…クルシイ…ダレカ…モウイヤダ……ダレ…カ…

上条「ッ！！」

学園都市の第七学区にある学生寮のバスルームで少年は目を覚ました。

何故、少年がバスルームで寝ているのかと言うと、現在少年が使うはずのベッドは居候であるシスターが使用しているからだ。

上条「またあの夢か…」

上条当麻は五日前から謎の夢を見続けていた。

上条当麻は自身の右手を自らの頭に当てる。しかし、何の反応も見られない。

『幻想殺し（イマジンプレイカー）』それは、異能の力であるならば善悪を問わず問答無用で打ち消す力。

上条が見ている夢が異能の力による物ならば最低でも何らかの反応が見られる筈のだが全く反応はない。つまり、この夢は異能の力に関係していない。

上条「疲れてんのかな俺…」

それから、5時間経ったあと、上条当麻はいつも通り学校に向かった。

土御門「かみやくん。何だか少しやつれてないかにゃ」

青髪「なんやと！！てことは綺麗なお姉さんとよろしくやっとなんかい！？」

上条「ふざけんな！！大体、上条さんにそんな素敵な出会いがあるわけねえだろうが！！」

朝から騒いで上条当麻と土御門元春と青髪ピアスの三人。クラスメートは彼らの事を『クラスの三馬鹿<sup>デルタフォース</sup>』と呼ばれている。そんな彼らに二人の女子が近づいてくる。

吹寄「黙れ貴様等！！朝っぱらから騒ぐんじゃない！！」

姫神「おはよう上条君」

三馬鹿に対して怒鳴っているのは吹寄制理。スタイルは非常に良いが何故か色気が全くない。また、彼女はクラスメートから『対カミジョー属性完全ガードの女』と呼ばれている。

もう一人の少女は姫神秋沙。黒髪のと風美人といった出で立ちであるが、彼女は自身の影が薄い事を若干悩む節がある。そしていつも通り吹寄による三馬鹿の制裁が始まる。

土御門と青髪を拳で沈め上条に頭突きをかます。

上条は薄れいく意識の中、呟いた。

「不幸だ」と…

子萌「はいはい。ホームルームを始めますよ。皆さん席についてくださいよ」

教室に入ってきたのは月読子萌。身長135cmでどうみても子供にしか見えない。所謂合法ロリ教師という存在である。また、その容姿ゆえに学園都市七不思議の一つとしてカウントされている。）

他にも学園都市七不思議の一つとして、脱ぎ女やレベルアップ、  
どんな能力も効かない能力を持つ男などが挙げられる」

子萌「上条ちゃんは今休んだ日が多いので、それを取り戻すために最  
低でも一週間は補修をやってもらいますよ」

青髪「ええなあかみちゃん。子萌先生と二人っきりなんてうらやまし  
いわあ」

上条「不幸だ」

上条は真面目な学生というわけではないが、学校を休むような人間  
でもない。彼は、不幸体質であるが故にトラブルに巻き込まれてし  
まうだけなのである。

しかし、それで補修が免除されるわけでもない。その上、補修によ  
って寮に帰るのが遅くなり、居候のシスターの怒りを買ってしまう  
のである。自分がシスターに襲われる所を想像して上条は心の中で  
呟いた。

「不幸だ」と…

そうこうしている内に授業が終わり帰路についている上条は、常盤  
台中学の制服を着た女子から声を掛けられた。

御坂「あ、あんたも今帰り？」

上条「ようびりびり」

御坂「びりびりじゃない！私の名前は御坂美琴で言ってるでしょう  
が！」

上条「悪い悪い。それで何か用か？上条さんは非常に忙しいのですよ」

御坂「べ、別に何か用があるってわけじゃないんだけど……」

上条「そうか。んじゃまた明日な」

御坂「ま、また明日／＼」

御坂と別れた上条は買い物済ませて帰路についていた。その時、夢の中でしか聞いた筈のない『声』が聞こえていた。

タスケテ…クルシイ…ダレカ…モウイヤダ……ダレ…カ…

上条はその声ができる方へ駆け出していた。上条が声のする方へ駆け出してから十分が立った。そこは、路地裏だった普段ならスキルアウトの根城になっているはずだが、何故かその場には一人一人見当たらなかった。

路地裏の奥に進んでいくと一人の少女を見つけた。

その少女は泣いていた。

上条は少女に近づき頭を撫でながら笑顔でこう言った。

上条「もう大丈夫だ」

少女を放っておけなかった。それは、上条が苦しんでいる人間を放っておけない性質の人間だからである。

少女は上条に撫でられて泣き止みこう言った

少女「あ……りが……と……う……」

少女がそう言った途端上条の周囲は光に包まれた。そして、上条当麻は学園都市から姿を消した。

「……いただきまーす」「」「」

鹿目家では家族全員で晩御飯を食べていた。いつもと変わらぬ平和な日常だった。

知久「ご近所さんの息子が見滝原中学を卒業したらしくて制服が必要なくなったらしくて渡されたんだけど、これはどうしたらいいかな？」

洵子「タツヤはまだ三歳だし、お古じゃなくて新しい服を買ってやった方がいいだろ」

まどか「それに十年も待つてたら制服が傷んじゃうよ」

鹿目家では、無理やり渡された制服の扱いについて話していた。

洵子「持つてても意味ないからとっとと捨てた方がいいだろ」

まどか「確かに持つてても使う機会がなさそうだ『ズドン！』……へ？」

知久「な、何の音だ？」

まどか「他の部屋から聞こえてたけど……もしかして泥棒じゃ……」

洵子「舐めた真似してくれるじゃねえか……」

まどかとタツヤをリビングに残して、知久と洵子が部屋を確認することになった。

そして、部屋のドアを勢いよく開けるとそこにはツンツン頭の少年が倒れていた。

「「は？」」

子供の泥棒がいるのは有り得ないことではない。しかし、学生服を着たままで、食品が入ったままの袋を持ってうつ伏せで気絶しているのはあまりにもおかしい。

知久「どういうこと？」

洵子「あたしが分かるわけねえだろ……」

そこへ、知久と洵子が心配になったまどかとタツヤが二人のもとへやってきた。

まどか「大丈夫？」

知久「僕たちは大丈夫なんだけど……」

まどかは両親の反応が気になり、部屋を覗く。そこにいたのは、野菜の入った買い物袋を持っていてうつ伏せで倒れている少年だった。どうみても泥棒の格好には見えない。

まどか「こんなの絶対おかしいよ……」

知久「どうしたらいいんだろう……？」

洵子「起きてから話を聞くしかないね…」

それから、知久たちは少年を空いてる部屋のベッドまで運んだ。少年をベッドに移してから三十分が経過してから少年は目を覚ました。

少年に質問をしたのは知久だった。

知久「君は何であんな所にいたんだい？」

???「あんな所？」

知久「覚えていないのかい？」

洵子「まあいいや。あんたの名前は？」

???「俺の名前？…俺は誰だ？」

少年の答えはあまりにもこの場に似つかわしくなかった。

## 第2話 二人の『T』 / 変化する物語

照井「風都以外の場所でドーパントが出現することは有り得るのか？」

翔太郎「俺だつてわかんねえよ。ドーパント絡みじゃないかもしれないだろ？」

亜樹子「風都以外の場所に行くのも久しぶりだな」

フィリップ「何が待っているのか考えるだけでゾクゾクするねえ！」

鳴海探偵事務所の面々と風都署の刑事である照井竜は見滝原市に向かっていた。

きっかけは3日目に遡る。

見滝原に住んでいる桐山玲子という女性から、娘の桐山ミカについて捜索して欲しいという依頼があり、その調査のために見滝原に向かうことになった。

地元の警察に調査を依頼しても全く進展が見られなかったことから、鳴海探偵事務所に白羽の矢が立ったというわけである。

風都署の刑事である照井竜は、休暇を取っており今回は彼らの付き添いとなっている。

移動手段は普段のバイクではなくレンタカーを使用している。

現在は、高速道路のSAによって昼食を取っていた。

翔太郎「まあどつちにせよ、早めに依頼を終わらせて風都に帰るぞ」

亜樹子「少しくらい観光してもいいじゃん」

翔太郎「俺達は観光しに来てんじゃねえぞ」

昼食と取っていた彼らが、レンタカーが置いてある駐車場に向かっていた途中で20人位の黒服の男達に囲まれる。

黒服の男「貴様達を此処で始末させてもらおう」

「マスカレイド!!!」

黒服の男達の姿が変化していき怪人となった。

翔太郎「こりゃあ……」

照井「クロだな」

フィリップ「亜樹子ちゃん。僕の体を頼むよ」

亜樹子「わ、分かった!」

翔太郎とフィリップと照井は腰にベルトの様な物を着けて、USBメモリの様な物をベルトの挿入口に差し込む。

「サイクロン!!! ジョーカー!!!」

「アクセル!!!」

そして、二人の仮面ライダーが現れる。

W「さあ! お前の罪を数えろ!!!」

アクセル「振り切るぜー!!」

敵の数は20体だが、二人の仮面ライダーの相手をするには力不足らしくあつという間に片付けられた。

照井「どうやら、財団Xが関与している可能性は濃厚だな」

翔太郎「奴等は何を企んでいやがるんだ？」

フィリップ「それは分からないけど、急いで見滝原に向かったほうが良さそうだね」

彼らは見滝原に急ぐ。

上条当麻SIDE

上条「どうしてこうなった……」

記憶喪失の少年こと上条当麻は市立見滝原中学校の教室の前に居た。自分の名前すら覚えていなかった上条だったが、偶然財布の中に入っていた学生証によりどうにか自分の名前だけは理解することが出来た。

鹿目家に迷惑を掛けたことについて謝罪し、出て行こうとしたが知久に家にいたらどうかと呼び止められる。(記憶喪失であることを心配されて)

上条は知久の提案を断るが洵子に説得(脅迫)されてついに折れて、鹿目家の世話になることに決めた。

鹿目家の面々に自己紹介をする上条。

まどかは兄が出来たみたいで喜んでいたし、弟のタツヤも懐いていた。

そうして鹿目家に居候することになった上条だったが、洵子から学校に行くことを提案（強要）される。（中学校の制服を処分しなくて済むから）  
転入手続きは何かするとと言われて、見滝原中学校に通うことになった。ついでに学年は3年生となった。

（上条自身は高校生で中学生ではないのだが、記憶喪失であるため本人は知る由もない）

上条「上条当麻です。よろしくお願いします」

簡単な自己紹介が終わった後、上条は支持された席に向かう。そこで隣になった女生徒に挨拶する。

上条「よろしく。え〜っと…」

マミ「バマミよ。よろしく上条君」

HRが終わった後、クラスメートから質問攻めされる上条。

上条が不幸体質ということもあり、無事に放課後を迎えられるはずもなかった。

階段を下りる際に、重そうな荷物を持っている生徒に衝突され階段から落ちる。

学校から出れば、犬に追いかけられる。

足元にある空き缶を気付かずに踏んづけてしまい、勢いよく地面に激突する。

上条「不幸だ…。ん？あれは…」

仁美「や、やめて下さい…！」

不良「いいじゃん。どっか遊びにいこうよ」

不良2「別に取って食ったりしないからさ」

不良3「ちよつと帰るのが遅くなるだけだからさ」

志筑仁美は帰り道で不良に絡まれていた。今日は用事があるため、親友の鹿目まどかや美樹さやかとは一緒に下校しなかった。困り果てている仁美の下に一人の少年が向かってくる。少年は仁美と同じ見滝原中学校の制服を着ていた。

上条「いや、すみません。連れが迷惑を掛けたみたいで、ほらいくぞ」

仁美「え？」

そついつて上条は仁美の手を取りその場から立ち去ろうとする。

不良もその様子を黙って見送るわけでもなかった。

不良「待てよ teme!」

上条はその声を聞いて少女の手を取りながら全力でその場から逃走する。

不良から逃げ続けて5分、ようやく少年は不良の姿が見えなくなった所で二人は立ち止まる。

上条「大丈夫か？」

仁美「は、はい。なんとか…」

上条「よかった。まあ、次からはこんな目に遭わないように気を付けるよ〜」

少年はその場から立ち去る。仁美は自分の顔が熱くなっていること感じていた。

仁美「お名前を伺うことが出来ませんでした…」

少女は一人で呟いていた。

上条「そろそろ戻ったほうがいいか…」

現在、世話になっている鹿目家に帰ろうとする上条。

その時、上条の頭の中に声が響いてきた。

「タスケテ…タスケテ…ダレカ…クルシイ…ダレカアアア…」

上条「何だよこの声…向こうから聞こえる…」

少年は全力で駆け出していた。

まどか「おはよう。さやかちゃん」

さやか「おはよ〜。まどか」

まどか「さやかちゃん。昨日こんなことがあったんだ〜」

まどかは先日の出来事について話した。

晩御飯の最中に大きな音が聞こえて、泥棒かと思って部屋に向かったら買い物袋を持った学生服の少年が倒れていた。

しかも、その少年は記憶喪失らしく財布に学生証らしきものが入っていて名前だけは辛うじて分かったということ。

結局、その少年は鹿目家に居候することになった。

見滝原中学の制服が余っていたので、学校に行くことが決定したと。

今日から見滝原中学校に通い始めたということ。

さやか「何だか凄い事になってるね…」

まどか「とっても不思議でしょ」

さやか「その上条さんは記憶喪失なのに家の部屋に居た時点ですごく怪しいね」

まどか「皆最初はそう思っていたけど、上条さんは全く悪い人に見えなかったから…」

さやか「風都の仮面ライダーなら何とかしてくれるかもよ」

まどか「仮面ライダーって何？」

さやか「風都で起きる謎の怪事件を解決する正義のヒーローらしいんだ。仮面ライダーならまどかの家で起きた事件を知ってるかも知れないよ」

まどか「仮面ライダーかあ…」

さやか「あたしも一度でいいから本物を見てみたいなあ…」

仁美「おはようございます。まどかさん、さやかさん」

まどか「おはよう仁美ちゃん」

さやか「おはよ…。仁美」

親友である志筑仁美に挨拶をするまどかとさやか。

仁美に先日の出来事について話そうとするまどかだが、HRのチャームが鳴ったので話をすることを断念した。

早乙女「HRを始めます。その前に転校生を紹介するわね。」

ほむら「転校生の暁美ほむらです。よろしくお願いします」

まどか「あれ？あの子？夢の中であつたような…」

まどかは昨晚ある夢を見ていた。それは、魔法少女が怪物と戦っているというもので謎の白い生物から「僕と契約して、魔法少女になってほしい」と告げられるという内容であつた。

ほむら（まどか…今度こそ貴女を守って見せる…！）

クラスメイトに質問されたほむらは保健室へ向かい、まどかがほむらを保健室へ案内することになった。その際、ほむらから『魔法少女になつてはならない』と警告される。

まどかはほむらの言葉の意味が理解出来なかつた。

放課後、仁美と別れさやかと寄り道したまどかは謎の声に導かれてビルの一角へ迷い込み、夢の中で見た生物とそれを殺そうとするほ

むらじゆくわした。

### 第3話 『M』の願い／未知の力（前書き）

風都の仮面ライダー達は見滝原へ向かい、少年は謎の声に導かれ、少女達の物語は始まる。

謎の声の正体とは！？

始まります！！

### 第3話 『M』の願い／未知の力

鹿目まどかと美樹さやかの二人は暁美ほむらから逃げていた。

さやか「あの転校生は何考えてるわけ!？」

まどか「分からないけど…とにかくこの生き物を治療してあげなくちゃ…」

二人はほむらを撒いた後、路地裏を歩いていた。

そこにいたのは…

まどか「上条さん?何でこんな所に?」

さやか「この人が上条さん?」

上条「それはこっちの台詞だろ…ってどうしたんだその生き物!？」

まどか「とにかくこの子を助けてあげなくちゃ…」

上条は謎の声が聞こえる場所に向かっていたら、まどかとさやかに出くわしたのだ。

しかも、ボロボロになっていた生物をまどかが抱えていたのだ。

上条「急いだ方がいいな。この近くに動物病院はあるのか?」

さやか「私知ってます」

上条「案内してもらってもいいか?」

さやか「はい！」

まどか「急ごう！」

近くにある動物病院を目指して移動し始める三人だったが、そこである違和感に気付いた。

まどか「私達は路地裏にいたはずじゃ…」

さやか「どこなのよこは…」

上条「何が起こってるんだ!？」

そこは見慣れた景色ではなく、自分達が普段からいるような世界ではなかった。

その上、見たこともない異形が蠢いていた。

まどか「な、なにあれ…?」

さやか「ば、化け物…?」

上条「二人とも後ろに下がってる…」

上条はまどかとさやかを自分の背後に下がらせる。

上条達の存在に気付いた異形達は徐々に彼らに近づいてきた。

さやか「近づいてくる…」

まどか「い、いや…こないで…」

一定の距離まで近づいた異形達は、上条達に向かって襲い掛かってきた。

上条「くそおおおおお！！！！」

上条は右拳を力の限り異形に叩きつけた。

バキン！！！！

ガラスが割れるような音が空間に響き渡る。

そして、上条の右手に触れた異形は消え去った。

まどか「き、消えた…？」

さやか「何が起こってんの？」

上条「どういうことだ…」

しかし、異形達の数は圧倒的に多く上条達の不利に変わりはなかった。

異形達が上条達に向かって一斉に襲い掛かる。

しかし、異形達が上条達に触れることはなかった。

何故なら、一人の少女が異形達を蹴散らしていたからだ。

少女が異形達を片付け終わると、上条達へ向かってきた。

マミ「貴方達がきゆうべえを守ってくれたのね。ありがとう…って何で上条君がいるの！？」

上条「それはこっちの台詞だろ。しかも何だよその格好は…」

マミ「詳しい話は後からするわ。どうやらお出ましみたいね…」

マミの言葉と共に先程の異形よりも明らかに大きな異形が現れた。

マミ「すぐ片付けるから貴方達はちょっと待っててね」

そういつてマミは異形に向かっていく。

呆気を取られているまどか達。

上条は二人を異形から出来るだけ遠ざけようとその場から離れようとした時だった…

タスケテ…タスケテ……クルシイヨオ……ダレカアアア……!!!  
!!!

上条「あいつから声が聞こえる…」

まどか「どうしたの上条さん!？」

さやか「早く逃げなきゃ!！」

上条「あいつが呼んでいたのか…どうして?」

上条が混乱している内にマミは異形を追い詰める。

上条「何が起きてるのは分からないけど…このままじゃ絶対に駄目だ!！」

突然、上条の体が輝き始める。

まどか「上条さん!?!」

さやか「わけが分からないよ…!」

光が止んだとき、上条の腰にはベルトらしき物が装着されていて目の前にはUSBらしき物が二つあった。

上条「これを使うのか…?とにかくやるしかねえ!!!」

上条はUSBメモリらしき物を掴むと、それをベルトらしき物の挿入口らしき場所に突き刺した。

そしてUSBメモリらしき物から謎の音声が聞こえた。

「Imagine!!」

「Breaker!!」

上条の体が先程よりも遥かに強い光に包まれる。

その光は謎の空間の全てを覆った。

マミ「な、何が起きているの!?!」

マミは異形に対する攻撃が止む。

そして、強烈な光が消えたとき上条のいた場所には白銀の戦士が立っていた。

まどか「上条さんなの…?」

さやか「上条さんって一体…?」

マミ「上条君は一体何者なの…?」

上条「俺は一体…?」

まどか達ではなく上条も自身の変化に戸惑っていた。しかし、上条は自分がするべきことは理解していた。

上条「コイツは俺が止めなきゃいけない…!」

上条は異形の元へ走り、右手で殴り飛ばした。異形の体は凄まじい速度で吹き飛ばす。

まどか「す、凄い…!」

さやか「やっちゃんえ!」

マミ「魔法少女じゃないわよね…!」

上条はベルトらしき物に差し込んでいるUSBメモリらしき物を更に強く押し込む。そして、上条の右手に光が収束し始める。

「マキシマムドライブ…!」

上条「うおおおおお…!…!…!」

上条は右手を異形を思いつきり殴った。

瞬間、異形の体は光に包まれた。

光が止んで、上条達の目に入ってきたものはあまりにも意外な存在だった。

「……………え？」「……………」

少女が倒れていたのだから…

桐山ミカは地獄の中にいた。

自らが化け物となって大勢の人の命を奪ってしまうこと。

他人を傷つけたくなくても自分の意思ではどうにもならないということ。

命を絶つことも出来ない。

拳句の果てには友達と殺し合う。

少女は薄れいく意識の中で、一つの光を見た。

右手に不思議な力を宿した少年を…

絶望的な状況な状況に陥った人間を救うために戦い続けた少年を…

だから少女は望んだ。絶望という幻想を殺す少年の存在を。

そして少女と少年は出会った。

ミカ「あれ…？こ…こ…は？」

玲子「ミカ！！」

桐山ミカは母親である桐山玲子に抱きしめられた。

玲子「良かった！！本当に良かった…！！」

ミカ「母さん…」

徐々に自分の置かれた状況を理解することが出来たミカ。

ミカ「母さん！！！！」

少女の絶望<sup>げんぞう</sup>が殺された瞬間だった。

#### 第4話 謎の『K』/少年は仮面ライダー!?

マミ「上条くん。あなたは一体何者なの…?」

上条「それは…」

謎の少女を病院まで送った後、上条はマミに問い詰められていた。

まどか「待つてください！上条さんは記憶喪失なんです！」

マミ「記憶喪失？」

上条「ああ…実は…」

上条の説明を受けたマミは、一応の納得をした。

マミ「それじゃあ貴方はあの力について何も知らないということなのね?」

上条「ああ」

QB（魔女が元の姿に戻ったなんて、わけがわからないよ…。それに彼の姿は財団Xから提供された仮面ライダーと呼ばれる存在に酷似していた。それに、曉美ほむらという少女と契約した記録は無いのに彼女は魔法少女になっていた。明らかにイレギュラーが多すぎる。財団Xに連絡を取ったほうが良いかも知れないね…）

上条「巴こそさっきの格好は何だったんだよ？」

「ママミ」それは…」

ママミは自身が魔法少女であり見滝原を守るために魔女という存在と戦っていることを三人に告げた。

その途中できゆうべえが会話に割り込んできた。その際、謎の生物が喋っているという事実には驚愕する三人であった。

魔法少女になるためにはきゆうべえと契約をすることが必要になるが、契約を行うことによりどんな願いも叶うという言葉に三人は喜んでいった。（上条は男であるため、魔法少女になることは出来ないときゆうべえから告げられて若干落ち込んでいた）

しかし、魔法少女の戦いは熾烈なため安易な気持ちで魔法少女になるべきではないとママミから忠告される。

落ち込む二人にママミは、魔法少女である自分の戦いを見てから判断するべきではないかと提案する。

ママミの提案に賛成した二人は魔法少女体験ツアーに参加することになる。

上条もまどか達を放っておけないため追加で参加することになった。

ママミ「そういえばきゆうべえ。上条君の姿について何か知っていることはない？」

QB「残念ながら全く分からないんだ…」

まどか達の様子を遠くから眺美ほむらは見ていた。

ほむら（あの男は一体何者なの？今まで一度たりとも遭遇したことは全くない。その上、魔法少女とも異なる力を持ち魔女を人間の姿に戻した。しかも…）

ほむらは自らが保有しているソウルジェムを見る。

ほむら（彼から発生した光を浴びた後、ソウルジェムの穢れは消えていた…。巴マミはまだ気付いていないみたいだけど…。彼の存在はきゆうべえにとっても予期していないイレギュラーなはず、それに彼の力を上手く利用すればまどかを魔法少女にさせずに済むかもしれない。そのためにも彼に接触する必要があるわね…）

ほむらはその場から去っていった。

まどか達は上条から、何故路地裏にいたのかを聞かれた。

転校生の暁美ほむらが、きゆうべえを殺そうとした場面に遭遇しきゆうべえを助けた後、路地裏まで逃げてきたのだという。

今度は上条がまどか達から、何故路地裏にいたのかを聞かれた。

上条は謎の声が聞こえて声のするところまで来たらまどか達がいたという。

声の主は魔女だったのだが、上条は確証が得られないためまどか達に話すことはしなかった。

QB（彼を呼んだ覚えはないから彼は何かを隠しているようだね。なににせよ警戒しておいた方がいいね）

話し込んでいるマミ達の前に二人の男が向かって来た。

二人は懐からUSBらしき物を取り出した。

まどか「上条さんが持っていた物に似てる？」

さやか「じゃああの人も上条さんみたいになるのかな？」

マミ「上条君の知り合いかしら？」

上条「そうなのか？」

『トリガー!!』

『ヒート!!』

二人はUSBメモリらしき物を自らの体に突き刺した。  
そして、二人の姿はみるみる内に変化していった。

まどか「か、怪人？」

さやか「どうみても悪役っぽいんだけど…」

マミ「三人とも私の後ろに下がって!!」

上条「俺が引き付けるからお前ら三人は早く逃げる!!」

まどか達が戸惑っている内に二人の怪人は近づいてくる。  
その時、二つの影が飛び込んできた。

翔太郎「うおりゃああ!!」

照井「はあ!!」

そしてまどか達の下に一組の男女が近づいてくる。

フィリップ「君達は大丈夫かい？」

亜樹子「もう大丈夫だからね!」

呆気にとられているまどか達。

翔太郎は怪人から距離をとり呟く。

翔太郎「風都以外で暴れやがって…」

照井「だがこれでこの見滝原で財団Xが何かを企んでいる事は明らかになった」

フィリップ「亜樹子ちゃん、よろしく」

亜樹子「分かった！」

そういつて翔太郎とフィリップはダブルドライバーを取り出し、照井はアクセラドライバーを取り出す。

そして三人はUSBメモリらしき物を取り出し、ガイドドライバーとアクセラドライバーに差し込む。

『サイクロン！！ジョーカー！！』

『アクセラ！！』

『変身！！』

『変身！！』

翔太郎とフィリップ（意識だけ）は仮面ライダーWとなり照井は仮面ライダーアクセラとなる。

「さあ！！お前の罪を数えろ！！」

「振り切るぜ！！」

まどか「あれって…」

さやか「上条さんに似てる?」

マミ「あの人達は一体?」

上条「何者なんだ?」

Wはヒートドーパントがアクセル「はトリガードーパントと戦う。呆然としてるまどか達の背後に新たに三人の男達が迫っていた。

『マスカレイド!…!』

三人の男達は怪人に変身してまどか達に襲い掛かってくる。そこで、上条の前にドライバーとメモリが出現する。

上条「何が起きてるんだか分からないけど、やるしかねえよな!」

そして、上条はメモリを掴みドライバーに差し込む。

『Imagine!! Breaker!!』

上条の体が輝き、光が収まると白銀の戦士が立っていた。翔太郎とフィリップと照井と亜樹子は驚きを隠せずに叫んだ。

「「「「「仮面ライダー!?!?!」」」」

## 第5話 『H』との出会い／語られる真実

『Wサイド』

上条が変身した姿を目撃した翔太郎とフィリップと照井、亜樹子の動きが止まる。

上条の姿を見て予想外だったのは左達だけではなく敵のドーパントも同様であった。

どうやら仮面ライダーWやアクセルの存在は知っていても上条の存在は予想外だったようだ。

亜樹子「私聞いてない!!」

フィリップ「僕達以外の仮面ライダーを見るなんて…エターナル以来かな…。しかも、風都以外の街で出会うなんて実に興味深い!!ぞくぞくするねえ!!」

翔太郎「落ち着けフィリップ!!」

照井「貴様は一体何者だ!?!」

上条「詳しい話は後でお願いします!今はこの場を切り抜けねえと!」

上条の言葉で今は戦いの最中であったことを思い出した翔太郎達はドーパントとの戦いを再開する。

『ヒートドーパント』や『トリガードーパント』とは過去に戦った経験があるWとアクセル。

しかし、『NEVER』の連中のように戦い慣れているというわけ

ではないらしく、以前の敵のような強敵ではなかった。

『トリガードーパント』の攻撃を全て避けて強烈な一撃を与える『アクセル』

照井「動きに無駄が多いぞ!！」

メモリを変えながら戦い『ヒートドーパント』を翻弄する『W』

フィリップ「翔太郎!ここはルナトリガーで!」

翔太郎「分かった!」

『ルナ!!--トリガー!!--』

『上条サイド』

上条は三体の『マスカレイドドーパント』と戦闘を開始する。  
ドーパントとの戦闘が始めての上条にとって、相手が戦闘員程度の  
力しか持っていないのは幸運だったのかもしれない。

上条「おりゃあ!!--」

上条は『マスカレイドドーパント』を殴ると周囲にガラスの割れる  
ような音が響き渡り、マスカレイドの身体が爆発していき、その場  
にはスーツの男が倒れていた。

上条「よし!何だかよく分からないけど効いてる!」

上条は残り二体のマスカレイド達と戦闘を繰り広げていた。

『まどかサイド』

さやか「ねえまどか…あの人達さっき上条さんの事を仮面ライダー  
って言ってたよね…?」

まどか「うん。確かに言ってた…」

さやか「…てことは上条さんは仮面ライダーなの!？」

マミ「ねえ美樹さん。仮面ライダーって何?」

さやか「風都を守る正義の味方ですよ!」

マミ「何で風都を守る正義の味方が見滝原に?」

さやか「それは分かりませんが…」

亜樹子「話は後々!とにかくここから離れなきゃ!」

まどか「その倒れている人は大丈夫なんですか?」

亜樹子「フィリップ君は大丈夫だから心配はいらないよ!」

QB「(仮面ライダーが見滝原に来るなんて予想外だ…このままじ  
やまどかとの契約に支障が出るかもしれない…)」

その場から離れるためにまどか達を連れて移動しようとしている亜  
樹子の前に、もう一人の黒服の男が現れた。

『マスクレイド!!!』

まどか「また出た!」

マミ「貴女達は私の後ろに!」

亜樹子「危ないよ!」

さやか「大丈夫です!だって、マミさんは魔法少女なんですから!」

亜樹子「魔法…少女?」

瞬間、マミの身体が光に包まれる。

仮面ライダーのように見た目に大きな変化はないが、服装が先程とは全く異なっていた。

亜樹子「あたし聞いてない!!!」

亜樹子がマミの変化に戸惑っている間にマミは『マスクレイドドーパント』を片付けていた。

それに合わせて、先程のドーパントの戦いがあった場所から変身を解除した翔太郎や照井、上条が向かって来た。(フィリップも目を覚ました)

上条の変化に対して疑問を抱いていた左達。早速上条に対する質問が始まった。

翔太郎「そのガイドライバーとガイアメモリを何処で手に入れた?」

上条「これって、ガイドドライバーとガイアメモリって言うんですか？」

フィリップ「イメージンメモリとブレイカーメモリ…どちらも見たことがないメモリだね…」

照井「そんなことよりそれらを何処で手に入れた？」

上条「何処でというより気がついたら持っていたというか…」

翔太郎「どういうことだ？」

まどか「上条さんは記憶喪失なんです」

翔太郎「記憶喪失？」

まどかは上条の記憶喪失について翔太郎達に説明した。

フィリップ「じゃあ君は自分の名前くらいしか分かることはないのかい？」

上条「学生証を持っていたらしくて以前住んでいたところは何とか分かるんですけど…」

そういつて上条は財布の中に入っている学生証を左達に見せる。

照井「学園都市？聞いたことがないな」

翔太郎「（フィリップ…）」

フィリップ「（後で地球の本棚で彼の事を調べてみよう）」

上条への質問が終了した左達は、先程と服装が変化しているマミに疑問を感じた。

照井「ところで君は先程とは服装が変わっているが…」

マミ「その…えっと…」

さやか「マミさんは魔法少女なんですよ！」

「……魔法少女!?!?!」「……」

それから、さやかによって魔法少女という存在について簡単な説明がされた。

魔女という存在から人々を守るために戦っている存在。

途中きゆうべえが会話に入ってきて四人は非常に驚いていた。

フィリップは目を輝かせて見滝原に来たことを喜んでいた。

魔法少女についての話が終わった後で、左達はお互いの名前を知らないことに気付く。

そこで彼らは簡単な自己紹介をすることになった。

翔太郎「俺の名前は左翔太郎。ハードボイルドな私立探偵さ」

フィリップ「僕はフィリップ。翔太郎の相棒をやっている」

亜樹子「私の名前は照井亜樹子。探偵事務所の所長よ」

照井「照井竜だ。風都署の刑事をやっている」

上条「上条当麻です。見滝原中学校の三年です」

マミ「バマミです。同じく見滝原中学校の三年です」

まどか「鹿目まどかです。見滝原中学校の二年です」

さやか「美樹さやかです。見滝原中学校の二年です」

簡単な自己紹介を済ませる上条達。

そこで意を決したようにさやかが口を開いた

さやか「もしかして…左さん達は仮面ライダーなんですか？」

翔太郎「まあな。ついでに言うと俺とフィリップが変身して仮面ライダーWになり、照井は仮面ライダーアクセルになる」

さやか「まどか！すごいよ！本物だよ！！」

まどか「さやかちゃん落ち着いて…」

マミ「どうして貴方達が見滝原にいるんですか？」

翔太郎「実は依頼で見滝原に来てただけだな、見滝原に着いて依頼人の元に言ったら事件は解決したって言われたんだよ」

フィリップ「これからの予定について話しながら歩いていたら、ドーパントに襲われていた君達を見つけたのさ」

さやか「ドーパントってさっきの怪人ですか？」

翔太郎「ああ」

ドーパントや仮面ライダーについて説明をする翔太郎。  
目を輝かせながら翔太郎の話を熱心に聞くさやか。

さやか「上条さんも変身できることから仮面ライダーなんですかね？」

上条「それは分からないけどな…」

まどか「左さん達はこれから風都に帰るんですか？」

翔太郎「そのつもりだったけど、ドーパント共が出てきちゃった以上俺たちの出番だからな。事件が解決するまでは見滝原にいるつもりだ」

フィリップ「魔法少女や魔女のことも気になるしね」

照井「俺も今は休暇中だから何の問題もない」

亜樹子「というわけでこれからもよろしく」

『上条サイド』

左達と連絡先を交換したまどか達。

左達と別れ、家に向かっていたところで上条が何かを思い出して一言呟いた。

上条「忘れてた…」

まどか「上条さんどうしたの？」

上条「いつの間にか鞆を無くしちゃった…不幸だ…」

さやか「路地裏にでも忘れたんじゃないですか？」

上条「そうかも知れない。まどかは先に帰ってきてくれ」

まどか「分かったよ」

上条「美樹と巴はまた明日な」

さやか「上条さんまた明日」

マミ「上条君また明日ね」

まどか達と別れて路地裏まで戻った上条は鞆を探していた

上条「鞆は何処だ…」

ほむら「貴方が探している鞆はこれのことかしら？」

上条「そうそうそれぞれ、ありがとな」

ほむら「礼には及ばないわ」

上条「礼くらいさせてくれよ。え〜っと…」

ほむら「暁美ほむらよ」

上条「暁美ほむらってまどか達が言った…」

ほむらを警戒する上条。

ほむら「貴方に話があるの」

上条「俺に話？」

ほむら「ええ。とても重要な話」

ほむらはまず最初に自分も魔法少女であることを明かす。  
驚く上条だったが、ほむら無視して話を続けた。

魔法少女という存在の残酷な真実、魔女の正体、きゆうべえの狙い  
ほむらは自身の知り得ることを全て上条に語った。

上条「マジかよ…」

ほむら「信じられないようだけど全て真実よ」

上条「いや、信じるよ。このことは他の魔法少女も知っているのか  
？」

ほむら「いいえ。私だけよ」

上条「何でお前だけなんだ？」

ほむら「私は時間旅行者だから」

上条「時間旅行者？」

ほむら「簡単に言っと同じ時間を何度も行き来できることよ」

上条「そんなことが出来るのか？」

ほむら「ええ。この力は過去の時間軸できゅうべえと契約して手に入れたのよ」

上条「それじゃあこの時間軸におけるきゅうべえは…」

ほむら「私のことを知らないでしょうね」

上条「お前の目的は一体何だ？」

ほむら「私の目的は鹿目まどかを魔法少女化を阻止することよ」

ほむらは過去の時間軸で行ってきたことを包み隠さず述べた。

まどかの魔法少女化を阻止するために行動していたが、そのどれもが失敗したということ。

まどか以外の魔法少女も悲惨な運命をたどっていったということ。

上条「何で俺なんかこんな話しをしたんだ？」

ほむら「あなたの存在がイレギュラーだからよ」

上条「イレギュラー？」

ほむら「これまで私が活動していた時間軸の中にあなたは存在しなかった。それに、貴方は魔女を元の人間に戻すといった謎の力を持っている」

上条「…」

ほむら「だから私はあなたにまどかを救うために協力してほしいの」

上条「分かった。協力するよ。ただし、お前に一つだけ言っておく」

ほむら「何かしら？」

上条「俺はまどかだけを助けるつもりなんてない。魔法少女の運命に巻き込まれた奴も絶対に助けてみせる」

ほむら「…好きにするといいわ」

一人の人間を助けるために他の人間を犠牲にすることをよしとしない。

記憶を失っても上条当麻の本質は変わらない。

上条「それで俺はこれから何をすればいいんだ？」

ほむら「あなたはまどか達と一緒にいて」

上条「それだけでいいのか？」

ほむら「貴方がまどか達の近くにいるならば不測の事態にも対応出来るでしょうし、私は巴マミに警戒されているから、貴方の方が都合がいいのよ」

上条「分かった」

『Wサイド』

翔太郎とフィリップと照井と亜樹子の四人は、見滝原市のビジネスホテルに泊まっていた。

翔太郎「早速だがフィリップ。検索頼むぜ」

フィリップ「了解。最初のキーワードは？」

照井「『上条当麻』で頼む」

亜樹子「彼は記憶喪失って言ってたから、何か分かるかもしれないね」

フィリップは照井の言葉を聞いて検索を始める

『地球の本棚』

地球の記憶の全てが存在するアカシックレコードのような精神世界。真っ白な空間に無数の本棚が並んでおり、それらが一冊一冊が「地球の記憶」のデータベースとなっている。使用者が検索をかける（キーワードを唱える）と自動的に本が選抜されていき、任意の情報が入った本を絞り込むことができる。検索が終了してフィリップが呟く。

フィリップ「おかしい…彼に関する項目が全く出てこない…」

翔太郎「どういうことだ？」

フィリップ「改竄された痕跡も見られないし、個人の情報が存在しないのはあまりにもおかしいんだ…」

照井「フィリップ。『学園都市』でもう一度検索を頼む」

フィリップ「了解…」

フィリップは再度検索を始める

フィリップ「学園都市に関する項目も出てこない…」

亜樹子「じゃあ、上条君の名前も学園都市も嘘ってことなの？」

照井「いや、彼の学生証を確認したが偽造の跡は見られなかった」

フィリップ「それに、偽名を使用した程度で『地球の本棚』の検索に引つかからないというのは有り得ないんだ…」

翔太郎「上条当麻っていう人間はこの世に存在するはずのない人間ってことなのか？」

照井「奴の所持していたガイアメモリも聞いたことがないしな…」

翔太郎「『イマジンメモリ』と『ブレーカーメモリ』で検索を頼む」

フィリップ「分かったよ」

再び地球の本棚で検索を始める

フィリップ「やはり出てこない。もしかしたら彼はこの世界の人間ではないかもしれない」

翔太郎「異世界の人間ってやつなのか？」

照井「そもそも異世界なんてものが存在するの？」

フィリップ「証明する手段はないけど、かといって否定できるわけでもないだろう？それに、鹿目さんの話を聞いた限り、彼が発見された状況からして不可解だからね」

亜樹子「上条君が異世界の人間なんて想像つかないなあ。ちよつて冴えない雰囲気だけど普通の人間っぽいし…」

フィリップ「現時点においては、上条当麻は異世界の人間であるという説が一番説得力があるんじゃないかな？」

翔太郎「上条のことは後回しにしておいて他の事柄について調べようぜ」

フィリップ「キーワードは？」

翔太郎「『魔法少女』で頼む」

地球の本棚で魔法少女について検索が終わったフィリップだったが、その表情は暗かった。

フィリップ「これは…」

翔太郎「どうしたんだフィリップ？」

照井「何か分かったのか？」

亜樹子「魔法少女特有の必殺技でもあるの？」

フィリップ「そんな良いものじゃないよ……」

フィリップは地球の本棚にあった魔法少女の真実を翔太郎達に話す。

翔太郎「ふざけやがって……！」

亜樹子「酷過ぎるよ……」

照井「ドーパントより遥かに性質が悪いな……」

翔太郎「きゆうべえと契約をしたら魔法少女になるって巴が言っていたが、あいつはこれを知っていたってことか？」

フィリップ「おそらく知っているだろう。魔法少女はこの真実を知っているはずがない。こんなシステムを知って魔法少女になる人間はいないだろうからね……」

照井「きゆうべえについても検索を頼む」

フィリップ「分かった」

地球の本棚できゆうべえについて調べるフィリップ。

フィリップ「きゆうべえというのは偽名で本来は『インキュベータ』と呼ばれる地球外生命体の端末らしいね」

翔太郎「地球外生命体なんてのがいるのか？」

フィリップ「情報を見た限りでは存在しているね」

照井「他に分かったことは無いのか？」

フィリップ「残念ながら…地球外生命体らしく地球の本棚に全ての情報が集まっているわけではないだろう」

亜樹子「ねえフィリップ君。このことは巴ちゃん達に教えたほうがいいのか？」

フィリップ「やめたほうがいいだろうね。まず、僕たちの話を信じたくないと思うし、信じてくれたとしても精神的なショックから魔法少女の魔女化を促進させる結果になるかもしれない」

翔太郎「じゃあどうしたらいいんだよ！！」

照井「落ち着け左。俺達が魔法少女を出来るだけ魔女と戦わせないようにするだけだ」

フィリップ「現状ではそれが最良の選択だね…」

亜樹子「ねえフィリップ君…。やっぱり魔女になってしまった子を助けることは出来ないのかな？」

フィリップ「…」

魔法少女の真実を知り意気消沈する左達。  
様々な事件を解決してきて彼等にとっても、今回の事件はあまりにも異常だった。

財団X本部

ネオン「上条当麻と暁美ほむらか…」

QB「更にWとアクセルまで現れた」

ネオン「それについては既に対策を打っている」

QB「とにかく君達にはW達が鹿目まどか達に接触するのを出来るだけ阻止して欲しい」

ネオン「上条当麻と暁美ほむらについてはどうするつもりだ？」

QB「君達に任せるよ。僕は鹿目まどかと契約出来れば他は関与するつもりはない」

ネオン「了解した」

まどか達を守るために動き出す上条当麻と仮面ライダー達。

まどか達を狙うQBと財団X。

両者の思惑が交差して物語は加速していく。

## 第6話 蔓延する『G』 / 決意

『まどかサイド』

まどか「今日一日で本当に色んな事があつたなあ……」

まどかは今日一日の出来事を思い返す。

まどか「こんな経験一生ないんじゃないかなあ……」

まどかはそう呟いた。

上条はまどかよりも遅く帰ってきたので、洵子に説教されていた。

まどか「昨日の夢はホントになんだったんだろ……」

まどかの脳裏に浮かぶのは昨晚見た夢。

まどか「考えても仕方ないか。よし寝よう!」

『さやか』

さやかはハイテンションになっていた。

さやか「今日一日ですごいことが起きたもんだね。今日始めて出会ったばかりの上条さんが仮面ライダーになったり、ママさんは魔法少女だったり、風都の仮面ライダーが来てくれたり、正義のヒーローが集結ってやつかな!」

正義の味方に憧れをもっているさやかにとって、今日という日はと

ても喜ばしいかったのではないか

さやか「きゆうべも魔法少女になったら、何でも願いを叶えることが出来るっていうし…なんか夢みたいだよ。恭介にもこの話をしておこつと。」

上条さんのことも聞いてみるかな…今更気付いたけど同じ苗字だし…そういえば、左さんとフィリップさんで仮面ライダーWになって照井さんは仮面ライダーアクセルに変身するけど、上条さんは仮面ライダーだけで名前がないからな」

今日はもう寝ところかな」

さやか「そういえば、左さんとフィリップさんで仮面ライダーWになって照井さんは仮面ライダーアクセルに変身するけど、上条さんは仮面ライダーだけで名前がないからな」

さやか「もう寝ようかな…」

『マミサイド』

マミは確かな幸せを感じていた。

今までクラスメートとも碌に話すことの無かったマミが新しく転入してきた転校生と仲良くなって、親しいクラスメートが出来た。

そのクラスメートは仮面ライダーに変身して戦った。

ドーパントとかいう得たいの知れない怪物に襲われた時は、風都の仮面ライダーが助けてくれた。

これまで、一人で見滝原を守り抜いてきたバマミにとっては信じられない出来事の連続だったのだ。

良い出来事ばかりが頭に浮かぶマミだが、一つの疑問が浮かぶ。

思い出されるのは昼間の魔女との戦い。

上条が変身したこともイレギュラーだったが、上条に倒された魔女

が少女になったことは予想外だった。

マミ「あれは一体どういうことなのかしら？きゅうべえ、あなたは何か知っている？」

QB「僕にも分からないんだ…でもあれは、人間じゃないかもしれない」

マミ「え…？」

QB「もし魔女に殺された人間なら、原型を留めている筈がないだろう？それに、魔女が僕達を騙す為に姿形を変えた可能性もある」

マミ「魔女はそんなことも出来るの？」

QB「僕も魔女の事を全て把握しているわけじゃないんだ。何にせよ警戒したほうがいいだろうね」

マミ「分かったわ」

QB「（彼女に余計な事を知られれば、まどかの契約の障害になるかもしれないからね）」

QB「もうこんな時間だし僕達も休もう」

マミ「そうね。おやすみきゅうべえ」

『…』

「…」

真夜中の見滝原を一人の少女が歩いていた。

目には隈が出来ており、その手にはガイアメモリが握られていた。

不良1「こんな時間にどうしたの？」

不良2「もしかして家出？」

不良3「俺達の所にも来ない。滅茶苦茶楽しいぜ」

少女は男達を見据えてガイアメモリを自らの首筋に突き刺す。

『スミロドン！！』

少女の姿が見る見る内に変貌していく。

不良1「ば…化け物！！」

「…ギヤアアアア！！」「…」

『スミロドンドーパント』は不良たちの肉体を引き裂く。  
変身を解除した少女は街中を歩きながら呟く。

???「お願いだから姿を見せてよ…夏美ィ…」

翌日

まどか「おはよう」

さやか「おはよー」

仁美「おはようございます」

まどか「さやかちゃん昨日は大変だったよね」

さやか「大変だったけど、すごい体験だったよね」

仁美「お二人ともどうなさったんですか？」

さやか「ちよつと色々あつてね」

まどか「説明しようとしたら時間がかかりそうだから、後で話すね」

仁美「そうですか…」

まどか「どうしたの仁美ちゃん？元気がないみたいだけど…」

仁美は昨日に自分の身に起きたことをまどか達に話した。

下校中に不良達に絡まれている所である人物に助けられたということ。

お礼をする前に帰ってしまったことため名前を聞くことが出来なかったということ。

さやか「でも、名前を知らないんならどうしようもないんじゃない？」

仁美「そう言われましても…」

まどか「その人の特徴みたいなのはなかった？」

仁美「見滝原の制服を着ていたけど、見たことがないので他の学年の方がもしれません」

さやか「ふむふむ」

仁美「そういえば、特徴的な髪型の方でしたわ」

まどか「どんな髪型なの？」

仁美「まるで…ウニのような髪型の方でしたわ」

さやか「まどか…それってもしかして…」

まどか「上条さんのことなのかな？」

仁美「あの方をご存知なのですか？」

まどか「多分…放課後に会うことになるから仁美ちゃんも来る？」

仁美「今日は習い事がありますので…」

さやか「私達が確かめておこうか？」

仁美「お願いします」

まどか達の一連のやりとりが終わった後、授業が始まり放課後になった。

『さやかサイド』

さやか「ねえ、あなたの親戚に上条当麻って人はいない？」

恭介「いや、僕の親戚に上条当麻って人はいないんだけど…どうしたんだいさやか？」

さやかは幼馴染の上条恭介に上条当麻の事を相談していた。

恭介「大変そうだね：それはそうとさやか。何だか随分機嫌が良さそうだけど何かあったのかい？」

さやか「そうなんだよ！！実は…」

さやかは魔法少女や仮面ライダーのことを話す。

恭介はさやかの話を信じる気は全く無いらしく適当にあしらっていた。

そしてさやかは魔法少女体験ツアーのため恭介の病院を後にしたのだった。

『見滝原市内にて』

マミの見滝原内のパトロールに同行するまどか達。  
そこで仁美のことを上条に聞くまどかとさやか。

上条「あの子はお前達のクラスメイトだったのか。まあ無事でよかったよ」

まどか「やっぱり上条さんだったんだね」

さやか「仁美がお礼したいって言うてるんですけど、本当にいいんですか？」

上条「いいも何も俺が勝手にやったことなんだから、別にお礼されるようなもんでもないだろ？」

マミ「上条君はホントにお人よしね」クス

上条「そうか？」

さやか「そういえば、上条さんはガイドライダーや変身した後の名前は考えたんですか？」

上条「名前？」

さやか「上条さんだけガイドライダーの名前やライダーの名前がないじゃないですか！左さんとフィリップさんはWで照井さんはアクセルだし、上条さんだけ名無しじゃ虚しいじゃないですか！」

上条「別に俺は気にしないけどな……」

まどか「でもやっぱり名前があったほうがいいんじゃないかな？」

マミ「美樹さんと鹿目さんのいう通りよ上条君。名無しの仮面ライダーなんて恥ずかしいわよ」

上条「（恥ずかしいのか？）」

さやか「上条さんのガイドライダーの呼び方はクロスドライバーで行きましょうー！」

上条「分かったよ」

さやか「問題は仮面ライダーの名前なんですけど…」

マミ「仮面ライダーIBとかどうかしら？」

上条「IBはどういう意味なんだ？」

マミ「イマジンプレイカーの略称よ。イマジンメモリとプレイカーメモリで変身するからそれでいいんじゃないかしら？」

さやか「仮面ライダーシルバーとかどうですか？変身したときの色が銀色だから」

まどか「仮面ライダーXとかどうかな？」

上条「仮面ライダーXでいいんじゃないか？分かりやすいし」

自分の出した案が採用されて喜ぶまどか。  
反対にマミとさやかは沈んでいた。  
そうこうしている内にパトロールは終了していた。

マミ「今日は魔女に出くわさなかったわね」

上条「それは良い事だろ？」

マミ「それもそうね」

さやか「それじゃあこれでお開きにしますか」

まどか「そうだね」

本日は魔女に遭遇することも無かった。

『Wサイド』

翔太郎と照井は見滝原市で異常は起きていないか見回りを行っていた。

翔太郎「本当に魔法少女になっちまった子達は助けられねえのかよ……」

照井「フィリップを信じるしかないだろう……」

魔法少女の真実を知った翔太郎達のショックは大きかった。

そこで、パトロールを続けていた二人の前に一人の少女を現れた。少女はぼそぼそと相手に伝わらない程度の声量で呟いていた。

翔太郎「こんな時間にうるついちやだめだろ」

照井「早く家に帰るんだ。家族も心配しているだろう」

そう少女に問いかける二人だったが、少女の手に握られている物に気付く。

少女の目には濃い隈が出来ており、その手にはガイアメモリが握られていた。

「……?」

翔太郎「フィリップ……」

翔太郎は手持ちの携帯電話でフィリップに連絡する。

フィリップ「どうしたんだい？」

翔太郎「ドーパントだ…」

照井「来るぞ!!」

少女はガイアメモリを自らの首筋に差し込む。

『スミロドン!!』

少女の身体は見る見る内に変貌していく。

翔太郎「こいつは…」

照井「ミュージアムの幹部のガイアメモリを…」

二人の目の前に現れたのはかつて二人をおいつめた『スミロドン  
ーパント』だった。

（実際に変身していたのは、園崎家が飼っていた飼い猫のミックだ  
ったが…）

『サイクロン!! ジョーカー!!』

『アクセル!!』

翔太郎&フィリップ「変身!!」

照井「変…身!!」

二人は『W』と『アクセル』に変身した。

W「さあお前の罪を数えろ!!」

アクセル「振り切るぜ!!」

『スミロンドーパント』は仮面ライダーの姿を見るなり一直線に向かってきた。

『スミロンドーパント』は『アクセルトリアル』に匹敵するほどの速度を誇る強敵なのだが、一度戦ったことのある相手の上、相手が人間が変身したドーパントなので動きも読み易かった。

フリリップ「翔太郎！相手は高速戦闘が得意だからルナトリガーで行くよ！」

翔太郎「分かった！」

『ルナ!!トリガー!!』

照井「この程度ならばトリアルにならずとも対応出来る！」

ルナトリガーの形態となったWの攻撃は全弾直撃して、アクセルがエンジンブレードで切り裂く。

W「これでとどめだ!!」

アクセル「一気に決めるぞ!!」

『ルナトリガー!!マキシマムドライブ!!』

『エンジン！！マキシマムドライブ！！』

W「トリガーフルバースト！！」

アクセル「ハアアア！！」

『W』と『アクセル』のマキシマムドライブが直撃して『スミロド  
ンドーパント』の体が爆発した。

翔太郎「とにかくこの子を連れてフィリップたちの所へ一旦戻るか」

照井「ガイアメモリを手に入れた経緯を聞く必要があるからな」

二人は少女を連れてフィリップ達のもとへと戻っていった

『見滝原市内のビジネスホテル』

亜樹子「こんな子がガイアメモリを所持しているなんて…」

照井「子供がガイアメモリを所持していることから、見滝原にガイ  
アメモリが蔓延している可能性は高いだろう」

フィリップ「どうやらそろそろ起きそうだね」

???「う…ここは…?」

翔太郎「目が覚めたみたいだな」

???「貴方たちは？」

翔太郎「左翔太郎。探偵だ」

フィリップ「僕はフィリップ。翔太郎の相棒さ」

亜樹子「私は鳴海亜樹子。探偵事務所の所長よ」

照井「俺は照井竜。刑事だ」

????「探偵と刑事……」

翔太郎「どうしてガイアメモリを所持していたのか教えてくれないか？」

少女が簡単に話すわけがないだろうと考えていた翔太郎達。

しかし、少女はあっさりとガイアメモリを入手した経緯を翔太郎達に語った。

少女の名前は、檜山冬香という。

ある日、親友の中山夏美が行方不明になって当初は警察に相談したが全く進展が見られず、自ら中山夏美を見つけるために見滝原を探し回ったが結局見つからなかった。

途方に暮れているところを黒服の男が現れて、これを使ったら親友が見つかるかもしれないと渡された。

ガイアメモリを使用したら、感覚が研ぎ澄まされて色んな音が聞こえるようになった。

中山夏美を見つけることが出来るかもしれないと意気込んでいたが、結局中山夏美が見つけることが出来なかった。

フィリップ「中山夏美は姿を消す前に君に伝えていたことはないかい？」

冬香「そういえば、魔法少女になったら何でも叶うとか言っていたような…」

「「「「!?!?」「」「」」

冬香「魔法少女なんているわけないんですけどね…夏美はケーキが好きでしたから好きなだけケーキが食べたいとかいってましたけどね…」

翔太郎「そうか…」

冬香の一言で翔太郎達の頭の中には最悪の結果が浮かんだ。

もし、中山夏美が魔法少女になっていたらとしても親友に一言も告げずに姿を消すことはあまりにもおかしい。

即ち、中山夏美は殺害されているか魔女化しているという可能性が非常に高い。

檜山冬香が翔太郎達にこのような話を躊躇いもなく話していることから、彼女自身もすがるような気持ちだったのかもしれない。

翔太郎「冬香ちゃん。君の親友の捜索に俺達も協力させてくれないか？」

冬香「え…?」

冬香は翔太郎の言っていることが信じられなかった。

正直言つて今の自分の置かれた状況を誰でもいいから聞いてほしいのだ。

だからこそ、翔太郎の一言は冬香にとってあまりにも意外だった。

冬香「本当にいいんですか？」

翔太郎「ああ。だから心配すんな。人数が増えれば発見できる可能性が増えるからな」

冬香「あ、ありがとうございます!!」

冬香は涙を流しながら頭を下げる。

夜中ということもあり、他の部屋に冬香を連れて行って休ませた亜樹子。

亜樹子が翔太郎達の部屋に戻ってきてからフィリップが口を開いた。

フィリップ「恐らく財団Xときゅうべえは繋がりを持っている。中山夏美の失踪と関連して檜山冬香にガイアメモリを渡していたことから決定的だ」

亜樹子「今までガイアメモリを使ってきた人達は自分のために使ってきたけど、冬香ちゃんも友達のことを心配していただけなのに…」

照井「そこを財団Xに付け込まれた」

翔太郎「絶対に助けるぞ」

翔太郎の一言にフィリップたちは無言で頷いた。

翔太郎「フィリップは本当に魔法少女を助ける方法がないか徹底的に調べておいてくれ」

フィリップ「了解。今回の件は僕にとっても本当に腹立たしいからね」

翔太郎「照井は俺と一緒に行動してくれ」

照井「分かった」

翔太郎「亜樹子はあの子と一緒に行動しておいてくれ」

亜樹子「うん」

翔太郎達は動き出す。

二人の少女を救うために。

## 第7話 『M』を救え！／暴走する力

『マミの自宅』

まどか「このケーキ凄く美味しいですよマミさん！」

さやか「プロ級って言っても過言じゃないですよ！」

マミ「二人とも大袈裟よ」クス

上条「うう…こんな美味しい物を無料で食べれるなんて…上条さんは最高に幸せですよ…」グスツ

まどか「ええ〜…」

さやか「何も泣かなくても…」

マミ「上条君は大袈裟すぎるわよ…」

上条の反応のドン引きする三人。

まどか「そういえば上条さんは、家で暮らし始めてからよく幸せだ  
って言ってるよね」

上条「だって、三食腹一杯食べることが出来て、広々とした空間で  
寝ることが出来るんだぞ…！」

さやか「上条さん。そんなこと言うなんて記憶が戻ったんですか？」

上条「いや。全く思い出せない」

マミ「記憶を失う前の生活が身体に染み付いているんじゃないかしら？」

さやか「もしかしたら、記憶を失う前の上条さんはホームレスだったりして」

上条「マジかよ…不幸だ…」

さやか「冗談ですよ」

マミ「（彼の話聞いた限り、本当にホームレスだったんじゃないかしら？）」

充実した時間が過ぎていく。

翌日、病院に来ていたまどかとさやかはグリーンフィードを見つけた。上条とマミと翔太郎に連絡を取ったまどか達だったが、さやかは様子を見ると言って結果の中に進み、まどかはマミ達の到着を待っていた。

（ちなみに、上条とマミは現場から近い場所にいたため到着にあまり時間は掛からなかった）

マミと上条が現場に到着した時に、もう一人の魔法少女である暁美ほむらがその場に現れた。

ほむらから、今回の魔女は今までの魔女と異なり非常に危険なので戦うべきではないと忠告された。

しかし、マミはほむらの忠告を無視してほむらを魔力で練られた紐のような物で拘束した。

上条「おい巴。いくらなんでもやりすぎじゃないか？」

マミ「大丈夫よ。彼女は魔女を倒したら開放するから」

まどか「ほむらちゃん…」

ほむらをそのままにしておき、先へ進む三人

ほむら「（任せたわよ。上条当麻…）」

さやかのもとに到着した三人。

変身しようとする上条をマミが止める。

マミ「此処は私一人で十分よ」

マミは使い魔達を蹴散らして、魔女との戦いを開始する。

遅れて病院に翔太郎と照井が到着する。

翔太郎「あいつらに人間を殺させるわけにはいかねえ！」

照井「手遅れになる前に急ぐぞ左！！」

魔女の結界に侵入する二人。

そこで翔太郎と照井は、拘束された状態の暁美ほむらに遭遇する。

翔太郎「君は？誰がこんなことを？」

ほむら「逃げなさい。一般人が来てもいいところじゃないわ」

翔太郎「生憎俺達は一般人じゃないんでな」

照井「上条達はこの奥か、急ぐぞ！」

翔太郎「早くしないと間に合わないかもしれないからな」

照井「君は少しだけ待っててくれ。後で助けに来るからな」

二人は上条達の下へ急ぐ。

結界の最深部ではマミと魔女が戦闘を始めていた。

しかし、魔女はマミを攻撃する気がないのか全く反撃していなかった。

上条「（巴に魔女を殺させるわけにはいかねえ。でも、下手に割り込んだら巴が魔女の反撃を受けるかもしれない…）」

上条が考えているうちに、マミは魔女にとどめを刺そうとしていた。マミの目の前に巨大な大砲が出現する。

マミ「ティロ・ファイナーレ！！」

巨大な大砲が火を吹き魔女の身体を貫く。

まどか「やったあ！！」

さやか「すごいよマミさん！！」

マミ「ぎつとこんなものね」

マミはまどか達の方を向いて、その場から離れようとした。瞬間、魔女の身体から新たな身体が出現した。



照井「ボサツとするな左！早く上条を助けるぞ！」

翔太郎は仕事柄人間の死体を見ることもあるが、それでも相当シロツクを受けていた。

反対に照井の行動は早かった。（彼自身、家族が粉々に粉碎されるところを見たこともあるが…）

二人は急いで上条の下へ近づく。  
そんな時だった…

上条「…クク…ク…ハハハッハアハハ！！」

「「「「「！！？」」「」「」」

上条が突然大声で笑い始めたのだ。

上条「まさかこの程度で俺の幻想殺し（イマジンプレイカ）を潰せるとか思ってたんじゃないやねえだろうなあ！！！！」

少年は引き裂いたような笑みを浮かべながら魔女に向かって告げる。  
まどか達は、上条の豹変にただ驚くことしかできない。

それは翔太郎達も同様であった。

この程度？何を言っている？

腕を食い千切られるなんて、意識を保つどころかシロツク死してもおかしくない重傷なのに…

それに、目の前の男は自分達が知っている上条当麻なのか。

引き裂いた笑み、この状況を心底楽しんでるような言動、何より雰囲気が普段の上条と異なりすぎているからだ。

上条「今度は俺がためえを喰らってやるよお！！」

上条がそう言い終わった途端、上条の右腕から竜の顔を現れた。

竜王の顎「グオオオオオオオオオオ!!」

魔法の結界内に竜の咆哮が響き渡る。

まどか達は身動き一つ取ることが出来なかった。

意外なことに、それは魔法も同様であった。

恐怖とは無縁の存在であると言える、魔法ですらその身体を動かすことが出来なかったのだ。

少年は魔法に向かって歩いていく。

竜王の顎で魔法を喰らうために…

魔法の目の前に移動した上条。

そこで彼に異変が起きた。

上条「ぐあああぁっあ!!」

少年が突然叫び始める。そして上条が叫び終わった後、彼は突然何かを呟き始めた。

上条「テメエが何者かは知らねえ…テメエが何をしようとしているのかも知ったことじゃねえ…ただ、ここでは黙ってる。こいつは俺が片付ける」

ずるずると湿った音が発せられた。

そして、上条の右肩から右腕が伸びていた。

その光景はあまりにも異質だった。

まどか「な…なにあれ？」

さやか「怖い…」

マミ「あ…あ………」

翔太郎「人間なのか…?」

照井「あいつは一体…」

上条の右腕が食い千切られる前の状態に戻る。

そして、上条の目の前にクロスドライバーと二つのガイアメモリが現れた。

上条は無言でそれらを身につけて、クロスドライバーに二つのガイアメモリを差し込む。

『Imagine!! Breaker!!』

少年は仮面ライダー<sup>クロス</sup>Xとなる。

『イマジンメモリ』と『ブレイカーメモリ』を更に強く押しこむ。

『Maximum Drive!!』

右手に強烈な光が収束し、そのまま魔女を殴りつける。

魔女は眩い光に包まれてその姿を変える。

光が消えると、その場には上条と少女の二人が倒れていた。

『財団X本部』

ネオン「新型の調子はどうだ?」

研究員「今の所問題はまったくありません。後は実戦経験を積みませ

るべきかと」

ネオン「了解した。ソウルジェムとガイドライバーの適合率は？」

研究員「基準値をクリアしています。また、出力の調整にも問題はありません」

ネオン「ミュージアム最深部の発掘調査の進行具合は？」

研究員「現在、十六個のガイアメモリが発掘されています」

ネオン「引き続き調査を行うように」

研究員「分かりました」

水面下で戦力を増強する財団X。

ますます深まる上条当麻の謎。

見滝原市を中心とした戦いは混迷を極めていく。

第8話 『U』の脅威／紅蓮の戦士（前書き）

今回から上条の変身後をXと表示させていただきます。

## 第8話 『U』の脅威／紅蓮の戦士

曉美ほむらは目の前の光景に啞然としていた。

少女が上条当麻に期待していたことは、魔女によるバマミの殺害の阻止だった。

しかし、バマミが殺害されるのは阻止できたが、上条の右腕が魔女に食われてしまった。

ほむらは時間を停止して、少年を助けようとしたが、少年の様子が一変した。

腕を食い千切られたはずなのに笑い出したり…その上無くなった右腕から竜の顔が出てきて…竜の顔が消えたと思ったら…食い千切られたはずの腕が再び生えてきたり…

魔女を人間の姿に戻したり、ソウルジェムを浄化したりするなど、只でさえ謎の多い存在だったが、ここに来て益々少年の謎は深まる。しかし、上条の能力はまだかの魔女化を阻止する上で重要な力となる。

例え、少年が更なる危険に晒されようとも少女は彼を舞台から降ろす気は全く無かった。

(上条自身、舞台から退場する気は全く無いようだが…)

QB「(彼の様子が変わった途端、異常な値のエネルギーが観測された。まだかの秘めた力すらも超えていた…)」

QBの身体が震える。

感情がないQBには本来あり得ないこと。

QB「(彼の力があれば本来の目的が果たせるかも知れないけど、彼の力は未知数でありにも危険すぎる)」

上条の力があれば、本来の目的が果たせる。しかし、上条の持つ力が予想外の結果を導きだすかもしれない。

QB「（それに、魔女から元の姿に戻った娘達から魔法少女としての力は消えていた。原理は不明だけど、彼の持つ力は魔法少女のシステムすら破壊するようだね…）」

QBは溜息をつく。

QB「（全く厄介な力だよ。彼は利用するより処分したほうがいいのかもしいね…）」

QBはイレギュラーである上条の排除を画策する。

『Wサイド』

フィリップ「そんなことが…」

翔太郎は先程の出来事をフィリップに話す。

フィリップ「食い千切られた右腕が再び生えてきたり、彼のマキシムドライブを受けた魔女が人間の姿に戻るなんてね…」

翔太郎「それに、上条の奴…右腕が無くなったのに笑ってやがった…」

照井「激痛で意識を保つ事さえ難しい筈なのに、あの時の奴はまるで上条本人ではないみたいだった」

フィリップ「ガイアメモリの力とは無関係みたいだしね…」

照井「魔女が人間の姿に戻ったという話もある」

翔太郎「本当に人間に戻ったかどうかはまだわかんねえが…」

フィリップ「もし、本当に人間に戻ったのならば、彼の存在は僕達にとっての切り札になるかもしれない」

翔太郎「暁美ほむらの件はどうなった？」

フィリップ「検索の結果、暁美ほむらは魔法少女ではないみたいだ…」

翔太郎「おかしいだろ。まどか達の話だと確かに魔法少女って…」

照井「暁美ほむらも上条当麻と同じイレギュラーということか？」

フィリップ「断定は出来ないけどね。それに、まどかちゃん達に魔法少女になってはいけないと警告したり、きゅうべえを殺そうとしていたらしいからね」

翔太郎「暁美ほむらは魔法少女の真実を知っているってことか？」

照井「それだけじゃない。今回の魔女との戦いでも巴マミに忠告を行っていたらしい。今までの魔女とは異なるから戦うべきではないと言っていた…」

フィリップ「彼女は僕らの知らないことも知ってそうだね」

翔太郎「接触しておいたほうがいいか…」

フィリップ「そうだね。彼女から色々話が聞けるかもしれないしね」

照井「分かった」

『見滝原総合病院』

魔女の戦闘から三日が経った。

上条はあれから眠り続けている。

上条が入院したことを聞いて、まどかの両親も病院に来た。詢子と知久への説明は照井が行った。

まどか達はマミを残して病室を出る。

マミは上条が倒れてから三日間、ずっと看病を続けていた。

マミは懺悔する様に呟く。

マミ「ごめんなさい…」

もし、自分が曉美ほむらの忠告を素直に聞いていれば。

もし、魔女相手に油断せずに戦い続けていれば。

一緒に戦ってくれる仲間を自分のせいで傷つけてしまった。

少女は涙を流す。

『帰り道にて』

まどか「上条さんとマミさん大丈夫かな…」

「さやか「上条さんは目覚めないし、マミさんは落ち込んだままだし…」

まどかとさやかの気持ちも沈んでいた。

魔法少女に憧れを抱いていた二人にとって、今回の出来事はあまりにも衝撃的だったからだ。

もし、魔女との戦いで上条が乱入していなかったら、バマミは確実に死んでいただろう。

上条が右腕を失ったときも、右腕が生えるなんて出来事が起きなかつたら、一生右腕を無くしたままだっただろう。

ある意味、今回は運が良かったのかも知れない。

魔法少女として戦うことは、常に死と隣り合わせであることを実感した二人。

そんな二人に翔太郎は…

翔太郎「あの二人なら大丈夫だ」

照井「上条もいつまでも寝ている奴ではないだろう」

二人がまどかとさやかを励ます。

しかし、二人の励ましはあまり効果がなかったようである。

自宅に向かう翔太郎達の前に、黒服の男が立ち塞がる。

そして、男はガイアメモリを取り出し、自身の額に突き刺す。

『ブリザード…!』

翔太郎「こんなときにもドーパントが現れるのかよ…」

照井「ばやくな左!行くぞ!」

翔太郎はフィリップに連絡してガイドドライバーを取り出し、照井もアクセルドライバーを取り出す。

『サイクロン!!! ジョーカー!!!』

『アクセル!!!』

『W』と『アクセル』が現れる。

「さあ!!! お前の罪を数えろ!!!」

「振り切るぜ!!!」

まどか達を後ろに下げて、『ブリザードドーパント』に向かう二人。そこで、『ブリザードドーパント』はあるものを取り出した。照井は、それに見覚えがあった。

照井「それは…まさか!?!」

『ブリザード・Upgrade!!!』

強化された『ブリザードドーパント』が猛威を振るう。圧倒的な力に翻弄される『W』と『アクセル』。まどか達に危機が迫っていた。

『見滝原総合病院』

上条「……っ」

上条の意識が覚醒する。

マミも上条が目覚めたことに気付いたようで…

マミ「上条君、気がついたの!？」

上条「ここは？」

マミ「病院よ。貴方は三日間眠り続けていたのよ」

上条「そうか…」

上条は、マミの目元が腫れていることに気付いた。

マミは上条の目を見て…

マミ「ごめんなさい。私のせいで貴方に大怪我を負わせてしまって…」

上条「気にすんなよ」

マミ「私が曉美さんの忠告をちゃんと聞いていれば…!」

上条「お前が無事だったんだからそれでいいだろ?それに、俺が助けたと思って勝手に行動しただけだ。お前が気に病む必要なんて何一つ無いんだよ」

マミ「でも…!？」

上条「じゃあさ、何一つ失う事なく皆で笑って帰るってのは俺の夢だ。だからそれが叶うように協力してくれよ」

マミは上条の一言を聞いて救われた気がした。

普通の人間ならば、他人を庇って重傷を負ったなら、庇った相手を責め立てるかもしれない。

だが、上条当麻は普通ではない。

彼は他人が不幸になることを望まない。

苦しんでいる人間のためならば、親交の有無、自身の危険すらも考えない。

それが、上条当麻という人間である。

バマミは、たった一人で見滝原を魔女の脅威から守り抜いてきた。

それゆえに彼女の責任感は一層強く、今回の件は彼女を苦しめていた。

しかし、恨み言を言われると覚悟していたマミの幻想は少年によって殺された。

上条「辛い事があっても一人で抱え込むなよ。友達なんだからさ……」

幼い頃に親を亡くし、魔法少女として一人で戦い続けていた少女が報われた瞬間だった。

マミ「あり……が……とう……」グス

上条「おいおい泣くなよ……」ナデナデ

少年は少女の頭を撫でる。

上条「何だか寒くねえか？」

マミ「おかしいわね。さっきは寒くなんてなかったのに……」

マミはカーテンを開ける。

「マミ」「これって…!」

上条「どう考えても、ドーパントの仕業…だな」

周囲の建物が凍り付いており、明らかに異様な事態にマミと上条はドーパントの仕業と推測する。

上条「まどか達が危ないかもしれねえ! 急ぐぞ!」

マミ「待つて! 貴方はまだ病み上がりだから私が行くわ!」

上条「病み上がりとか言つてられねえよ! 俺も行く!」

マミ「…分かったわ!」

二人はまどか達の下へ急ぐ。

W「ヒートの熱量でも対応できないなんて…」

アクセル「こつちも対応できない」

まどか「寒い…」ガタガタ

さやか「このままじゃ…」ガタガタ

『アクセル』は『ブリザードドーパント』と戦い『W』はまどか達を守っていた。

『アクセル』は『W』のヒートメモリ以上の熱量を誇っているため、

戦いを担当することになった。

しかし、『アクセル』でも『ブリザードドーパント』の放つ冷氣に対応し切れていないようで徐々に身体が凍結していく。

Wは戦いに参戦することが出来ない。

ヒート以上の熱量を誇るアクセルを凍結させることが出来る相手と戦うのは自殺行為だからである。

更に、まどか達から離れてしまえば、彼女達は凍結する危険性が出てくる。

震えるまどかとさやかに向かって、どこからともなく現れたきゆうべえは…

QB「まどか！さやか！今すぐ僕と契約を！君達が魔法少女になれば皆助かるんだ！」

契約することに戸惑いを見せるまどか達と、動きが取れない『W』に気付いた『ブリザードドーパント』は氷の槍を作り出し、『W』に向かって投擲する。

『W』だけなら氷の槍を避けることは出来る。しかし、彼の後ろにはまどか達があり、『W』が氷の槍を避けるとまどか達に直撃してしまう。

このままでは自分たちは確実に死ぬ。

そのことを理解したまどか達は契約を了承しようとした。

しかし…

上条「うおおおおおお！！！」

バキン！！

上条当麻が『ブリザードドーパント』と『W』の間に入り、氷の槍に向かって右手を突き出した。

瞬間、少年の右手に触れた氷の槍は跡形もなく消滅した。

W「槍が消えた!?!」

マミ「喰らいなさい!?!」

間髪入れずに巴マミが『ブリザードドーパント』に銃弾を放つ。  
突然の攻撃に怯んだ隙に『アクセル』はエンジンブレードの一撃を  
入れる。

まどか「上条さん!?!マミさん!?!」

さやか「助かったあ…!」

W「形勢逆転かな」

アクセル「良いタイミングだな」

上条「色々とすみませんでした」

マミ「心配掛けてごめんなさいね」

上条とマミの復帰に歓喜するまどか達。

上条とマミが『ブリザードドーパント』の方を向く。

上条「こいつを早く倒さないと凍った人達が危ないかもしれない」

マミ「そうね。早く倒しましょう」

上条の目の前にクロスドライバーとイメージメモリとブレイカーメ

モリが出現する。

『Imagine!!Breaker!!』

上条「変身！」

上条は白銀の戦士となる。

しかし、今までとは異なる点が一つだけあった。

上条の正面が光り輝き、その中から新たなガイアメモリが出現したのだ。

W「『E』のメモリ？」

？「使えってことか？」

上条はクロスドライバーに新たなガイアメモリを差し込む。

『Experience!!』

音声が鳴り響き、そして更に新たな音声が流れる。

『Fortis931!!』

上条の身体が紅蓮の炎に包まれる。

炎が止み、上条の身体は白銀から赤に染まっていた。

W「メモリチェンジした!？」

アクセル「一体どういうことだ？」

まどか「綺麗…」

さやか「凄い…」

マミ「上条君…」

上条は両手を交差させる。その手に炎を伴いながら…

？「灰は灰に…塵は塵に…吸血殺しの紅十字！！」

炎の十字架が『ブリザードドーパント』へ襲い掛かる。

しかし、『ブリザードドーパント』は上条の攻撃を間一髪のところ  
で避けた。

一方の上条は何かを唱えていた。

？「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ。それは  
生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。それは  
穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。  
その名は炎！ その役は剣！ 顕現せよ！ 我が身を喰らいて力と  
為せ！！」

上条の目の前に炎の巨人こと魔女狩りの王イノケンティウスが現れた。

W & アクセル「炎の巨人！？」

まどか「大きいねさやかちゃん…」

さやか「うん…」

マミ「凍っていた場所が元に戻っていく…」

撰氏三千度を誇る魔女狩りの王の炎になすすべもなく『ブリザード  
ドールパント』は倒されていた。

第9話 裏切りの『W』 / 少女達の想い(前書き)

まどか「本編を見ていない？」

主「ゴメンナサイ…」ダラダラ

まどか「そっかぁ…マミさん」

マミ「ええ…」

主「やめてくださいお願いします…！」ゴリ

マミ「ティロ・フィナーレ…！」ズドン…！！

## 第9話 裏切りの『W』 / 少女達の想い

『まどかサイド』

『ブリザードドーナツ』の戦いから三日後、上条も退院してまどか達も普段通りの生活を送っていた。

本日はまどかとさやかで二人で下校していた。

(上条は買い物、マミはパトロールをしていた)

さやか「魔法少女かあ……」

まどか「どうしたのさやかちゃん？」

さやか「いやさ……ここんところ色々ありすぎて話せなかったけど、きゆうべえと契約して魔法少女になるなら、どんな願いも叶えることが出来るって言ってたじゃん」

まどか「うん」

さやか「前は金銀財宝とかがいいかなって思ってたけど、そんな簡単に決めていい問題じゃないと思うんだよ。この前のこともあったし……」

まどか「……うん」

二人は約一週間前の出来事を思い出す。

マミを殺害しようとした魔女から、彼女を庇い腕を魔女に喰われた少年。

直後に奇妙な出来事が起きて、少年の右腕は魔女に喰われる以前の

状態に戻ったが…

魔法少女に憧れを持つ二人の少女にとってはあまりにも衝撃的な出来事だったからだ。

マミが命を失わなかったのは上条がマミを庇ったから…  
上条の腕が元に戻ったのは奇妙な出来事が起きたから…  
端的に言えば運が良かっただけである。

さやか「それに、左さん達もいるしあたし達が魔法少女になって戦う必要ってあるのかな…？」

まどか「わかんないけど…」

マミや左達や上条は人々を守るために戦っている。

中途半端な覚悟で魔法少女になるべきではないと言ったマミの言葉が二人の心に重くのしかかる。

二人が沈んだ気分で、自宅に向かっていった途中…

ギヤアアアアア！！

突如叫び声が聞こえた。

まどか「な、何！？」

さやか「まどか！行くよ！」

二人は、声が聞こえた方向に走る。

そこにいたのは、血塗れで倒れている男性と、拳が赤く染まっ  
て返り血を浴びていた『仮面ライダーW』だった…

男性からは夥しい量の血が流れ出ており、中学生のまどかとさやかも直感で理解した。

男性は死んでいると…

まどか「…なん…で…?」

さやか「…ッ!」

呆然としている二人だったが、一足早く我に帰ったさやかがまどかの手を引っ張り、その場から離れた。幸い『W』に二人が気付かれることはなかったようだ。

まどか「さやかちゃん…」

さやか「と…とにかく! マミさんに連絡!」

さやかは携帯電話を取り出し、マミに連絡を取る。マミにさやかの態度が普通ではことを悟り、きゆうべえを連れて急いで二人の元に駆けつけた。

マミ「一体何があったの?」

まどか「マミさん…」

さやか「実は…」

さやかは先程の光景をマミに語る。

マミもさやかの行っていることは信じられなかったようだ。

マミ「そんな…なんで…」

マミの問いに答えるられる人間はこの場にいない。

翔太郎達には二回程しか会っていないが、少なくとも人殺しをするような人間には思えなかった。

冗談だと信じたかった。しかし、それはまどかもさやかも同様であった。

まどかもドーパント達から助けられるような人間が人殺しなんて信じたくなかった。

さやかは正義の味方というものに少なからず憧れを抱いており、彼女が抱いていた淡い幻想が殺されたのだからそのショックは計り知れない。

しかし、まどかとさやかは見てしまった。

正義の味方と信じていた人間が血塗れになっている姿を。

そこで、黙っていたきゅうべえがまどか達に話す。

QB「僕も詳しいことは分からないけど、仮面ライダーには注意したほうがいいのかもしれないね」

きゅうべえの言葉を聞いて、さやかがまどかとマミに尋ねる。

さやか「…もしかして上条さんも人殺しなのかな？」

まどか「それは違うよさやかちゃん！」

マミ「そうよ！だって上条くんは…！」

さやかの言葉にまどかとマミは否定の言葉を述べる。

まどかは短い間だが、上条と一緒に暮らしてきて、上条の性格を把握していた。

『不幸』という言葉が口癖のお人好し。

マミは上条に命を救われた。

下手をすれば自らの命を失ってしまうかもしれないという方法で。

さやか「そうですね。ごめんなさい……」

さやかも二人の言葉を聴いて納得する。

しかし……

QB「でも、彼は記憶喪失って言ってたよね？もしそうなら彼は記憶喪失だからこそ、僕達の味方をしてくれるだけで、記憶が戻ったら彼は敵になるのかもしれない」

きゆうべえの言葉に反論しようとする三人

しかし、言葉が見つからない。

自分達が接している上条当麻は記憶喪失だからこそ、自分達の味方であってくれるだけで、記憶を失う前の上条について何一つ知らない。

意気消沈する三人にきゆうべえは告げる。

QB「とにかく、彼らには気をつけるべきだと思っよ」

『Wサイド』

翔太郎「暁美ほむらだな？」

ほむら「貴方達は？」

ほむらは二人の男とお菓子の魔女の結界内で出会った。

あの時は自己紹介などしていない。

結界の最深部でも二人を見かけたことから、まどか達と何らかの関わりを持っているとほむらは推測する。

翔太郎「俺は左翔太郎。探偵だ」

照井「照井竜だ。風都署の刑事をしている」

ほむら「探偵と刑事が何の用かしら？」

ほむらは二人の応対に時間が取られることに苛立っていた。今は余計な事に時間を割いている余裕はない。いざとなれば、時間停止してこの場を切り抜ける。

本来なら、ソウルジェムが穢れてしまったため多用は出来ないが、上条の謎の力によってソウルジェムの穢れは浄化されている。そのため、二人から逃げることは造作もないことだった。そして翔太郎が口を開く。

翔太郎「魔法少女の真実について聞きたいことがある」

ほむら「ッ!!」

瞬間、ほむらは魔法少女に変身する

そして、二人に対して臨戦態勢を取る。

この男達は一体何者だ？

何故、きゆうべえしか知るはずのない情報を知っている？

ほむらが知っているのは、彼女自身の存在がこの時間軸においてイレギュラーであるためである。

目の前の何の変哲もない人間が知っているはずがない。

上条が話したのではないかと考える。

しかし、それは違つとほむら自身が否定する。

あのお人好しが簡単に口を割るはずがない。

あらゆる可能性について考えるほむらに翔太郎は告げる

翔太郎「君が何を知っているのかは分からないが、俺達は魔法少女になる人間をこれ以上増やさないために動いている。話を聞かせてくれないか？」

魔法少女の真実を知っているのなら、普通は自ら関わろうとなんて考えないだろう。

上条当麻のようなお人好しでもない限り…

照井「コイツの相棒に特殊な力を持った人間がいる。魔法少女の真実もそいつの力を使って辿り着いた」

赤いジャケットの男が答える。

ほむら「信じられないわね」

翔太郎「なら、俺達が泊まっている所に来てくれないか？そこなら照井の言っていることを証明で出来るんだが…」

ほむら「…分かったわ」

真実だろうが罠であろうがほむらは二人についていく事を決める。

ほむらの能力があれば、逃げることは可能。

しかし、この二人の言っていることが真実だとすれば、まどかの魔法少女化の阻止に大きな力となる。

ほむらが二人に着いて行った先にあったのは、ビジネスホテルだった。

そこにいたのは、見た限り高校生くらいの男と女子中学生くらいの女が居た。

フィリップ「僕の名前はフィリップ。君が暁美ほむらちゃんだね？」

亜樹子「私は鳴海亜樹子。よろしく」

ほむら「ええ。早速だけどどうやって魔法少女の真実に辿り着いたのか教えてもらっていいかしら？」

フィリップ「ああ。それは『地球の本棚』にアクセスしたんだよ」

ほむら「地球の本棚？」

フィリップはほむらに『地球の本棚』の説明をする。

『地球の本棚』

地球の記憶の全てが存在するアカシックレコードのような精神世界。真っ白な空間に無数の本棚が並んでおり、それらが一冊一冊が「地球の記憶」のデータベースとなっている。使用者が検索をかける（キーワードを唱える）と自動的に本が選抜されていき、任意の情報が入った本を絞り込むことができる。

ほむら「そんな物があるなんて…」

ほむらは驚愕する。

時間を繰り返してきたほむらも知らない情報。

同時にほむらは自身の無力さを痛感する。

まどか達に地球の本棚について教えれば、まどかの魔法少女化を阻止出来るということ。

過去に自分が伝えて、信じてもらえなかったことも確たる証拠があれば信じざるを得ない。

驚愕しているほむらにフィリップは問いかける。

フィリップ「地球の本棚には全ての情報が集約されている。しかし、

君が魔法少女になっているなんて情報はなかった。そのことについて話してもらえるかい？」

ほむら「ええ」

暁美ほむらは語る。

自身が時間旅行者であることを。

鹿目まどかを魔法少女にしないために時間を繰り返してきたことを。しかし、どの時間軸でも鹿目まどかの魔法少女化を阻止することが出来なかったことを。

ほむらの話しを聞いた翔太郎達の反応はそれぞれ異なっていた。

翔太郎は静かに怒っていた。

照井とフィリップは何かを考え込んでいた。

亜樹子は泣いていた。

照井「しかし、なぜきゆうべえは鹿目まどかに執拗に契約を迫る？」

ほむら「それは、恐らくまどかの力が既存の魔法少女の力を超えているからじゃないかしら？」

照井「どういうことだ？」

ほむらは以前の時間軸できゆうべえに告げられた言葉がある。

ほむらが時間を繰り返すことに合わせて、まどかの力が増大しているということ。

フィリップ「しかし、きゆうべえの目的については全く分かっていない」

ほむら「碌な目的じゃないのは確かよ」

翔太郎「…そうだな」

照井「とにかく俺達も出来る限りの協力はさせてもらおう」

ほむら「感謝するわ」

フィリップ「言い忘れていたけど、君も財団Xには気をつけたほうがいいかもしれない」

ほむら「財団X？」

フィリップはほむらに財団Xやドーパントについて話す。

フィリップから話しを聞き終えたほむらは、今回の時間軸は味方となるような人物が現れたが、それは敵側も同じであることを認識する。

『上条サイド』

上条「フーフンフーフンフフーン」

鼻歌を歌いながら意気揚々と帰路に着く上条。

本日は夕飯の材料を買って帰っていた。

そこで上条は仁美に出会う。

上条「君は…」

仁美「お久しぶりです」

上条「まどかと美樹の知り合いだったんだってな」

仁美「ええ」

上条「元気そうだなによりだ」

仁美「あ、あの時は助けていただいてありがとうございますとございました」

上条「俺が好きでやったんだから気にしないでいいよ」

仁美「お礼をさせて頂きたいのですが…」

上条「お礼って言われてもな…」

仁美「今度、まどかさんやさやかさんを誘ってお茶会を開く予定なのですがいかがですか？」

上条「分かった。それじゃあお言葉に甘えさせてもらおうよ」

仁美「はい！」

上条「それじゃあまた今度な」

上条は仁美と別れ自宅に向かう。

上条は気づかない。仁美の首筋に『魔女の口付け』があることに…

第10話 狙われた『H』 / 少女の決意（前書き）

絶望<sup>げんぞう</sup>の終焉 / 仮面の戦士と魔法少女 第5話後編 狙われたH / 少女の決意

主「始まります!!」

## 第10話 狙われた『H』 / 少女の決意

『Wサイド』

翔太郎達と今後の行動予定について話し合った暁美ほむらは帰路についていた。

その際、翔太郎と照井がほむらの護衛を申し出た。

ほむらはその申し出を断ったが、あまりにもしつこいので二人の申し出を渋々受け入れた。

ほむら「（それにしてもドーパントか…魔女以外にも厄介な存在がいたものね）」

ほむらは先程、二人から聞いた話を思い出す。

ドーパントと呼ばれる怪人の存在。

ガイアメモリと呼ばれるものを用いれば、特別な才能を必要とせず変身できる存在。

（当然副作用もあるが、魔法少女ほどではない）

本来なら風都で目撃されていた怪人が、何故今更見滝原に出現したのかその理由は分かっていない。

（否、確実ではないがその理由について翔太郎達はある程度予想がついていた）

ガイアメモリの流通は財団Xと呼ばれる組織が関わっているということ。

そして財団Xはきゅうべえと繋がりを持っているということ。

今までの時間軸では存在しなかった新たな敵は、彼女にとって無視できる様な問題ではない。

今回の時間軸は今までとは何もかも異なるが、それはデメリットだけではなかった。

上条当麻という不思議な力を持つ少年の存在や風都から来た左翔太郎達など、本来では有り得ない出来事が立て続けに起きていた。特に、上条当麻は鹿目まどかの魔法少女化を阻止するための切り札とも言える。

魔法を魔法少女になる前の人間に戻す摩訶不思議な力があれば、最悪の事態にも対応出来る。

ほむらはまどかを魔法少女にしないために再び決意をする。先程から、黙っているほむらに翔太郎は話しかけた。

翔太郎「さつきから黙ってるけどどうしたんだ？」

ほむら「何でもないわ」

そう言っただけほむらは歩き出す。

そんな三人の前に一人の男が現れた。

黒服「暁美ほむらだな？」

ほむら「あなたは何者かしら？」

鋭い眼光で目の前の男を睨み付けるほむら。

男は笑みを浮かべた後に、二つのガイアメモリを取り出す。そして…

『メタル！！バイオレンス！！』

男の身体が見る見るうちに変化していく。

翔太郎「ガイアメモリを二つ使った!？」

照井「今までのドーパントとは違うということか…」

ほむら「あれがドーパント…」

ほむらは実物のドーパントを目にする。

翔太郎達から話は聞いていたが、こんなに早く現れるとは思っていなかった。

魔法少女に変身して戦おうとするほむら。

しかし、そんなほむらを翔太郎が制止する。

ほむら「何のつもり？」

翔太郎「ドーパントと戦うのは俺達、仮面ライダーの仕事だ」

ほむら「仮面ライダー？」

過去の時間軸で美樹さやかから聞いたことがある。

風都にいる正義の味方の存在を。

ほむらは正義の味方の存在を信じていなかった。

そんな都合のいいものが存在しているわけがない。

しかし、左翔太郎はそうだった。

そして、翔太郎はガイアドライバーとガイアメモリを取り出す。

照井もアクセルドライバーとガイアメモリを取り出す。

そして…

『サイクロン！！ジョーカー！！』

『アクセル！！』

「「変身！！」」

「変…身…!!」

二人の身体が見る見るうちに変化していく。  
しかし、その姿は怪人とは全く異なり、それは仮面の戦士を彷彿とさせるものだった。

W「…さあお前の罪を数えろ…!!」

アクセル「振り切るぜ…!!」

ほむら「仮面…ライダー…」

彼女は驚愕していた。

正義の味方なんて都合のいい存在がいるわけがないと。  
もしいるとしても上条のような存在だけだと。

しかし、彼女の目の前にいたのは紛れもない正義の味方だった。

W「メモリを同時に使用したドーパントか…」

アクセル「井坂のような奴か？」

W「恐らく違う。彼は複数のメモリを取り込んでいたが、能力が強化されただけで他のメモリの力が使えるようになったわけじゃない」

W「ならコイツは二つのメモリの力を使えるってわけかよ…」

ある意味でWに似ているドーパント。

アクセル「来るぞ…!!」

ドーパントがWとアクセルに襲い掛かる。

その様子を少女は眺めていた。

暁美ほむらには、時間を遡る能力のほか、時間停止という能力もある。

だからこそ、例えドーパントに襲われても逃げることは容易なのだ。翔太郎に任せると言われたこともあるが、仮面ライダーの戦いを見てみようという気になった。

何故、翔太郎達の言葉に従う気になったのか、それは彼女自身にも分からなかった。

『サイクロン!!!メタル!!!』

メモリチェンジしながら戦うW。

しかし、元々頑丈な『バイオレンスドーパント』に、『メタルドーパント』の頑強さが加わっていることもあり、その攻撃は殆ど効いていなかった。

W「『ダイヤモンドドーパント』ほどじゃねえが硬すぎる!!!」

アクセル「俺がトリアルになりマキシマムドライブをするから、マキシマムドライブが終了した直後にお前は攻撃を叩き込め!!!」

W「分かった!!!」

『ヒート!!!メタル!!!』

Wはメモリチェンジする。

アクセルはアクセルドライバーを捻る。

『トリアル!!』

赤のアクセルの色が変化していく。

赤から黄色…黄色から青へ…

そして、アクセルの身体が変化した直後にアクセルの姿が消える。  
否、速度が速すぎて目で捉えることが出来ないだけだ。

『トリアル!!マキシマムドライブ!!』

アクセルが目にも止まらぬ速さで一ヶ所に攻撃を集中させていく。  
そして攻撃が終わった瞬間。

アクセル「今だ!!」

『マキシマムドライブ!!』

W「はあああ!!」

燃え盛る鉄のロッドで、Wは渾身の一撃をドーパントに叩き込む。  
Wとアクセルのマキシマムドライブを受けたドーパントはその威力  
に耐え切れず、爆発した。

ほむら「凄い…」

誰に聞かれるまでもなく暁美ほむらは一人で呟いていた。

『見滝原の病院』

さやか「はあ…」

さやかは病室の前で溜息をついていた。

無理もないだろう。

正義のヒーローに憧れを持っていたさやかが、正義のヒーローによる殺人を目撃してしまったのだから…

それと同時に、バマミが一人で戦わなければならないということを変更して実感する。

本当に自分はこのまま暮らしていてもよいのか。

かといって中途半端な気持ちで魔法少女になってもよいものなのか。少女の頭の中を巡る問題に答えは出ない。

さやか「こんなんじゃないや 恭介に笑われちゃう…元氣出さないとー!」

さやかは持参したCDを片手に上條恭介のいる病室に入る。

それが彼女の魔法少女化を決定させる要因になるとも知らずに…

『帰り道』

まどかもさやかと同じように悩んでいた。

数日前に知り合った人間が殺人を起こしているなど、誰が想像できるだろう。

それに、さやかが言った言葉も、彼女の悩みの原因となっていた。上条当麻を信じたい。

しかし、先日の出来事がまどかの脳内に浮かぶ。

まどか「何がなんだか分からないよ…」

誰に聞かれるわけでもなく彼女は呟く。

沈んだ気持ちで帰路に着くまどかは、一人の少女を見かける。

まどか「あれは…仁美ちゃん?」

今日は習い事があるため、一緒に帰ることが出来ないといっていた志筑仁美。

そのはずの彼女が、未だに街中をうろついていることがまどかには不思議でならなかった。

まどか「何処に行くんだろう?」

まどかは仁美に内緒で着いていくことに決めた。

まどかは仁美に追っている途中で、上条当麻に出会った。

上条「まどか。何してんだこんな所で?」

まどか「か…上条さん!」

予期していなかった人物との出会い。

まどかは若干慌てながらも上条に事情を説明した。

上条は、何故まどかが慌てているのかについては知る由もないのだが…

一通り説明を終えたまどかに自分もついていくと言う上条。

そうして、二人は仁美が入ったと思われる場所にたどり着いた。

そこでは大勢の人間がおり、異様な雰囲気醸し出していた。

壁からその様子を覗き込む上条とまどか。

上条「こんな所で一体何やってんだ?」

まどか「分かんないけど…何で仁美ちゃんがこんな所に?」

中の様子を見続けていたまどか達。

そこで、まどかは不幸にも足元にあった缶の存在に気付いておらず。

カーン！！

まどか「あ！」

上条「ちょ！」

その音の中にいた大勢の人間が一斉にこちらを向いた。その人達は目が虚ろでまるで意識を保っていないようだった。そのまま彼等は、上条達のもとに向かってくる。

まどか「こつちに来る…！」

上条「まどか！俺の後ろに！」

上条はまどかを後ろに下がらせる。

そして、向かってくる人間に対して右手で殴りつける。

上条「（何かがおかしい…もしかして操られてんのか？）」

向かってくる人間の様子を見ながら上条は一つの推測を立てる。

変身して戦うべきかと考えた上条だったが、それを思いとどまる。

変身後の姿の力は変身前と比べ、身体能力が格段に強化されており、その状態で戦うと相手に重傷を負わせてしまう危険があるかもしれないからだ。

その上、上条は未だに思い出しはしないが彼の右手には幻想殺しがある。

異能の力によって洗脳された人々を助けることが出来る力。

上条の右手が操られた人に当たる際に、バキンという音が鳴り響く。しかし、あまりにも数が多く徐々に劣勢に陥る上条。

まどか「このままじゃ…」

上条「まどか！お前は逃げる！」

まどか「でも上条さんはどうするの！？」

まどかにその場から立ち去ることを促す上条に、彼の言葉を否定するまどか。

そうしているうちに、操られた人々が一気に襲い掛かってきた。

絶体絶命の上条とまどか。

そんな二人の元に二人の魔法少女が駆けつける。

一人は、見滝原を一人で魔女の脅威から守り続けてきたバマミ。

もう一人は、まどかの親友である美樹さやかその人だった…

第11話 『S』の覚悟/牙の力(前書き)

主「更新が遅れてしまい申し訳ありません。」

杏子「あたしの出番はまだかよ…」

主「もうちょっとだから！待ってくださいお願いします」

ン・ダグバ・ゼバ「もっと早く書きなよ」

主「やめて燃やさないで！マジで死ぬから！」

杏子「誰だよテメエは？」

ン・ダグバ・ゼバ「もっと僕を笑顔にしてよ」

主「戦うなあ！！」

## 第11話 『S』の覚悟/牙の力

『上条サイド』

上条「美樹…お前…その姿…」

さやか「話しは後でします！上条さんはまどかを！」

上条「わ、分かった！」

マミ「来るわよ！」

上条「まどか！こつちだ！」

まどか「う、うん！」

まどかを連れてその場から離れようとする上条。しかし、二人は操られた人々に囲まれていた。

さやか「こんのお…そこをどきなさい！」

さやかが操られた人々を蹴散らす。

マミもさやかに続いて操られた人達を蹴散らしていく。しかし、倒したはずの人が再び立ち上がりマミとさやかに襲い掛かる。

さやか「キリがない！」

マミ「まだ魔女の結界内ですらないのに！」

操られた人々は、魔法少女である二人の敵ではないのだが、人間を傷つけないと覚悟している二人にとって相性が最悪の相手だった。苦戦する二人を見た上条は

上条「まどか…ちょっと待っててくれ」

まどか「え？」

上条「このままじゃジリ貧だ。少しでもあいつらの力になれるよう俺も戦う」

まどか「…分かった。気をつけてね」

上条「ああ！」

上条はクロスドライバーと二つのガイアメモリを取り出す。

『Imagine!! Breaker!!』

上条「変身!!」

上条の身体が光に包まれて仮面ライダー?となる。

上条はブリザードローパントの戦いの時と同じように『E』のメモリを取り出す。

それを見たまどかは

まどか「駄目だよ上条さん!皆が死んじゃうよ!」

?「大丈夫だ!何だかわかんねえけどそんな気がするんだ!」

さやか「そんなこと言っても…」

マミ「でも他に打開策が無いのなら、彼に任せるしかないわ」

？はクロスドライバーに『E』のメモリを差し込む。

『Experience!!』

『Electro Master!!』

？の身体が変化していく。

しかし、変身した姿は以前とは異なっていた。

白銀の身体から、黄金の身体に変化しており、それはまるで雷を連想させるような姿だった。

マミ「以前とは違う？」

？「うおおおお!!」

？の身体から大量の電撃が放出される。

電撃は操られた人々の身体に直撃する。

人々はその場に倒れ、再び立ち上がるといったことはなかった。

まどか「何とかなかった…」

さやか「それにしても…」

マミ「上条君のガイアメモリは左さん達の物とは色々と違うようね

…」

通常、ガイアメモリによって得られる姿は一つに限られている。しかし、上条は以前使ったメモリを使用したというのに、全く異なる姿や能力を得ていた。

？「俺が知りたいくらいなんだけどな…」

まどか「とにかく、倒れている人達を介抱してあげなきゃ…」

？「そうだな…ってまどか後ろ…！」

まどか「え…？きゃああ…！」

さやか「まどか…！」

マミ「鹿目さん…！」

突如、空間がさけてその中から使い魔が現れてまどかを攫って行った。

まどかを追いかけて、空間の裂け目の中に入って行った上条達。そこで、使い魔に襲われていたまどかを助け出した三人。

さやか「まどか大丈夫？」

まどか「う、うん。何とか…」

マミ「まさか、鹿目さんがいきなり魔法の結界内に引きずり込まれるなんてね…」

？「こんな近くに魔法の結界があるなんてな」

消耗が激しいため、『E』のメモリを抜いて通常の変身状態に戻る上条。

魔女の結界内を進んでいく上条達。最深部と思われる場所に辿り着いた上条達が見つけたのは、あまりにもその場に似合わない物だった。

？「ば、パソコン？」

まどか「何でこんなところに……」

さやか「誰かが置いてったわけじゃないだろうし……」

マミ「……あれが魔女よ」

マミの言葉に驚きを隠せない上条達。

そして、先程までパソコンだと思っていた魔女が動き出す。

しかし、その魔女は今までの魔女とは異なっていた。

魔女のモニターにある映像が映し出される。

それは、大破した車の中の光景だった。

車の中は滅茶苦茶で、夥しい量の血液が付着していた。

上条達はその映像が何のことか分からなかったが、一人だけ反応の異なる人間がいた。

マミ「お父さん……お母さん……」

「……え？」「」「」

マミの言葉に驚愕する三人。

「マミ」「あ…ああ…」

小刻みに震えるマミ。

上条「おい巴！…しっかりしろ！」

さやか「マミさん！」

少なくとも現在の彼女はとても戦えるような状態ではなかった。

上条「まどか！巴を頼む！」

まどか「うん！…！」

まどかがマミを連れて上条とさやかの背後に移動する。

上条「美樹！サポート頼む！」

さやか「はい！」

魔女との戦いを始める二人。

戦い始めてから、上条とさやかは目の前の魔女は戦闘力はあまり高くないことを察する。

上条「叩き落してくれ！」

さやか「はああ！…！」

さやかの強力な一撃を受けた魔女は地面に向かって一直線に落下していく。

上条はメモリを変身時より更に強く押し込む。

『Maximum Drive!!』

上条の右手が輝き、その状態で魔女を殴りつける。

魔女の身体が光に包まれ、その場には一人の少女が倒れていた。

魔女を倒した上条達は、倒れている人々を助けるために救急車を呼ぶ。

そこで予期せぬ事態が発生した。

仁美「こ…こは…?」

まどか達の親友である志築仁美が目を覚めたのだった。

『Wサイド』

暁美ほむらを自宅に送っていた翔太郎と照井の帰りを待っていたフィリップと亜樹子。

そして、翔太郎が帰ってきた。しかし、何故か照井はいなかった。

フィリップ「おかえり翔太郎」

亜樹子「竜君はどうしたの?」

翔太郎「あいつはちょっと遅くなるぞ」

そういつて、扉の鍵を閉める翔太郎。

亜樹子「何で鍵を閉めるの?」

フィリップ「まだ照井竜も帰ってきていないじゃないか」

翔太郎「それは…お前たちを逃がさないために決まっているだろう」  
引き裂いた様な笑みを浮かべた翔太郎の身体は見る見るうちに変化していく。

亜樹子「ど、ドーパント!」

フィリップ「もう僕たちのいる場所を掴んだのか」

二人に襲い掛かる『コピードーパント』

男は戦闘要員ではないフィリップと亜樹子を殺害すれば、Wへの変身が出来なくなる上に戦力を削ることが出来ると踏んでいた。

確かに、二人は戦闘要員ではない。

しかし、フィリップは戦う手段がないわけではない。

ファング「ギャオオオオン!!」

どこからともなく現れた小型の恐竜の様な物体がドーパントに襲い掛かる。

そして…

フィリップ「来い!ファング!!」

フィリップの声に反応して、フィリップの手の平に乗るファング。そして、彼はWドライバーを取り出しファングを折りたたむ。折りたたんだファングをWドライバーに差し込む。

『ファング!!ジョーカー!!』

翔太郎＆フィリップ「変身!!」

ファンゲジョーカーとなるW。

その姿は通常のWとは異なり鋭角的で攻撃的な印象を与えていた。ファンゲジョーカーは、Wの形態の中で唯一フィリップの肉体をベースに変身するが、その戦闘力はサイクロンジョーカーエクストリームを除く形態の中で最強を誇る。

翔太郎「何でこんな所にドーパントがいるんだよ!!」

フィリップ「襲撃されていたんだよ」

翔太郎「とにかく…とつとと片付けるぞ!!」

フィリップ「そのつもりさ!!」

フィリップはファンゲが変形したタクティカルホーンを数回弾く。そして、ファンゲジョーカーの右上腕に刃が出現する。

ドーパントを簡単に追い詰めるファンゲジョーカー。

フィリップを襲撃したドーパントは相手の姿に化ける能力を持っているが、基本的な戦闘力は低い。

だからこそ、非常に高い戦闘能力を誇るファンゲジョーカーを相手にするのは分が悪かった。

W「これで終わりだ!!」

『マキシマムドライブ!!』

タクティカルホーンを数回弾く。

そして、踵に巨大な刃が出現する。

ファンゲジョーカーは空中で高速回転しながらドーパントに必殺の一撃を与える。

ドーパントを倒したWだが、部屋はボロボロになっていた。

## 第12話 もう一人の『W』！？／真紅の魔法少女

『上条サイド』

まどかは仁美の身に何が起こっていたのかを説明した。

上条は仁美に説明することに反対していたが、まどか達に押し切られてしまった。

仁美「魔法少女…ですか…にわかには信じられません…」

さやか「まあ普通はそうだよね」

まどか「やっぱり信じてもらえないかな…」

仁美「いえ。まどかさんとさやかさんは大切なお友達ですから信じますよ」「ニ」

まどか「仁美ちゃん…ありがとう」

さやか「あんたらしいね」

仁美「いえいえ。上条さんや巴さんも助けて頂いてありがとうございます」

上条「困ったときにはお互い様だからな」

マミ「上条君の言う通りよ」

仁美「そう言えば、先程から身体が痺れているのですが何かご存知

ですか？」

まどか「え…え…と…」

さやか「な…何でかな？」

マミ「…上条君」ボソッ

上条「ゴ、ゴメンナサイ」ダラダラ

操られた人達の動きを封じるためとはいえ、生身の人間の身体に電撃を喰らわせたのだ。

そのことを思い出した上条は、全身から冷や汗を流していた。

仁美「事情は分かりませんが、私達を助けようとしてくれたのなら、気に病む必要はありませんよ」

上条「あ、アリガトウゴザイマス！！」ドゲザ

感謝の言葉を述べながら神速の如き速さで土下座する上条。

その場にいた全員が上条の行動に若干引いていた。

仁美に事情を説明し終えてから数分後、ようやく救急車が到着した。

仁美「皆さんありがとうございました」

仁美が病院へ搬送されていく。

その際、上条はマミに病院へ行くべきではないかと気遣うが、やはりと断られた。

倒れていた人達を全て収容して救急車はその場から去って行った。

まどか「あ、あのマミさん…」

マミ「どうしたの鹿目さん？」

まどかはマミに先程の魔女が見せた映像について尋ねる。

まどか「さっきの映像のことですけど…あれは一体？」

その疑問はまどかだけではなく、さやかや上条も同じ風に抱いていた。

マミ「あの映像はね…」

マミの口から語られる真実。

あの映像は自身が過去に経験した事故であり、その事故で両親を亡くしてきゆうべえと出会ったということ。

生きるためにきゆうべえと契約をしたということ。

それからは、魔法少女として戦ってきたということ。

ポツリポツリとマミから語られる話を聞いたまどか達の反応はそれぞれ異なっていた。

まどかは泣きじゃくり、さやかは沈痛な表情をしており、上条は静かに怒っていた。

マミ「情けない先輩でごめんなさいね…」

まどか「そんなことないです…！マミさんは…！」

さやか「そうですよ…！マミさんはずっと…一人で…！」

まどかとさやかがマミの言葉を必死で否定する。

上条「巴。前にも言ったけど一人で何でも抱え込むんじゃないよ。まどかだっている。美樹だっている。お前はもう少し、誰かに頼っていいんだよ」

マミ「そう…ね。私は一人で戦ってるんじゃないのよね。ありがとう」

マミは素直に感謝の言葉を述べる。

その言葉を聞いて微笑む三人。

話が一段落して、上条がさやかに尋ねる。

上条「美樹。お前はどのようにして魔法少女になったんだ？」

上条の真剣な表情に若干驚きながらも、さやかは答える。

さやか「マミさんを手伝って人を助けたいと思ったからです」

さやかが魔法少女になる決意をしたのは幼馴染の腕を治す為であるが、さやかが今述べた言葉に嘘はない。

上条「そうか…」

上条はさやかの言葉を聞いて納得する。

魔法少女の真実を曉美ほむらから聞いている上条にとって、これ以上魔法少女を増やしたくないのは本心であるが、魔法少女になった少女を見捨てるなんて選択肢は有り得ない。

だからこそ、少年は決意を新たにす。

絶対に魔法少女の運命に巻き込まれた人間を助けて見せると。

上条とさやかの話が終わり、上条達はそれぞれ家に帰宅した。

『見滝原総合病院』

魔女の戦いの翌日、美樹さやかは見滝原総合病院を訪れていた。

さやかは先日のマミの話を思い出す。

さやか「（契約しなけりゃ死ぬなんて…契約するしかないじゃん…）」

命が掛かっている状況で冷静な判断など出来るはずがない。

契約をしなければ命を失うのであれば、契約に同意してしまうのは極普通のことであろう。

さやか「（いけない…こんなんじゃない！マミさんの力になるって決めたのに…）」

だから自分がマミの負担を減らせばいい。

さやか「（恭介の腕も治って今日は久しぶりに恭介の演奏が聞ける）」

頭の中を巡る問題は一旦置いて、少女は屋上に向かう。

さやかが病院を訪れた目的は、上條恭介の演奏を聞くためである。

先日、さやかの願いによって治る見込みがないと言われていた彼の腕は奇跡的に回復した。

その少年によるバイオリンの演奏会が本日、病院の屋上で開かれるのだ。

さやかは病院の屋上に着き、恭介の演奏に聞き惚れる。

少女は今この瞬間、確かな『幸せ』を感じていた。

『上条サイド』

上条「不幸だあああ！！！」

上条当麻は全力で走っていた。

何故、全力で走っているのかというと、それは少し前に遡る。街中をぶらついていた上条。

そこで、彼は赤い髪の少女と出会う。

その少女は走っていた。

????「ちよつとこれ持っててくれ」

上条「え？」

上条は意味が分からず、少女から何かを渡された後、呆然としていた。

その時、上条の後ろから声が聞こえた。

店長「待てー！！！」

上条は咄嗟に後ろを振り向く。

そこでは、鬼の形相をした男が上条に向かっていた。

その男は、スーパールの制服を着ており、こちらに全速力で向かってきた。

恐らく、先程の赤い髪の少女とのやりとりを見られていたのだろう。

上条「まさか……」

店長「そこを動くなー！！！」

上条「何だか物凄く不幸の予感がするのですが…」

上条が呟き、全速力でその場から逃げ出した。

上条「ああもう…不幸だーーーーー!!」

見滝原に少年の絶叫が響き渡った。

店長から無事逃げ切った上条は、公園で一休みしようとベンチに向かった。

そこには、先程の赤い髪の少女がいた。

上条「お、お前…」

???「おー無事だったか」

上条は先程の少女に出会い唖然としているのに対して、少女は飄々としていた。

上条は少女の居る所に向かう。

少女はお菓子を食べているようであり、上条にお菓子を差し出す。

???「食つかい？」

上条「はあ…」

上条は溜息をつく。

ついでに、差し出されたお菓子は買ったようである。

上条は少女に質問する。

上条「何で万引きなんてしたんだよ。そんなに貧しいのか？」

????。「うつさいなあ。あたしの勝手だろ。それに、あんたの方が万引きしそうな面してんじゃないか」

上条「何でだよ！」

少女の言葉に上条が鋭い突込みを入れて少女が笑う。

????。「だって見るからにあんた不幸そうな面してるじゃん」

上条「初対面の人間に対して失礼すぎるだろお前……」

????。「お前じゃない。佐倉杏子だ」

上条「さくらあんこ?」

杏子「アンコじゃねえ!!」

杏子の拳が上条に飛んでくる。

直撃を受けた上条はその場に蹲っていた。

杏子「全く……そついやあんたの名前は?」

上条「ああ、そついや言っただけだったな。上条当麻だ」

杏子「高校生くらいか?」

上条「いや、今は中学生をやってる」

杏子「今は?」

上条の言葉に疑問を抱いた杏子は、上条に質問する。

上条「実は…」

上条は自身が記憶喪失であることを杏子に話す。

上条の話を聞いた杏子の感想は一つだった。

杏子「どんな状況で記憶喪失になってんだよ…シユール過ぎるだろ…」

上条「俺が聞きてえよ…」

杏子「それもそうか…」

上条「まあな…ってやべえ！待ち合わせの時間に遅れる！」

杏子「どうした？」

上条「知り合いと待ち合わせしてんだよ」

杏子「早く行ってやりな」

上条「ああ。そんじゃあまたな」

杏子「またな」

上条は公園を出て待ち合わせの場所へ急ぐ。  
その様子を見た杏子が呟いた。

杏子「何か面白い奴だな」

『Wサイド』

コピードーパントの戦いから数日、泊まる場所を探していた翔太郎一行。

当然の事ながら、ホテルの一室を滅茶苦茶にした彼らはホテルから追い出された。

翔太郎「はあ…ドーパントも場所くらい選べよ…」

フィリップ「全くだね…」

亜樹子「竜君は？」

翔太郎「あいつは見滝原の警察署に向かうって行ってたぞ」

亜樹子「どうして？」

翔太郎「寮を貸してもらえるか交渉してくるとか言ってたな」

亜樹子「そっかあ」

翔太郎「とにかく俺達は俺達で泊まること出来る場所を探そうぜ」

再び街中を歩き始める翔太郎達。  
突然…

ドオン！！

「「「!?!?!」」」

突然、街中で何かの爆発音が聞こえた。

フィリップ「翔太郎…」

翔太郎「ああ…」

亜樹子「ドーパントだね…」

翔太郎達は爆発音の発生源へ向かう。

「「「え?」」」

そこにいたのは、傷を負っている暁美ほむらと仮面ライダーWに酷似していた存在だった。

翔太郎達は一瞬、Wに似ているのは単なるドーパントかと思ったが、それは違う。

何故なら、ドーパントはガイドライダーなど装着しない。

亜樹子「あたし聞いてない…」

我に戻った翔太郎達はほむらの下へ駆けつける。

ほむら「あれも仮面ライダーなの?」

満身創痍のほむらが質問する。

翔太郎「違う!」

翔太郎は強く否定する。

仮面ライダーは、風都の住民が付けてくれた名前で、街を守る存在である。

翔太郎は仮面ライダーという名前に誇りを持っている。

だからこそ、その名を汚すものを許せないのだ。

フィリップ「以前に、仮面ライダーエターナルという敵がいたけど、今回の敵は全く異なるみたいだね」

仮面ライダーエターナルはロストドライバーを用いて変身していたが、目の前の敵のドライバーの形状はWに似ていた。

翔太郎は敵の正面に立つ。

翔太郎「やるぞフィリップ!!」

フィリップ「ああ!!」

『サイクロン!! ジョーカー!!』

翔太郎&フィリップ「変身!!」

W「さあお前の罪を数えろ!!」

二つのWが戦いを始める。

『魔法少女サイド』

美樹さやかと佐倉杏子は睨み合っていた。

人を守るために戦うと決めたさやかは使い魔を倒していた。

そんなさやかの下に一人の少女が現れる。  
少女の名は佐倉杏子。

彼女もまた一人の魔法少女だった。

杏子はさやかに、使い魔には人間を襲わせて成長させてから倒した  
ほうが効率的だと告げる。

マミの様な魔法少女に憧れを持つさやかにとって、その一言はあま  
りにも残酷だった。

さやかは杏子の言葉に激昂して剣を向ける。

杏子「ど素人があたしに勝てるんでも思ってたのか？」

さやか「関係ない!!」

睨み合う二人。

しかし、その場に更なる人物が加わる。

照井「おい、何をしている？」

さやか「て、照井さん？」

その場に現れたのは照井竜。

杏子「へへあんたが仮面ライダーか」

照井「何者だ？」

杏子「何だっついていいだろ。そのど素人より戦い甲斐がありそうだ  
な」

鋭い目つきで互いを睨み合う佐倉杏子と照井竜。

照井「生憎だが俺は『人間』と戦う気はない」

杏子「そうかよ。でもこっちはあるんだよ！」

照井に襲い掛かる杏子。

杏子の攻撃を間一髪で避けた照井は、アクセルドライバーとガイアメモリを取り出す。

『アクセル!!』

照井「変…身!!」

『アクセル!!』

仮面ライダーアクセルへ変身する照井。

杏子「それが仮面ライダーか。何かこついな」

腕の立つ相手を前に杏子はさやかを無視して二人は戦い始める。

ベテランと呼ばれるに相応しい腕を持っている杏子と数多のドーパントを倒してきた照井。

槍とエンジンブレードがぶつかり合い火花を散らす。

さやかは二人が戦う様子を呆然と眺めていた。

一見すると照井が防戦一方で杏子が有利なように見える。

しかし、照井はメモリチェンジを行っていない。

照井は一人の少女を傷つける気など微塵もなかった。

ドーパントとも一応人間だが、魔法少女より肉体の耐久度は明らかに高い。

魔法少女の真実を知っていても、一人の人間を傷つけるのは忍びな

い。

そんな二人の戦いの最中、照井の携帯が鳴り響く。

照井は杏子と距離を取り、携帯に出る。

アクセル「何だと…」

照井の様子が一変する。

携帯を閉まった照井は、エンジンメモリを取り出し、アクセルドライバ―にセットする。

アクセルの身体が変化していき、最終的には一つのバイクになった。そして、バイクに変形した照井は凄まじい速度でその場所から去って行った。

二人の魔法少女はその様子に呆然としていた。

いち早く我に戻った杏子は、呟く。

杏子「面白くねえ…」

その場から立ち去る杏子。

さやかはその場に一人取り残されていた。

?「くそ！なんつうパワーだ!!」

マミ「上条君！フォローお願い！」

まどか「上条さん…マミさん…」

上条とまどかとマミの三人はビーストドールパントの襲撃を受けていた。

突然の襲撃だったが、マミの行動により何とか持ち直すことの出来た三人。

上条は？に変身してビーストドーパントに立ち向かうが、想像以上のパワーを誇る敵に苦戦していた。

マミ「上条君！敵の注意を引いて！！」

？「分かった！！」

上条が敵の注意を引き付け、マミが止めを刺す。  
作戦通りに事が進む。

ビーストドーパントの懐に飛び込んだマミが一瞬で巨大な砲台を作る。

マミ「零距离ティロ・ファイナレを喰らいなさい！！」

マミの必殺の一撃が直撃する。

その一撃に耐え切れるはずもなくビーストドーパントは倒れた。

？「何とかなったか…」

マミ「ええ…」

まどか「…」

『Wサイド』

連絡を受けてWの下へ駆けつけたアクセル。

そこで、彼が見た光景は倒れているWとその先にいるWに酷似した存在。

アクセルはエンジンブレードを構え、謎の敵に備えるが、その敵はアクセルを無視してその場を立ち去って行った。

残されたのは、倒されているWと傷を負った曉美ほむらと鳴海亜樹子とアクセルだけであった。

第13話 『K』の誇り/圧倒的な力(前書き)

インデックス「何で私の出番が無いのかな！主は書き直すべきかも  
！！」

主「今更書き直せるかあ！！イデデデ！！」

一方通行「俺も協力してやるよオ」

主「死ぬから！書きなおす以前に死ぬから！」

一方通行「とびつきりに愉快的オブジェにしてヤンよオ！！」

主「不幸だー！！！」

上条「それは俺の台詞だあ！！！」

### 第13話 『K』の誇り/圧倒的な力

『Wサイド』

謎の仮面ライダーとの戦いを終えた翔太郎達は、警察署の寮で治療を受けていた。

(結局、翔太郎達はビジネスホテルの代わりに宿泊出来る場所を見できず、警察署の寮に泊まることになった)

治療を終えた翔太郎達は、昼間に戦った仮面ライダーについて話していた。

亜樹子「ねえ。あの仮面ライダーは一体何者なのかな？」

フィリップ「正体は不明だけど、あれは『W』に酷似していた。それに、以前戦った仮面ライダーエターナルとは色々異なっているよ。うだしね」

翔太郎「あいつが使用していたガイドライバーもダブルドライバーに似てたしな」

照井「俺は戦っていないが、エンジンブレードに似たものも所持していたな。そういえば、奴は何のガイアメモリを使用していた？」

フィリップ「最初から変身していたから、分かりづらかったけどマキシマムドライブが使われた際に分かったよ。『ボルケーノメモリ』と『サンダーメモリ』だ」

翔太郎「それに、あの野郎。こっちの攻撃があたってもダメージが通ってる感じがしなかった」

照井「非常に頑丈な敵なのか？」

フィリップ「それは分からないけど、何にせよ次に戦う時は出し惜しみしない方がいいだろうね」

翔太郎「ああ…」

照井「了解だ…」

フィリップの言葉に翔太郎と照井は静かに頷く。

仮面ライダーの名を汚すものを許すわけにはいかない。

それが、仮面ライダーの名前を背負う彼等の誇りだからだ。

『まどかサイド』

ドーパントを撃破して自宅に帰ったまどかと上条。

その夜、上条はまどかに呼び出されてまどかの部屋に来ていた。

上条「それで話ってなんだ？」

まどか「私はこのままでいいのかな？」

上条「え？」

まどか「ずっとママさんや上条さんに守られてばかりで…さやかちゃんも魔法少女になって皆を守ろうとしてるのに私だけ何も出来なくて…」

上条はまどかの言葉を黙って聞く。

それは一人の心優しい少女が抱える悩みだった。

まどか「私も魔法少女になって戦えたら、皆の役に立てるのかな？」

上条「まどか。お前は本当に自分が何の役にも立たないって思ってるのか？」

まどか「え？」

上条「この家の人達は、身元不明で何も覚えていない滅茶苦茶怪しい俺なんかを受け入れてくれた。もちろんまどか。お前もだ。多分、俺はこの家の人達に受け入れられてなかったら、今頃路頭に迷っていたらろうしな」

まどか「…」

上条「この前の魔女の戦いだってそうだ。お前が志築を見つけて追いかけてなかったら、あいつは命を落としていたのかもしれない」

まどか「…」

上条「誰かの力になりたいって思うのは悪いことじゃない。でも、そのために特別な力が必要なのか？お前は特別な力なんか持っていない。たつて、既に二人の人間を助けてるじゃないか」

まどか「でも…」

上条「それでもお前が自分が役立たずだなんて幻想に囚われているってんなら、俺がその幻想をぶち殺してやるよ」

まどか「……ティヒヒ」

上条「何か変なことでもいったか？」

まどか「ううん。ありがとう。上条さん」

上条「？」

まどか「（上条さんは他人を傷付けるような人間じゃない。記憶を失う前からこんな性格だったんじゃないかな…）」

上条の言葉で元気がでたまどかは、上条について以前から抱いていた疑問に決着をつけた。

『上条サイド』

翌日、街中をあるいていた上条は佐倉杏子と出会った公園の前を通りかかった。

そこで、彼は佐倉杏子を見かける。

杏子「当麻じゃん」

上条「おっす」

軽い挨拶を交わす二人。

上条「何やってんだ？」

杏子「何だっついていいだろ？」

上条「それもそうか」

他愛ない会話を交わす二人。

上条「そついや気になったけど、学校はどうしてるんだ？」

杏子「行ってない」

上条「どうして行ってないんだ？」

杏子「大人の事情ってやつ？」

上条「大人じゃねえだろ…」

杏子「細かいことは気にすんなって」

グ~~~~  
…

空腹を知らせるお腹の音が鳴り響く。

杏子「あ…//」

上条「もしかして腹減ってるのか？」

杏子「どうだっていいだろ」

上条「弁当食つか？」

杏子「え？」

上条「嫌なら別にいいけど…」

杏子「貰ってもいいのかい？」

上条「この前菓子をくれたお礼だよ」

杏子「そんじゃ有難く頂くよ」

上条が差し出した弁当を受け取り、凄まじい速度で弁当を食べる杏子。

普通の人間が見たら驚愕する光景だが、少年は別段驚いたりはしなかった。

（少年と一緒に住んでいたシスターの影響があるのかもしれないが…）  
凄まじい速度で弁当を平らげた杏子。

杏子「凄く美味しかったよ」

上条「知久さんが見たら喜ぶな」

杏子「誰だ？」

上条「俺が世話になっている家の人だよ」

杏子「ふーん」

上条「反応薄いな…！」

杏子「だってあんま興味ないし」

上条「そろそろ帰らないと…」

杏子「そんじゃまたな！」

上条「おう！」

杏子と別れて帰路に着く上条。

そこで彼は少女について一つの考えが浮かぶ。

上条「空腹っぱかったけど、あいつ万引きしなかったのか…」

そのことを思い出し、心が温かくなる上条であった。

『魔法少女サイド』

上条と別れて、本日の魔女狩りを始める佐倉杏子。

しかし、本日は魔女や使い魔に遭遇することは無く、本日の魔女狩りをやめて帰ろうとしていたところで、暗闇から一人の少女が現れた。

杏子「ナニモンだてめえ？」

ほむら「そうね。あなたと同じと言えば分かるかしら？」

杏子は槍を構えて暁美ほむらを睨む。

杏子「何の用だ？」

ほむら「貴女に協力して欲しいことがあるの」

杏子「協力？魔女退治の協力でもして、グリーンフィールドを山分けしようとしても言うつもりか？」

ほむら「いいえ。貴女に協力して欲しいことは、ドーパント退治に参加してもらおうことよ」

杏子「はあ？ドーパント？」

ほむらは杏子にドーパントについての説明を行う。  
その話を聞いた杏子は…

杏子「馬鹿馬鹿しい。何であたしが…」

ほむら「拒否権はないわ」

杏子「な…!?!？」

いつの間にか杏子の背後にいたほむら。

ほむら「貴女に無料働きさせようというわけじゃない。魔法少女にとって有益な情報を教えてあげるわ」

杏子「…情報？」

ほむら「ソウルジェムの穢れを取り除くためにはグリーンフィールドが必要。それは常識ね」

杏子「ああ」

ほむら「もし、グリーンフシードを用いずに、ソウルジェムを浄化させる手段があるとしたら？」

杏子「はあ！？そんなもんがあるわけ…」

ほむら「あるのよ。実際に私もこの身で体験したから効果は実証済みよ」

杏子「どっいつことだよ？」

ほむら「ソウルジェムを浄化させたのは白銀の仮面ライダー」

杏子「白銀の仮面ライダー…」

ほむら「その仮面ライダーに変身するのは、上条当麻という男子中学生」

杏子「なっ!?!」

杏子はほむらの言葉に驚愕する。

上条当麻が、仮面ライダーであることやソウルジェムを浄化させることが出来るという事実には驚きを隠せなかった。

ほむら「嘘だと思うのなら、彼と一緒に魔女と戦ってみなさい。それで分かるわ」

佐倉杏子にその話を伝えた暁美ほむらはその場から立ち去る。残された少女が一人で眩く。

杏子「当麻が仮面ライダー…」

『Wサイド』

翌日、鹿目まどかと美樹さやか、巴マミ、上条当麻は授業を終え下校していた。

話題は、先日さやかの前に現れた魔法少女についてだった。

上条「当たり前だけど、やっぱり見滝原以外にも魔法少女っているんだよな」

さやか「とにかくいけ好かない奴なんですよ！使い魔を放っておけだなんて言うし…」

マミ「魔法少女って言っても人それぞれだから…」

まどか「どんな子なんだろ？」

さやか「心配しなくてもあたしの嫁のまどかには指一本触れさせないよ。嫌な奴繋がりて転校生を思い出した…」

マミ「そういえば、最近暁美さんを見ないわね。彼女には聞きたい事があったのに…」

お菓子の魔女との戦いの際に、暁美ほむらが巴マミにした忠告。

あの時のマミは気に留めていなかったが、今思い出せば彼女には不思議な部分が多すぎる。

きゆうべえを異常なまでに敵対視して、鹿目まどかに魔法少女になつてはいけなさと忠告する。

この中で唯一上条当麻だけは、暁美ほむらの行動の真意をしっているのだが…

それぞれの家に向けて帰宅している四人の前に、中学生くらいの少年が立っていた。

それだけでは別段珍しいことではないのだが、その少年の腰にはガイアドライバーが巻きつけられていた。

更に、そのガイアドライバーは『W』のドライバ―に酷似していた。

マミ「あれって……」

さやか「ガイアドライバー？」

まどか「え…じゃああの人も？」

上条「仮面ライダーなのか？」

少年はガイアメモリを取り出して、ドライバ―にセットする。

同時に、もう一つの挿入口に差し込まれた状態のガイアメモリが出現する。

『ボルケーノ！！サンダー！！』

瞬間、少年の身体が炎と雷に包まれる。

炎と雷が止んだ場所には、『仮面ライダー』が立っていた。

「「「「え？」「」「」」

上条達は啞然とした。

細かい姿や色は『W』とは異なっているが、目の前の存在は確かに仮面ライダーWに似ていた。

さやか「Wに似ている？」

まどか「どづいつことなの…」

マミ「何者なの？」

上条「何かよくわからねえけどやばそうだな」

一歩ずつ上条達の下へ迫りくる謎の仮面ライダー。

その時、上条達と謎のライダーの間に二人の男が割り込んできた。

上条「左さんと照井さん!？」

マミ「あの仮面ライダーは一体？」

翔太郎「詳しくは後で話す!とにかくあいつは敵だ!」

照井「行くぞ!」

『サイクロン!!! ジョーカー!!!』

『アクセル!!!』

翔太郎&フィリップ「変身!!!」

照井「変身!!!」

Wとアクセルに変身する二人。

W「仮面ライダーって名前は風都の皆が付けてくれた名前だ。だから、てめえみてえな偽者野郎にその名を汚させたりさせねえ!!!」

アクセル「最初から全力で行かせてもらうぞ!!」

目の前の敵に明らかかな怒りを見せるWとアクセル。

その態度の、まどかとマミとさやかは疑問に思った。

思い起こされるのは、数日前の『仮面ライダーW』が行った凶行。

目の前の男達は仮面ライダーという名前に誇りを持っている。

そんな人間が、自らその名を汚すような真似をするはずがない。

Wとアクセルに助太刀するために魔法少女に変身するマミとさやか。

しかし、Wとアクセルの援護をしようとするマミとさやかに対して、

翔太郎と照井は…

W「こいつは俺達が倒さなきゃいけねえんだ!だから下がってくれ!!」

アクセル「こいつを倒すのは、仮面ライダーである俺達の仕事だ!」

二人の剣幕に圧倒された二人は、その申し出を素直に聞いて引き下がる。

謎の仮面ライダーとの戦いを開始する仮面ライダーWと仮面ライダーアクセル。

謎の仮面ライダーは、ガイアドライバーからボルケーノメモリとサンダーメモリを取り外し、エンジンブレードに似た剣に差し込む。

その剣からは、膨大な熱と雷が放出されていた。

相手の動きに呼応するように、Wはサイクロンジョーカーから、ヒートメタルへメモリチェンジしてメタルシャフトを構える。

アクセルは、エンジンブレードにエレキトリックメモリを挿入する。Wとアクセルは非常に高い実力を誇ることは、上条達も知っている

のだが、目の前の仮面ライダーの力は圧倒的だった。

ヒートよりも高い熱量を誇るボルケーノ。

エレキトリックよりも高い威力を持つサンダー。

徐々に追い込まれるWとアクセル。

しかし、それが彼等の全力ではない。

Wとアクセルは互いが持つ最強の力で謎の仮面ライダーに挑む。

一旦、ヒートメタルからサイクロンジョーカーの形態に戻るW。

そして、Wの下に、鳥の形をしたガイアメモリが向かい、それを掴む。

一方で、アクセルもストップウォッチの形をしたガイアメモリを取り出す。

ガイアメモリをドライバーへセットするWとアクセル。

『エクストリーム!!』

『トリアル!!』

今までのWとは異なり、体の色も三色になり、形状も変化したW。

更にその手には、剣と盾が握られていた。プリズムソードとヒッカーシールド

アクセルは真紅の装甲が弾け飛び、蒼色の身体が露出していた。

今までのWやアクセルとは全く異なった姿に驚きを隠せない上条達。

フィリップ「解析完了。弱点は特になし。力押しで行くしかないよ  
うだね」

翔太郎「分かった!!」

照井「了解だ!」

W「一気に決着を着けさせてもらっぜ!!」

アクセル「振り切るぜ!!」

Wは専用武器であるプリズムビッカーに四つのガイアメモリを挿入する。

アクセルはストップウォッチ型のガイアメモリに数値を入力して、それを取り外す。

『サイクロン！！ヒート！！ルナ！！ジョーカー！！マキシマムドライブ！！』

『トリアル！！マキシマムドライブ！！』

プリズムソードに莫大なマキシマムエネルギーが収束していく。

アクセルはストップウォッチ型のガイアメモリを上空へ放り投げる。

Wはプリズムソードを構えて、アクセルはその場から消える。

W「ビッカーチャージブレイク！！」

マキシマムエネルギーを纏ったプリズムソードで、謎の仮面ライダーにマキシマムドライブを喰らわせる。

アクセルがその場から消えて、九秒が過ぎた瞬間にアクセルが出現する。

二人の仮面ライダーのマキシマムドライブが直撃する。

その威力は凄まじいの一言。

上条「すげえ……」

まどか「倒したの？」

さやか「こんな攻撃に耐えられる奴なんているわけないでしょ……」

マミ「魔女だつてこんな攻撃に耐えられないでしょうね…」

Wとアクセルの本気の一撃に呆然とする一同。  
Wとアクセルも勝利を確信していた。

しかし、謎の仮面ライダーは倒れていなかった。  
所々、傷がついているがメモリブレイク出来ていなかったのである。  
信じられない事実には、Wとアクセルの両方も驚きを隠せない。

謎の仮面ライダーも、今度はこちらの番とばかりにガイアメモリを  
取り出す。

『イリユージョン！！ソニック！！』

謎の仮面ライダーの色が変化する。

そして、五体の分身を作り出す。

数が増えたことに驚く一同。

そして、ガイアメモリを更に強く押し込む。

『マキシマムドライブ！！』

瞬間、五体に分裂した仮面ライダーの身体が蒼く発光する。

そして、五体の仮面ライダーはその場から忽然と消える。

再び姿を現したのは、十秒後だった。

目の前の敵が何をしたのか理解できない上条達。

しかし、突然Wとアクセルの装甲が砕けて、変身が強制解除される。

次元が違う。

まどか達は、そう感じた。

恐怖で身体が動かない。

まどか達の前に出て変身しようとする上条。

上条達に迫りくる謎の仮面ライダー！

しかし、謎の仮面ライダーの背中に槍が飛んでくる。

敵はそれを両手で掴み、後ろにいる存在を見る。

杏子「……たく……厄介な奴もいるもんだな」

まどか達の窮地を救ったのは佐倉杏子だった。

## 第14話 偽りの『N』 / 突きつけられた現実

『魔法少女サイド』

さやか「何であんたが…」

マミ「佐倉さんなの？」

杏子「久しぶりだなマミ」

まどか「お知り合いなんですか？」

上条「何でお前がこんな所に…それにその格好…」

杏子「悠長に話してる場合じゃねえだろ？」

そう言っただけ杏子は、謎の仮面ライダーを睨みつける。

しかし、謎の仮面ライダーに戦闘の意思は無いらしく、その場から立ち去って行った。

杏子「何だあいつ？」

謎の仮面ライダーが姿を消したのを確認してから、変身を解除する杏子。

杏子「まあいつか」

上条達を無視してその場から立ち去る佐倉杏子。

残された上条達は啞然としていたが、まどかの一言で我に帰る。

まどか「と、とにかく左さん達を何とかしなきゃ…」

先程の戦いで、敗北して気絶してしまった翔太郎達を放置しておくわけにもいかないまどか達。

そこで、さやかが一つの提案をする。

さやか「そういえば、以前鳴海さんの携帯を教えましたよね？」

マミ「そうね、なら鳴海さんに連絡を取ったほうがいいのかもしいわね」

上条「そうだな」

早速、亜樹子に連絡をとる上条達。

そこで彼らは、二人を見滝原の警察署に向かった。

どうやら、現在は警察署の寮に世話になっているらしい。

寮に辿り着き、翔太郎とフィリップと照井の三人の治療を行う亜樹子と上条達。

治療が終了して、彼らが倒れた経緯をマミから説明してもらった亜樹子。

亜樹子「一体何者なんだろうね？前に風都を襲った仮面ライダーとも違うみたいだし…」

さやか「それはどういうことなんですか？」

亜樹子「ちょっと前に、風都タワーが武装集団に占拠されてね…その武装集団のリーダーが仮面ライダーエターナルに変身していたんだよ」

上条「仮面ライダーエターナル…」

さやか「仮面ライダーは正義の味方じゃないんですか!？」

亜樹子に詰め寄るさやか。

亜樹子「仮面ライダーって名前は風都に住む皆が付けてくれた名前  
でね…翔太郎君はそのことに誇りを持っているんだよ。だから、仮  
面ライダーの名前を持ちながら人を傷付ける者を許せないんだよ」

マミ「そうだったんですか…」

さやか「だから、謎の仮面ライダーと戦うときにあんなに怒ってた  
んだ…」

まどか「良かった…」

翔太郎「う…」

フィリップ「ッ…」

照井「くっ…」

亜樹子「気がついた？」

照井「ここは…警察寮か？」

亜樹子「うん」

フィリップ「僕達は負けたんだね…」

翔太郎「くそ…」

ようやく目覚めた翔太郎達にマミは気になっていたことについて聞いてみた。

マミ「早速で申し訳ないんですけど、私の質問に答えてくれませんか？」

翔太郎「何だ？」

マミ「六日前の午後四時は何をしていましたか？」

翔太郎「ビジネスホテルで寝てたけど…」

フィリップ「何かあったのかい？」

マミ「え、ええと…」

意を決して、六日前の出来事を翔太郎達に話すマミ。

亜樹子「それって…」

フィリップ「うん」

さやか「何か知ってるんですか!？」

フィリップ「二日前に亜樹子ちゃんとビジネスホテルに居た頃に、ドーパントの襲撃を受けたんだ」

まどか「それが何に関係してるんですか？」

亜樹子「そのドーパントは翔太郎君に化けていたんだよ」

「……え？」「……」

フィリップ「そのドーパントの名前は『コピードーパント』その名前の通り、好きな相手の姿に化けることが出来るのさ」

さやか「ちょ、ちょっと待ってください！？こんなこと言うのは何ですけど、二人とも戦う手段は持っていないはずじゃ……」

まどか「そ、そうですね！」

マミ「どうやって追い払ったんですか？」

フィリップ「前にも言ったと思うけど、翔太郎と僕が変身して仮面ライダーWになる。それは知ってるよね？」

まどか「ええ……」

フィリップ「変身する際に翔太郎は姿が変わり僕は意識を失う。そのことも知ってるよね？」

さやか「そうですね、だから追い払う手段がないはずじゃ……」

フィリップ「君達にはまだ見せたことがないけど、僕も一応変身して戦うことは出来るんだ」

「「「え？」「」「」

フィリップの言葉に驚きを隠せない一同。

フィリップ「こつこつふうにな…おいでファンゲ」

フィリップの言葉に反応して、小型の恐竜の様な物体がまどか達の正面に現れる。

マミ「何これ…」

さやか「小型の恐竜？」

まどか「かわいい…」

上条「かわいいか？」

フィリップ「こいつはファンゲ。僕の危機に駆けつけるようになってる」

さやか「でもこんなちっさいのじゃ…」

フィリップ「確かに小さいけど、見た目に騙されないほうがいいよ。結構凶暴だからね」

まどか「きよ、凶暴なんですか…」

過去に、フィリップの危機に何度も駆けつけ窮地を救ってきたファンゲ。

フィリップ「それに、ファングはガイアメモリだからね」

マミ「そうは見えませんが…」

フィリップはファングを掴み、変形させる。

さやか「ほんとだ…ちょっと普通のガイアメモリより大きいけど」

フィリップ「ファングを用いて、僕はファングジョーカーという形態に変身出来るんだ。最も、僕から変身できるのはこれしかないんだけどね」

マミ「そうだったんですか…」

亜樹子「フィリップ君が変身して戦えたのは良かったんだけど、泊まっていた部屋を破壊しちゃってね、追い出されて今は警察寮にお世話になっているんだよ」

上条「なるほど…」

照井「話は終わったか？」

マミ「ええ」

照井「ならば、帰るといい。時間が時間だしな」

様々なトラブルに巻き込まれて、帰宅するのが遅れてしまったまどか達。

照井に促されて、亜樹子に見送られて寮から出て行く上条達。

彼等を見送った後、翔太郎達は謎の仮面ライダーについての話し合

いを始めた。

亜樹子「三人とも大丈夫？」

翔太郎「ああ…」

フィリップ「ちょっと傷むけどね…」

照井「心配はいらない」

フィリップ「それにしても、あの仮面ライダーについては分からないことが多い」

照井「マキシマムドライブは確かに直撃したはずだ」

翔太郎「手応えもあったし『ダイヤモンドドーパント』のように硬いって訳でもなかった」

照井「ダメージを感じているのか分からなかったからな…」

亜樹子「何かゾンビみたいな敵だね…」

謎の仮面ライダーを倒す糸口を見つけられないまま、時間だけが悪戯に過ぎて行った。

寮から出て、自宅に向けて歩いてきたまどか達。

さやか「良かった〜。やっぱり仮面ライダーは正義の味方だったんだ」

まどか「うん」

マミ「それにしても、迷惑なことをしてくれるドーパントね」

上条「そんなことがあったんだな」

仮面ライダーWの凶行がドーパントの仕業で、翔太郎達が全くの練れ衣であることが分かった少女達は心から喜んでいた。

上条は自分だけがその事実を知らなかったことに、多少落ち込んでいたが、丸く収まってよかったとも思っていた。

少女達は、それぞれ自宅に帰宅して親からこっぴどく怒られたのは別の話である。

少女達が怒られている時間に、志築仁美は天体観測を行っていた。

天体観測は彼女の趣味であり、こつして星を眺めるのが日課となっていたのだ。

そこで、彼女は謎の黒い物体を発見する。

仁美「あれは何かしら？」

仁美は望遠鏡を覗き込み、それを注意深く観察する。

仁美「…クワガタ？」

何かの見間違いだと思って、仁美は再びそれを注意深く観察しようとした。

しかし、その頃には黒い物体は存在していなかった。

仁美は自分が幻覚を見ていたのではないかと考えた。

今の時期にクワガタがいるのは合っていないし、その上、謎の黒い物体はクワガタにしては大きすぎたのだ。

翌日、仁美は昨日の出来事をまどか達に話した。

仁美「やはり幻覚だったのでしょうか？」

まどか「(さやかちゃん…)」

さやか「(多分ドーパントだと主思う。メートルサイズのクワガタなんているわけないし…)」

仁美「もしかして、あれが魔女だったのですか？」

さやか「いや、違うんじゃないかな？」

まどか「幻覚かどうかは分からないけど、大きいクワガタだったんだね」

仁美「不思議な体験をしましたわ…」

仁美がそう語り、まどかとさやかはドーパントの仕業だろうと確信していた。

『杏子サイド』

まどかとさやかが仁美の話を聞いている頃、上条は街中をうろついていた。

しかし、今日は目的がないというわけではなく、知久からおつかいを頼まれていたのだ。

上条「え〜と、残りは卵か…」

目的の物を捜し求めて、見滝原を歩き回っていた上条の肩を叩く者

がいた。

杏子「よう当麻。ちょっと話があるんだけどいいかい？」

上条「ちょっと待ってくれ。買わなきゃいけないものがあるんだよ」

杏子「あたしもついて行ってやるよ」

目的の物を買い揃えた上条は、杏子と一緒にいつもの公園に向かった。

上条「それで、話って何だ？」

杏子「あんた、仮面ライダーなんだって？」

上条「誰から聞いたんだ？」

杏子「曉美ほむら」

上条「じゃあ、あのことも知っているのか？」

杏子「あのことだあ？」

上条「いや…何でもない」

杏子「しっかし驚いたよ。あんたみたいな平凡の塊のような奴が仮面ライダーなんてな」

上条「それを言ったら、おまえが魔法少女ってのも驚いたけどな」

杏子「お互い様って奴だろ」

上条「話ってこのことか？」

杏子「違う違う。あんたに魔女退治に付き合ってもらおうと思っ  
た」

杏子には二つの思惑があった。

暁美ほむらの言っていたことが真実なのか。

また、上条当麻はどの程度の実力を誇るのかを。

杏子の提案に賛成する上条。

魔法少女にとっては魔女は狩りの対象であるが、上条にとっては助  
ける対象である。

杏子に案内されて、魔女の結界を発見する上条。

結界に侵入するしてそれぞれ変身する二人。

杏子「へへそんな姿になるんだ」

？「変わりすぎて、知らない人が見たら誰だかわかんねーけどな」

結界の奥に進むに連れて、使い魔の襲撃を受ける二人。

そして、最深部に辿り着き魔女を発見する。

？「サポート頼む！」

杏子「あいよ！（お手並み拝見といくか）」

魔女との戦いを開始する二人。

杏子は？の戦いを注意深く観察していた。

見たところ武器らしき物は何一つ持っていない。

また、攻撃方法も打撃だけととてもシンプルであった。  
魔女の猛攻を間一髪で交わしている？の姿を見て杏子は一つの結論を出す。

杏子「(ぱつと見、ずぶの素人で戦い方も単純だが、こいつは戦い慣れてやがる)」

上条は自身の『幻想殺し』のおかげで並々ならぬ、不幸に巻き込まれており、その際に何度も死闘を繰り広げており、戦いの経験が非常に豊富なのだ。

？「これで終わりだ!!！」

『Maximum Drive!!』

？の右手に光が収束し始める。

杏子「(あれがほむらの言ってた光か!?)」

？は魔女に向かって全力で駆けていく。

そして、光が収束している右手で魔女を殴る。

瞬間、莫大な光が放出され杏子は思わず目を閉じた。

光の放出が収まり、目を開ける杏子だったが彼女は自分でも気付かないうちに声を出していた。

杏子「なっ…！」

魔女が居た場所に、少女が倒れていたからだ。

杏子「(どうなってんだ!？何で魔女が居たはずの場所に人間が倒

れてんだ！？ほむらの奴は、このことを知ってたのか！？」

現状を理解できず混乱する杏子だったが、無理やり気持ちを落ち着かせて自身のソウルジェムを見る。

佐倉杏子のソウルジェムは一切の穢れがなく、輝いていた。

ほむらの話していたことは事実だったが、予想外の事態に杏子は茫然としていた。

『魔法少女サイド』

二日後、佐倉杏子と美樹さやかは睨み合っていた。

その場には彼女達の他に、鹿目まどかと上条当麻、巴マミが居た。原因は、数時間前に遡る。

美樹さやかの幼馴染である上條恭介がさやかに連絡もせず、退院してショックを受けていたさやかは佐倉杏子に出会う。

杏子がマミの知り合いということで、多少は態度を軟化させたさやか。

さやかの態度を見た杏子は、さやかが自分の為ではなく他人の為に願う事を使ったことを看破した。

杏子に自分の願いを否定され、激昂した美樹さやかの挑戦を佐倉杏子が受けるといった形になったのだ。

そんな二人を止めようとする三人だったが、聞く耳持たずそのまま戦いが開始しようとする二人。

杏子「あんたみたいな素人があたしに勝てるんでも思ってたのか？」

さやか「関係ない！」

杏子「面倒くさいから速攻で終わらせてやるよ！」

二人はソウルジェムを掲げて、魔法少女に変身しようとする。しかし、そこで思わぬ乱入者が出現した。

さやか「え……」

『バードドーパント』が美樹さやかの持っていたソウルジェムを奪ったのだ。

いきなりの状況に、事態を飲み込めない三人だった。しかし、上条だけは行動が早かった。

即座に仮面ライダー？に変身してバードドーパントを追いかけた。つた。

暁美ほむらから告げられた、魔法少女の真実。

ソウルジェムの意味を知っている上条だからこそ、行動が早かったといえる。

さやかのソウルジェムを奪って逃げたドーパントと、それを追って行った？。

しばらく啞然としていた少女達だったが、突然美樹さやかが倒れた。

まどか「さやかちゃん!？」

マミ「美樹さん!どうしたの!？」

さやかの異変に慌てる二人。

杏子は、さやかに近づき脈を測る。

杏子「こいつ…死んでやがる……」

「「え?」「」

杏子の言葉に驚愕するまどかとマミ。

彼女達はさやかのもとへ駆け寄り、容態を確認する。  
しかし、佐倉杏子の言葉は嘘などではなく事実だった。

マミ「そんな…嘘よ…」

まどか「さやかちゃん！目を覚まして！！」

杏子「何がどうなってやがる…！」

茫然自失とするマミと杏子、さやかに呼びかけ続けるまどか。  
そんな三人の下に一匹の獣が現れる。

QB「あゝあ…ソウルジエムを奪われちゃったね…！」

マミ「きゆうべえ！？これは一体！？」

突然現れたQBに、マミも杏子も状況が飲み込めない。  
まどかはきゆうべえを無視して、さやかに声を掛け続けていた。

QB「ハア…まどかあ『そっち』はさやかじゃなくてただの『抜け殻』なんだって」

「「「え？」「」」

きゆうべえの言葉が飲み込めない三人。  
きゆうべえは、自身の言っていることが分かっていないような態度  
を取る三人に、残酷な現実を突きつけた。

QB「魔法少女との契約を取り結ぶボクの役目はね、君達の魂を抜き取ってソウルジエムに変える事なのさ！むしろ便利だろう？心臓

が破れても、ありつたけの血を抜かれても、『その体』は魔力で修理すればまたすぐ動くようになる。弱点だらけの人体よりは、よほど戦いに有利じゃないかあ？」

きゆうべえが語るソウルジェムの正体。

まどか達は、きゆうべえの話している内容が理解できなかった。

否、理解したくなかった。

しかし、現実是不変ならない。

マミ「嘘…嘘よ…」

まどか「ひどいよ…酷過ぎるよ…」

杏子「てめえ！…！」

杏子がきゆうべえを掴み上げ、怒りを露にする。

しかし、きゆうべえは全く動じない。

QB「君達はいつもそうだね…。事実をありのままに伝えると決まって同じ反応をする。ワケがわからないよ？」

きゆうべえはまるで機械のように淡々と話す。

そんな三人の下へ変身をといた上条が戻ってきた。

隣に、暁美ほむらを連れて…

まどか「上…条さん…さやかちゃんが…」

上条「暁美！」

ほむら「ええ…」

ほむらはソウルジェムをさやかの手の上に置く。

さやか「う…」

まどか「さやかちゃん…?」

さやか「あれ…まどか?」

まどか「さやかちゃん!!」ガバツ

何が起っているのか理解できていないさやかは、何故まどかが泣いているのか分からなかった。

QB「上条当麻と暁美ほむらか…正直に言っ君達の存在は厄介なんだよね」

ほむら「それはこちらの台詞よ」ジャキ

上条「てめえは何でこんなことをしゃがる?」

QB「それを君が知る必要はないよ」

顔色一つ変えずきゆうべえは淡々と述べる。

QB「今日の所は帰らせてもらおうよ」

きゆうべえの姿は闇に溶け込み、その場から消えて行った。

QB「『AW』の調子はどうだい？」

ネオン「問題なく稼働している」

QB「しかし…」

きゆうべえは巨大な水槽の中にある物体を見る。

その中には、およそ十五歳くらいの少年が入っていた。

QB「あれはまだ目覚めないのかい？」

ネオン「発見したときに比べれば、十分回復しているはずだが…」

QB「彼からは凄まじい力を感じるのにな」

ネオン「あれが目覚めてその力を掌握すれば、財団？が世界を支配するのも容易い」

QB「僕は支配には興味がないよ」

ネオン「それはそうだろう」

そう言っつきゆうべえはその場から消えていく。

残されたネオンは一人で呟く。

ネオン「これさえ目覚めれば『仮面ライダー』など恐れるに足らん」

ネオンは引き裂いた笑みを浮かべて、水槽の中の少年を愛おしそうに見ていた。



## 第15話 『K』の思い／巨大クワガタの謎（前書き）

主「皆さんこんにちはp主です。見ていただきありがとうございます  
ます

相変わらずの中途半端なペースですが、どうかよろしく願いしま  
す。」

## 第15話 『K』の思い／巨大クワガタの謎

『魔法少女サイド』

しばし、その場に呆然としながら佇む魔法少女達。

さやか「え？何が起きてんの？」

状況が分かっていないさやかに、杏子が先程の出来事を説明する。

さやか「は？こんな状況で性質の悪い冗談なんかやめてよ。ねえマミさん。マミさんからも何か言ってるよ。お願いよ。」

杏子の話す内容を、性質の悪い冗談だと思いきやかはマミの方に意識を向ける。

マミ「…嘘…嘘よこんなの」「ブツブツ

さやか「マミさんまで…悪乗りしないで下さいよ…ねえまどか」

さやかは杏子の話を否定して欲しいと言わんばかりに、まどかの方を向く。

まどか「…さやかちゃん…」「グスッ

泣きながら話すまどかの姿を見たさやかは、杏子の話が真実であることを認識した。

さやか「ねえ冗談でしょ…」「冗談って言ってよ…」

さやかへの問いに答えられる者はこの場にいなかった。

ほむらは、彼女達を放っておきその場から立ち去ろうとする。

杏子「待てよ…」

ほむら「何かしら？」

その場から立ち去ろうとするほむらを杏子が呼び止める。

杏子「その様子…あなたは知ってたのか？」

ほむら「ええ」

何の感慨も無く彼女の質問に答えるほむら。

まどか「ほむらちゃん…どうして…」

ほむら「忠告はした筈よ」

暁美ほむらが転校初日、鹿目まどかに魔法少女になってはならないと話したこと。

当時のまどかはほむらの言っていること、理解できなかったが、まどかの意識は別の所にあった。

どうして、目の前の少女はソウルジェムの真実を知っておきながら、あんなに平然とした態度を取ることが出来るのか恐ろしくてたまらなかった。

ほむらはその場から立ち去って行った。

入れ替わりに翔太郎と照井がまどか達の下に現れた。

翔太郎「そつちは大丈夫か？」

まどか「左さん…照井さん…」

上条「巴達をお願いします…」

照井「…分かった」

翔太郎はマミを、照井はさやかを連れて彼女達を送って行った。

比較的シヨツクの小さかった杏子は、無言でその場から去って行った。

上条は泣いているまどかを連れて、自宅に帰って行った。

まどか達が帰宅している頃、仁美は習い事を終えて帰宅中だった。

仁美「あれは、やはり見間違えだったのかしら…」

巨大なクワガタは単なる見間違えだったのか、それとも本当に存在していたのか。

少女の疑問は尽きなかった。

そんな彼女の前に、一人の男が現れる。

男は、無言でガイアメモリを取り出す。

仁美「（あれはUSBメモリですか？）」

男はそのまま、ガイアメモリを自らの腕に突き刺す。

『マグマー！』

男の姿が変貌していき、異形の化け物となる。

仁美「きゃあああ！！」

仁美は恐怖で足が竦み、動けなかった。

『マグマドーパント』は動けない仁美に近づいていく。並みの人間なら、全く歯が立たない化け物を前に仁美は身体が震えるのを抑えられない。

『マグマドーパント』の拳に炎が収束していく。ドーパントの攻撃が志築仁美に直撃するかと思われたが、その攻撃は少女に当たることがなかった。

ドガアッ！！

『マグマドーパント』に巨大なクワガタが体当たりをかましていたのだ。

少女は目を見開く。何故ならば、少女の窮地を救ったのは少女の悩みの対象だったからだ。

巨大なクワガタに体当たりされたドーパントは、コンクリートの壁にめり込んでいた。

しかし、その程度でドーパントは動けなくなるわけではない。巨大なクワガタは、その巨軀にはあまりにも不釣り合いなスピードでドーパントに激突する。

そして、ドーパントを巨大なアゴで挟み締め上げていく。予想外の強敵にドーパントも気絶した。巨大なクワガタはドーパントを振り払うと、その場から飛び去って行った。

仁美「助けてくれたの…？」

少女は一人クワガタが飛んで行った方向を眺め続けていた。

自宅に帰ったさやかは自室にて、一人で泣き続けていた。

さやか「何で…嫌だよ…助けてよ恭介…」

杏子の語ったソウルジェムの正体。

さやかは、その事実だけはどうしても受け入れられなかった。

それは既に自分が『人間』では無くなったことを証明してしまうからだ。

そんなさやかの下にきゅうべえが現れる。

QB「どうしたんだいさやか？」

まるで、何事も無かったようにさやかに質問するきゅうべえ。

さやかは、杏子の話していることが真実なのかきゅうべえに質問する。

QB「そうだけど？別にたいしたことじゃないだろう？むしろ君達には感謝されてもおかしくないと思うんだけど…」

さやか「どうしてこんなことするのよ!?!」

きゅうべえに向かって問い詰めるさやか。

おもむろにきゅうべえはさやかのソウルジェムを取り出す。  
そして…

さやか「あ…ぐ…」

さやかの全身に激痛が走る。

QB「つまりこういうことさ。ソウルジェムが傷付かない限り、魔法少女は戦い続けることが出来る。もちろん、グリーンシードは必要だけどね」

苦しんでいるさやかを尻目に部屋から消えるきゆうべえ。

残酷な現実を突きつけられた少女は一晩中泣き続けていた。

照井に自宅まで送ってもらったマミは、未だに現実が受け入れられないでいた。

ずっとパートナーだと思っていたきゆうべえから告げられた真実。

きゆうべえにとって自分は単なる消耗品でしかないこと。

それらの事実が少女の心を蝕んでいた。

マミ「…嘘よ…」

絶望と同時に彼女の心に湧き上がる感情は焦燥。

上条当麻と鹿目まどかの自分を見る目が変わることや『人間』としてではなく『化け物』として見られるかもしれないという恐怖。

死の危機を救ってくれた上条の態度が豹変することを何よりも恐れていた。

魔法少女の真実を知ってショックを受けているのは彼女だけではなくのだが、彼女の頭にそれらの事柄が浮かぶことは無かった。

きゆうべえがソウルジェムの真相を語った日から一夜明けて、仁美は昨晚の出来事をまどかとさやかに話そうとしていた。

しかし、まどかとさやかの表情が非常に沈んでいた。

仁美「何かあったのですか？」

まどか「うん…」

さやか「ごめん仁美。ちょっとそつとしといてくれない？」

仁美「分かりました…」

二人の態度を見て話をするところではないと判断した少女は、二人の機嫌が良くなるのを待つことにしたのだった。

夕方、授業が終わり街中を歩いていた上条は覚束ない足取りの杏子を見かけた。

二人はいつもの公園に向かって、ベンチに座り込んだ。

何も語らない二人に、杏子は上条に質問する。

杏子「昨日あんなことがあったけどさ…あんだ、あんま驚いてなかったじゃん…もしかして知ってたのか？」

上条「ああ、曉美から聞いたんだ…」

杏子「そっか…」

そのまま何も話さず、時間が過ぎようとしていたが、杏子が唐突に口を開く。

杏子「魔法の力を手に入れて、魔女って化けモンを狩り、普通じゃない力を持っていることは分かってたけどさ…自分も化けモンになつてたなんてマヌケだよな…」

上条「…」

上条は無言で杏子の話に耳を傾ける。

杏子「なあ当麻…幸せを願った少女の話…って、聞いたことあるか？」

上条「無いけど…」

杏子「じゃあちよつと聞いてくれよ」

上条「ああ…」

少女は幸せを願った少女の話を語る。  
話を聞き終わった上条に杏子は尋ねる。

杏子「どう思った？」

上条「色々間違ってると思うんだけどな」

杏子「え？」

上条「不幸な結末を迎えてしまったって事實はもう変えられないけど、少女が助けたいって思った気持ちは偽りなんかじゃない」

杏子「…」

上条「それに、誰かを助けたいって気持ちを否定するのは間違ってる。一回失敗したからって誰かを助けちゃいけないなんて法則は存在しない」

杏子「…」

上条「俺としては、自分の為だとか他人の為だとか小難しいことは考えずに、自分がやりたいと思ったことをやった方がいいと思うぞ」

杏子「（自分がやりたいことか…）」

上条「もし、そんな少女が地獄の底にいるってんなら、その場所から引きずり上げてやるさ」

杏子「…ふふ」

上条「何だよ？」

杏子「いや、やっぱり当麻は馬鹿だな〜っておもってさ」

上条「失礼だな。それに俺だって諦めているわけじゃないんだぞ」

杏子「え？」

上条「ソウルジェムが本体なんて、魔法少女の苦しみは魔法少女にしか分からないけど、俺はこのまま黙っておくつもりは無い」

杏子「…」

上条「魔法少女は救われないなら、俺がその幻想をぶち殺す」

杏子「…ありがとよ」「ボソッ

上条「何だ？」

杏子「何でもねえよ」

一切の迷い無く、魔法少女を助けてみせると宣言する上条。  
上条の話聞いて杏子は確信する。

杏子「（当麻は底抜けのお人好しで馬鹿だから、この話をしてみよ  
うと思ったのかな…）」

そんな上条当麻だからこそ、過去に大勢の人間の絶望を打ち砕く事  
が出来たのだろう。

『Wサイド』

警察の寮にて、フィリップは『地球の本棚』にアクセスしていた。  
ちなみに、翔太郎と照井は見回りで亜樹子を買出しに言っていた。

フィリップ「（やっぱり、『ダイヤモンドパンツ』ほどの硬さ  
を誇るわけではない。ならば何故、平然と立っていられる？）」

謎の仮面ライダーがWとアクセルのマキシマムドライブを喰らって  
も動いている理由。

フィリップ「（ゾンビみたいか…まさか…）」

フィリップはある種の結論を出す。

フィリップ「（風都に居た頃には分からなかったけど、ここは見滝  
原…魔法少女の存在がある…それに、インキュベーターと財団？は  
繋がっている）」

フィリップの頭の中に浮かぶ最悪の結論。

フィリップ「もし、そうなら僕達に打つ手は無い…」

フィリップは自分の結論が矛盾していることを願い、再び地球の本棚で検索を再開するのだった。

仁美「(まどかさんもさやかさんも大丈夫かしら…)」

様子のおかしい親友を心配しながら少女は、自宅に向けて移動していた。

そこで、少女は有り得ない物を見た。

仁美「え？」

先日、自分をドーパントから助けってくれた巨大クワガタが倒れているのだ。

呆気に取られていた仁美だったが、我に帰り実家の執事に連絡をして巨大クワガタを自宅に運んだのだった。

巴マミは街中を覚束ない足取りで歩いていた。

彼女は今日の学校を無断で休んでいた。

あまりにもシヨックが大きく、学校に行く気分になれなかったのだ。今まで接してきた人達の視線が変わるかもしれない恐怖。

それは、徐々に彼女の精神を蝕んでいたのだ。

そして、少女は赤信号であることに気付かず道路に出る。

ブー！！

トラックがマミに迫っていた。

マミはその姿を見て、自分でもよく分からないうちに笑っていたの

だ。

『人間』ならばトラックに轢かれれば死は免れないが、生憎自分はもう『人間』ではない。

『化け物』となっていた自分はこの程度では死ぬことも叶わない。

少女は微動にしなかった。

しかし…

ドン！！

マミ「え…」

少女は背後から何者かに突き飛ばされた。

そして…

グシャア！！

何者かがトラックに轢かれたのだ。

マミは呆然としながらも後ろを向く。

そこには…夥しい量の血液を全身から出して倒れていた上条当麻が居た。

マミ「…嘘…」

少女は、目の前の『現実』が受け入れられなかった。

そうしているうちに、通行人が集まってくる。

少女は、二度も自分の不注意で少年を巻き込んだのだ。

マミ「いや…いやよ…」

通行人が呼んだのかは分からないが、救急車が現場に到着する。

「ママミ」いやああああ！！！！」

ママミはの絶叫がその場所に響き渡った。病院に搬送される上条当麻。

その情報は、まどか達や翔太郎達に行き渡った。

一定時間が過ぎて、鹿目まどかと美樹さやか、佐倉杏子が手術室の前に集まっていた。

また、その場には虚ろな目をしたママミが座っていた。

まどか「そんな…何で上条さんまで…」

まどかは心が壊れてしまいそうだった。

魔法少女の真実を思い知らされて、気が沈んでいる上に、上条が事故にあつたのだ。

さやか「…」

杏子「どうなってるんだよ…」

手術が終わり、医者が手術室から出てくる。

杏子「当麻の容態は!？」

医者「何とか一命は取り留めました。しかし…」

まどか「しかし…?」

医者「全身の損傷が激しく、一生動けない身体になる可能性が非常に高いです…それに、一ヶ月は絶対安静です」

さやか「そんな…」

まどか「何で上条さんが…」

マミ「……私のせいで…」

杏子「…」

そうまどか達に話し、その場から立ち去る。

杏子はマミに対して質問をする。

冷静に見えるが、相当の怒りを放ちながら…

杏子「何があつた？」

マミが前方不注意で赤信号になっているのに、気付かずトラックに轢かれそうになる寸前、上条がマミを突き飛ばし、彼女の代わりにトラックに轢かれたのだ。

マミの説明を聞いた三人は…

まどか「そんな…なんで…ひどいよ…」

さやか「上条さん…何で…」

杏子「…」ギリッ

マミ「…どうして上条君は私なんかを庇ったの…」

まどか「え…?」

さやか「…」

杏子「…」

マミ「ソウルジェムの事は知っているはずなのに…」

心臓が破れても、ありったけの血を抜かれても、ソウルジェムさえ無事ならば魔力で修復してまた動けるようになるゾンビといっても過言ではない身体。

マミ「…何で…こんな馬鹿な真似を…」

マミの言葉を聞いた杏子は…

パン！

廊下に頬を叩く音が響く。

杏子はいつもの飄々とした態度や獰猛な獣のような雰囲気ではなく、ただ怒っていた。

杏子「あいつにとってあたし達は『化け物』じゃなくて『人間』なんだよ！！」

「「「え？」「」」

杏子「あいつは、きゅうべえの奴がソウルジェムの正体を語るより前に、その事実を知ってたんだよ…」

さやか「どっぴいっぴいと…」

杏子「ほむらの奴から聞いたんだとさ…」

まどか「ほむらちゃんが…」

マミ「じゃあどうして尚更庇ったりしたのよ…」

杏子「あいつは言ってたんだよ。ソウルジェムが本体なんて、魔法少女の苦しみは魔法少女にしか分からないけど、俺はこのまま黙っておくつもりは無い。魔法少女は救われないなら、俺がその幻想をぶち殺すってな…」

「」「」「」

杏子「確かに放っておいてもマミは死ななかつたけど、あいつはお前を放っておけなかつた。それが、あいつがお前達を『人間』って思ってる証拠じゃねえのか!？」

マミ「私…は…」

杏子「こいつにとって『人間』か『魔法少女』かなんて問題じゃねえ。ただ、苦しんでいる奴を放っておけない馬鹿なんだよ…」

その場で泣き崩れるマミ。

上条当麻が、自分に対する態度を変えることなど有り得なかったのだ。

そもそも、上条当麻がいなければ巴マミはお菓子の魔女に殺害されていたのだ。

自分の右腕さえも犠牲にして他人を助けようとする少年。

不幸に苦しめられている人間がいるならば、どのような境遇であろうと決して見捨てず、己の身一つで助け出そうとする飛び切りの馬鹿。

さやか「馬鹿だよ…上条さん…本当に馬鹿だよ…」

魔法少女でもない単なる人間の身体一つで、他人を助けるために命を掛けることが出来る人間。

さやか「（恭介も私を上条さんみたいに『人間』として見てくれるのかな…）」

まどか「上条さん…」

まどかも上条の優しさを理解していた。

優しさに限界がなく、何時だって他人を助けるために全力で目の前の困難に立ち向かう。

まどか「（上条さんはきつと…特別な力なんかなくても…誰かを助けるために戦えるんだ…）」

それから少し時間が経ち、翔太郎達も病院に到着する。

上条の容態を聞いて驚く翔太郎達だったが、すぐさま落ち着きを取り戻す。

その場にいる皆が上条当麻の回復を祈っていた。

自宅に巨大クワガタを運んだ仁美はあることに気付く。

巨大クワガタは身体の至るところに傷を負っていたのである。

治療をしようとする仁美だったが、治療法が分からずおろおろしていたが、突然巨大なクワガタが緑色の光を放出し始める。

意味不明な出来事に混乱する仁美だったが、目の前で起きている出来事に驚愕していた。

クワガタの傷がみるみる内に修復していったのである。

一体、この巨大クワガタの正体は何なのかと謎が尽きない仁美であった。

第16話 『Q』の誘惑／救われぬ者に救いの手を（前書き）

主「皆さんこんにちはおp主です。毎度の事ながら上条さんは重傷を負うのが宿命みたいですね」

上条「誰のせいだと思ってんだよ…」

主「上条さんが重傷を負ったのは私の責任だ。だが私は謝らない」

上条「不幸だ…」

主「それにしてもこのはんバーがーはおいしいな」

上条「口調がおかしくなってるぞ!？」

主「ソんなわけないじゃないか。トにカク、ハじまりマすよ」

## 第16話 『Q』の誘惑/救われぬ者に救いの手を

『見滝原総合病院』

上条が病院に搬送されてから数時間後、上条が世話になっている鹿目家の人も病院に到着した。

知久「当麻君は大丈夫なんですか!？」

洵子「トラックに轢かれたって聞いたけど…」

タツヤ「…おにいちゃん…」

上条の容態と手術の結果を照井から聞いた彼等は…

タツヤ「…」

洵子「そんなのありかよ…」

知久「一生動けない身体になるかもしれないって…」

想像以上に重体に動揺を隠せない鹿目洵子と鹿目知久。

幼いながらも鹿目タツヤも上条の容態が理解できたらしい。

短い間ながらも、上条が無茶をする様な人間ということは把握していたが、一生動けなくなるかもしれない程の重傷を負うなんて誰が想像出来ただろうか。

一旦帰宅することに決めたまどか達。

当然ながら、彼女達の足取りは重かった。

『見滝原中学校』

翌日、落ち込んでいるまどかとさやかの二人に仁美が質問する。

仁美「何があったのか相談してもらってもよろしいですか？」

まどか「うん…」

さやか「上条さんがね…」

まどかとさやかは上条の事故について仁美に話す。

そのことを聞いた仁美はショックを隠せなかった。

彼女自身、上条とあまり交流があるわけではないが、不良達や魔女から助けってもらって恩を感じていた。

同時に仁美は、まどかとさやかの元気がなかったことの原因がそれであると推測する。

(厳密には違っているのだが…)

今日こそは、まどかとさやかの二人に巨大クワガタについて話そうと思っていたのだが、またもや話す機会を失った志築仁美だった。

『見滝原総合病院』

再び病院に集まった魔法少女一同。

上条のお見舞いに来ていた彼女達だったが、表情は暗かった。

彼女達が集まったのは上条の見舞いという目的があるが、今後の予定についての話し合いも含まれていた。

話し合いの結果、上条が抜けて穴を自分たちでカバーしてみせるという話になった。

杏子「…ってことだ。お前等もそれでいいな？」

マミ「ええ…」

まどか「うん…」

さやか「…」

さやかは杏子の態度に違和感を覚えていた。

初めて自分があつた時は、他人なんて放っておけなんて告げた人間が、この様な場の話合いに積極的に参加していることが不思議でならなかった。

しかし、考えても仕方がないのでこのことはとりあえず、忘れることにした美樹さやかであった。

マミ「私のせいで上条君がこんな目にあつたんだから、私が上条君の分まで戦って見せる…」

「「「…」」」

意識の戻らない上条のためにも自分が戦うと硬く誓う巴马ミ。

彼女の場合、二度も上条に重傷を負わせてしまった罪悪感があった。

まどか「（魔法少女じゃない私でも何か出来ることがあるはず。そうだよね上条さん…）」

彼女達の中で唯一、魔法少女でない鹿目まどかは心の中で思う。

彼女がそのような考えに至つたのは、上条の言葉によるものである。魔法少女の様に魔女と戦うことの出来る戦闘力を有している筈ではないが、そんな自分でも出来ることがある筈と少女は結論を出した。

『見滝原署の警察寮』

少女達が見滝原総合病院で話し合いをしている頃、左翔太郎達も今後の予定について話し合いをしていた。

翔太郎「これから俺達はどう行動すりゃいいんだ？」

照井「俺に質問するな……」

フィリップ「僕達は彼女達を魔女と接触させないように行動するしかないだろうね……」

亜樹子「どうして？」

翔太郎「忘れたのかよ亜樹子……」

亜樹子「あ……」

翔太郎の言葉は亜樹子は重要な事を思い出す。

『地球の本棚』で調べた魔女の正体。

照井「俺達は彼女達と行動を共にするべきだと言いたいのか？」

フィリップ「ああ。彼女達に魔女を倒させるわけにはいかないからね」

翔太郎「でも、俺達が魔女を発見してもどうすりゃいいんだ？放っておいても大丈夫な奴じゃないし、捕獲なんて出来るわけないだろうし……」

フィリップ「悔しいけど、今の僕達に解決策は残されていない」

亜樹子「上条君がいればね…」

亜樹子が呟く。彼女の言葉通り、上条が居ればこの問題は解決できる。しかし、当の本人はトラックに轢かれて重傷を負い、未だに意識が戻らない。

解決策が見つからず沈黙する翔太郎だったが、翔太郎は場の雰囲気を変えるためにフィリップに謎の仮面ライダーについて尋ねる。

翔太郎「そっぴやフィリップ。謎の仮面ライダーについて何か分かったことでもあるのか？」

フィリップ「確証はないけどね…」

照井「何か思い当たる節があるのか？」

フィリップ「以前、『W』と『アクセル』のマキシマムドライブが直撃したのに、全くダメージを受けている様子は無かった」

翔太郎「ああ」

フィリップ「その話をした時、亜樹ちゃんはゾンビみたいって言ったよね？」

亜樹子「うん」

フィリップ「装甲が硬いというわけではないのに、マキシマムドライブの直撃を受けても平然としていた理由…」

照井「確かにゾンビとしか言い表せないな…」

亜樹子「ちょっと待って…それって何だか魔法少女のシステムに似てる…?」

翔太郎「言われてみれば確かに…」

フィリップ「正解だよ。流石だね亜樹ちゃん」

照井「だが、あの装甲についてはどう説明する。仮に、この推測が真実だったとしても修復するのは肉体のみの筈だ」

フィリップ「魔法少女になる際に、何でも願い事を一つ叶える事が出来るというのは知ってるよね?」

亜樹子「うん」

フィリップ「もし、ダメージを受けても即座に修復する装甲を願ったら?」

翔太郎「無限に修復する装甲が出来上がる…」

照井「しかし、ガイアメモリについてはどう説明する?ガイアメモリであるならば、マキシマムドライブの直撃で破壊される筈だ」

亜樹子「そ、そうだよ!それにソウルジェムだって、身体から離れたら危ないのに…」

翔太郎「それに、魔力を使って装甲を修復してるんなら、ソウルジェムの穢れだってすぐに溜まるはずだ」

フィリップ「身に着けたものをすぐに修復出来る願い事ならば、ガイアメモリですら復元可能かもしれないし、ソウルジェムだって体内に取り込めばそういった心配は必要なくなる。ソウルジェムの穢れだって、グリーンフシードしか浄化する手段がないと言われていたけど、もしかしたらインキュベーターは独自にソウルジェムを浄化する手段を独自に保有しているかもしれない」

「……」

フィリップの言葉に翔太郎達は返す言葉が見つからない。

フィリップ「ただの推論だから、現実とは言えないけどね……」

翔太郎「それが本当だったら、打つ手が無くなっちまう……」

フィリップの推論が外れていることを願う翔太郎達であった。

『見滝原総合病院』

数日後、上条当麻が眠る病室に一人の少女が訪れた。

ほむら「起きなさい。上条当麻」

暁美ほむらは未だに意識の戻らない上条に話しかける。

上条「……う……こ……こは……？」

ほむら「見滝原総合病院よ」

上条の意識が覚醒する。

上条「曉美…か…何で…こんな所に…」

ほむら「それはどうだっていいでしょう。そんなことより今晚、魔法少女が魔法少女に倒されるわよ」

上条「何だって…!」

ほむらの言葉に上条は目を疑う。

上条「どう…して…教えてくれた…」

ほむら「貴方が知る必要は無いわ。それに貴方は、魔法少女の運命に巻き込まれた人間を『全て』助けると誓ったんじゃないかしら？」

上条「ああ…」

ほむら「なら行きなさい。早くしないと手遅れになるわよ?」

ほむらは上条に魔法が出現する場所について告げる。

上条に場所を教えるから、曉美ほむらは病室から出て行った。

上条「こんな所で眠ってるわけにはいかねえ…!」

上条は激痛で動かすことも困難な身体に鞭を打ち、ベッドから出て病院を抜け出して、ほむらから告げられた場所に向かった。

上条が病院から出て行く様子を見ていた曉美ほむらは…

ほむら「私も甘いわね…まどかさえ助けられれば他の人間はどうな

「たつて関係ないのに…」

『魔法少女サイド』

上条が病院から抜け出していた頃、まどか達と翔太郎達は見滝原のパトロールを行っていた。

ここ数日、見滝原のパトロールを行っていたまどか達だったが、彼女達の前に魔女やドールパントが現われることは無く、現われるとしても使い魔程度の存在だった。

マミ「現われないわね…」

さやか「きつと私達に恐れをなして、逃げたんですよ」

まどか「それはないと思うけど…」

杏子「それにしても暇だな」

マミ「暇なことはそれだけ見滝原が平和ってことよ」

さやか「どんな敵が来ても、正義の味方のさやかちゃんが見滝原を守ってみせる！」

まどか「元気だねさやかちゃん…」

杏子「うじうじされるよりはマシだけどさ……」

マミ「それもそうね…あら？」

まどか「どうかしたんですかマミさん？」

「マミ」どうやら近くに魔女がいるみたいね」

マミの言葉で気を引き締めるまどか達。

魔女の結界を発見して、内部に侵入する魔法少女達。

杏子「ようやくおでましか」

杏子は狩りを楽しむ肉食動物を彷彿とさせるような表情で呟く。

まどか「何度来てもやっぱり慣れないね…」

さやか「大丈夫だって、あたしの嫁のまどかだけは何かあっても絶対守ってみせるからさ！」

「マミ」油断せずだね…」

使い魔を蹴散らしながら、最深部に到達する魔法少女達。

最深部に佇む魔女を発見して戦闘態勢をとる魔法少女達と、彼女達の後方に移動する鹿目まどか。

戦いを始める三人の魔法少女と魔女。

三人の戦いを後方から心配そうに眺めるまどか。

しかし、彼女の心配も杞憂であり三人はいとも簡単に魔女を追い詰めて行った。

三人の魔法少女が戦っている上、内二人はベテランの魔法少女ということもあり、楽にこのまま魔女を倒せる筈だった。

杏子「これでとどめだ！」

杏子が魔女にとどめの一撃を刺そうとする。

しかし、彼女の脳裏に上条と共に戦ったときの光景が浮かぶ。

魔女が居た場所に、中学生位の少女がいたことを…

それは、マミとさやかも同様であった。

あの少女の正体が未だに掴めていない少女達だったが、その出来事が彼女の動きを鈍らせる。

その隙を見逃さなかった魔女は、非戦闘員であるまどかに攻撃を放った。

唯の人間であるまどかに、魔女の攻撃を避けるすべなど存在しなかった。

まどか「きゃああああ！！」

さやか「まどかあああ！！」

マミ「鹿目さん！！」

杏子「くそ！！」

しかし、魔女の攻撃が少女に当たることはなかった。

バキン！！

「「「「え？」「」「」

少女達は魔女の攻撃を防いだ人間を見て驚愕する。

何故なら、その人物は此処にいるはずの無い人物だったからである。

まどか「上…条…さん？」

上条「無事か…まどか…」

少年の身体に巻かれた包帯から、血が滲んでいた。  
その姿を見た彼女達は…

杏子「何でそんな身体でこんな所に来たんだよ!!」

さやか「そうですよ!!」

マミ「貴方は安静にしてなければいけないのよ!!」

上条に対して怒りを露にする少女達。

上条「こいつは…俺が片付けないと…いけないんだよ…」

満身創痍の上条は、クロスドライバーと二つのガイアメモリを取り出す。

『Imagine!! Breaker!!』

仮面ライダー?に変身する上条当麻。

まどかはぼろぼろになりながらも魔女に立ち向かう上条の姿を見て…

まどか「上条さん…どうしてそこまで…」

?は魔女に向けて動き出す。しかし、上条のダメージは想像以上に大きく動きも覚束ない。

?「サポート…頼む…」

杏子「…分かったよ」

上条の言葉を聞いていた杏子は上条のサポートを行う。

マミとさやかも杏子に続いて、上条の援護に回る。

魔法少女の猛攻を受けて、魔女は動きを止める。

三人の魔法少女達は魔女の身体を上条の方へ飛ばす。

上条はガイアメモリを強く押し込む。

『Maximum Drive!!』

上条の右手が輝き始める。

そのまま、魔女に向けて右手を叩きつける。

魔女の身体は光に包まれ、その場には一人の少女が倒れていた。

上条もその場に崩れ落ちる。

まどか「上条さん!!」

まどか達が上条の下に駆け寄る。

杏子「気絶したみたいだな…」

さやか「何でこんな無茶を…」

マミ「話は後よ。とにかく彼を病院に戻さない」と

マミの一言に賛成して、まどか達は病院に向けて移動しようとしていた。

翔太郎「魔女は居なかったぞ…って何で上条が居るんだ!？」

照井「どうなっているんだ…」

翔太郎達に簡単な説明をするマミ。

話が終わり、照井が上条をバイクに乗せて病院に連れて行くという話になり、早速移動しようとしていた彼等の前に一人の少年が現われた。

翔太郎と照井は、目の前の少年に見覚えはなかったが、まどか達は少年に見覚えがあった。

まどか「あ…あの人!！」

翔太郎「知ってるのか？」

さやか「知ってるも何も…!！」

少年はガイドドライバーを取り出す。

照井「ガイドドライバーだと!？」

少年は続いてガイアメモリを取り出す。

『ボルケーノ!!!サンダー!!!』

ガイドドライバーに二つのガイアメモリを取り出し、それをセットする少年。

少年の姿が見る見る内に変質していく。

翔太郎「あいつ!?!」

照井「正体が子供だと!?!」

彼等の前に現われたのは、謎の仮面ライダーだった。

『サイクロン!!! ジョーカー!!!』

『アクセル!!!』

翔太郎&フィリップ「変身!!!」

照井「変...身!!!」

すぐさま変身する二人。マミ達も再び魔法少女に変身する。

まどか「何でこんな時に...」

魔女と仮面ライダーの連戦など、予想だにしない出来事が発生してまどかは混乱していた。

さやか「いくら強敵って言うっても流石に五人で掛ければ倒せるでしょ!」

マミ「最初から全力で行くわよ!」

杏子「即効で倒させてもらおうぜ!」

剣を抜くさやかと大量のマスケット銃を召還するマミ、槍を多節棍に変形させる。

謎の仮面ライダーは、『W』と『アクセル』と『魔法少女』の姿を一瞥した後、メモリチェンジを行った。

『イリユージョン!! キヤノン!!』

体色が変質して、五体に分離する。

以前戦ったときには、エンジンブレードに似た剣だったが、今回は銃に変形していた。

戦い始める両者。まどかは気絶している上条の傍で戦いを眺めていた。

五対五の戦いとなっているが、戦いは翔太郎達に方が有利に見えた。しかし…

杏子「(どうなってやがる…確かに攻撃は当たったはず…)」

杏子の多節棍の一撃が容赦なく、謎の仮面ライダーに直撃する。

しかし、その攻撃を意に介さず攻撃を続行する謎の仮面ライダー。

杏子の疑問はマミも同じように抱いていた。

変形した銃で、攻撃を加えていく謎の仮面ライダー。

『トリガーメモリ』より高い攻撃力を誇る『キヤノンメモリ』

それによる銃撃は徐々に彼等を追い詰めて行った。

まどか「このままじゃ…」

戦いにおいて素人であるまどかの目にも、彼等の劣勢は明らかだっ

た。

そんな、彼女の下にきゆうべえが現われた。

QB「このままじゃ彼女達は殺されるだろうね」

まどか「きゆうべえ…」

まどかは警戒しながらきゆうべえを見る。

彼女にとって、きゆうべえは親友や先輩を絶望のどん底に叩き落した張本人だからだ。

そんなまどかの態度を無視して、きゆうべえは言葉を続ける。

QB「でも君が魔法少女になるなら、彼女達を助けることが出来るよ」

まどか「でも、私一人が魔法少女になっても皆を助けることなんて…」

魔法少女が一人増えただけで、この状況を逆転できるとは考えられない。

尚更、戦いの経験もない自分が役に立てるとは思わない。

まどかはそう考えていた。

QB「君は今までの魔法少女とは比べ物にならないほどの力を秘めているんだ。それに、もし願い事を叶えた後でも、君の力があれば彼女達を助けることが出来るんだよ」

もし、本当に自分にそんな力があるならばと考えるまどか。

以前、上条に人を助けるのに特別な力なんて必要ないと告げられたことがあるが、特別な力がなければ現状を打破出来ないという状況

に追い込まれているのだ。

まどか「本当なの?」

QB「本当さ」

まどか「なら私はけいや」だ…めだ…!」え?」

意識を取り戻した上条はまどかに話す。

上条「お前は…魔法少女に…なっちゃ駄目なんだよ…!」

まどか「でも私が魔法少女にならないと皆が…!」

QB「そうだよ。それとも君は彼女達が死んでも構わないってことなのかい?」

上条「あいつの…想いを…踏み躪らせるわけには…いかねんだよ…!」

まどか「あいつ…?」

上条「俺が…戦う…」

まどか「駄目だよ!これ以上戦ったら死んじゃうよ!」

まどかの制止を振り切り、再び立ち上がり変身する上条。

そして、彼は『E』のメモリをクロスドライバーにセットする。

『Experience!!』

『Salvare000!!』

今までの姿とは異なり、姿や体色が変化していなかった？。

しかし、彼の手には大太刀が握られていた。

上条がまた変身したことを知った魔法少女達と仮面ライダー達は、謎の仮面ライダーから一旦離れる。

杏子「また変身したのかよ！」

さやか「何ですかその刀？」

マミ「無茶しないで！」

W「その姿は？」

アクセル「ここは俺達に任せておけ！」

矢継ぎ早に？に話しかける面々。

？は無言で、謎の仮面ライダーの方を向いて、そしてその場から姿を消した。

否、速過ぎてその場から消えたように見えただけである。

？はそのまま、大太刀『七天七刀』で謎の仮面ライダーを切り裂く。本体とは異なり、そのまま姿が消滅していく分身。

その戦いを見ていた面々は…

杏子「何だよあれ…」

さやか「強すぎでしょ…」

マミ「上条君…」

まどか「上条さん…」

W「彼は本当に何者なんだろうね…」

アクセル「トライアルのマキシマムドライブと同じ速度で、あの攻撃力を誇るとは…」

QB「…」

鬼神の如き戦いぶりに呆然としていた。

？と謎の仮面ライダーとの一騎打ちが始まる。

あまりにも、絶大な戦闘能力を誇る？に謎の仮面ライダーが倒されるのも時間の問題と思われるが、そこで予想外の事態が発生した。

？の『七天七刀』によって切り裂かれた装甲が信じられない速度で修復しているのだ。

さやか「何よあれ…」

杏子「化けモンかよ…」

まどか「何で…」

マミ「仮面ライダーにはあんな力まであるんですか…？」

アクセル「そんなはずは無い……」

W「（やはり……）」

信じられない能力に驚きを隠せない少女達。

そのまま、戦い続けるのかと思っていたが、謎の仮面ライダーは？  
に背を向けその場から立ち去って行った。

一方で、変身を解除した上条は魔女の戦いの時と同じように再び  
絶したのであった。

## 第17話 少女の『Z』 / 誰の為の戦い

『見滝原総合病院』

意識を失った上条を病院へ搬送する少女達。

絶対安静と言われているのに、無理をして病院を抜け出すこともあり、少年の身体から大量の血が流れていた。再び手術が行われることになった。

上条は何とか一命と取り留めてたが、医者の話によると後少しで死んでいたのかもしれないと話だった。

少年の容態が安定して、安心するまどか達。

まどか「上条さん…何であんな無茶を…」

さやか「後少しで死んでたかもしれないって…」

マミ「本当に無茶すぎよ…」

杏子「何であいつは病院を抜け出してまであたしらの所に来たんだ？それに、どうやってあたし達が居る場所を掴んだんだ？」

まどか「それは…」

翔太郎「…」

照井「…」

杏子の疑問に答えられる者はその場に居なかった。

上条が、魔女の戦いの最中に現われたことや自分達の下に駆けつけ

ることが出来たのかということ。  
本来なら意識が覚醒しないまま、魔女との戦いを終える可能性が高い。  
あまりにも、偶然とは言い難い様な出来事が連続して発生しているのだ。  
勘の鋭い人間ではなくとも、今の状況が偶然と片付けられる人間はいないだろう。

杏子「もしかして、ほむらが関係しているのか？」

マミ「確かに…」

さやか「そう言えば…」

上条がソウルジェムの正体を知っていたのも暁美ほむらからの情報によるものだったからだ。

マミ「恐らく、暁美さんが上条君に私達の情報を伝えていたんじゃないかしら。そうじゃないと上条君が私達の下に辿り着けたとは考えられないし…」

杏子「じゃあほむらの奴は一体何者なんだよ。魔女の出現する場所やソウルジェムの事についても詳しいようだし…それにそんなことをして何の得があるんだよ」

まどか「…」

さやか「…」

照井「…」

翔太郎「…」

一連の会話から照井と翔太郎は上条が暁美ほむらと繋がっていることを知る。

彼女の正体を知っている二人からすれば、ほむらが上条に情報を提供したということは何らおかしくないのだ。

上条の力を知っている彼女が少年を放っておくわけがない。

しかし、二人は少女の行動の真意が分からなくなっていた。

少女は確かに、鹿目まどかの魔法少女化を阻止することが目的だと言っていた。

しかし、今回は上条を現場に向かわせる必要は無かったのではないか。

魔法少女が三人もいる状況で、上条を救援に向かわせる必要はない。例え、魔女を『殺す』ことになっても…

謎の仮面ライダーの襲撃の件だって、彼女にとっても予想外だったに違いない。

何故なら、彼女はドーパントの存在を知らなかったからだ。

翔太郎「（気が変わったのか？）」

照井「（何を考えている？）」

しかし、彼女の行動の真意を知るものはこの場にいない。

マミ「何にせよ私達が知らないことを暁美さんが知っているのは確かだね。今度、彼女に会ったらそのことについて尋ねればいいんじゃないかしら？」

杏子「それしかないな」

まどか「(ほむらちゃん…)」

さやか「しっかし転校生は一体何者なんだろうね…ねえ、まどかも  
そう思うでしょ？」

まどか「えっ…う、うん」

さやか「どったの？」

まどか「何でもないよ」

考えても仕方が無い事なので、少女達の話し合いは一旦終了した。

『警察寮』

翌日、警察寮で翔太郎達は謎の仮面ライダーについての話し合っていた。

フィリップ「やっぱり、あの仮面ライダーは…」

翔太郎「ああ…」

照井「…」

亜樹子「…」

？の強烈な攻撃を受けたはずの敵の装甲が異常な速度で修復していることから、彼等の予感は的中していた。

照井「やはり魔力で修復しているのか…」

亜樹子「どうすればいいんだろう…」

フィリップ「多分…打つ手無しというわけじゃないかも知れない」

翔太郎「どういうことだ？」

フィリップ「これまで、僕達は彼と戦ってきたけど、いつも戦いの途中だというのに、敵が去っていったよね？」

照井「ああ…」

フィリップ「そのまま戦い続ければ僕達を倒すくらいは別段難しいことじゃない」

翔太郎「…」ギリ

フィリップ「もしかしたら、彼が僕等を倒さないのには何か理由があるのかも知れない」

亜樹子「理由って？」

フィリップ「それは分からない。でも、もしかしたら…」

照井「もしかしたら？」

フィリップ「装甲やガイアメモリの修復に莫大な魔力を用いているのかも知れない」

翔太郎「魔力を？」

フィリップ「通常、魔法少女は戦闘の際に著しい魔力を消費する。しかし、彼は魔力を用いた武器を使用しているようには見えなかった」

照井「奴の武器は俺達の物に類似していたからな」

フィリップ「彼は、肉体の修復にのみ魔力を使っているのかもしれない」

亜樹子「それなら……」

フィリップ「継戦能力は高いはず……肉体のみの修復ならばね……」

翔太郎「あいつが修復しているのは肉体だけじゃない……」

フィリップ「ガイアメモリは地球の記憶が込められた物だ。その修復にどれだけのエネルギーを使うのかは分からない。けど、もし修復にソウルジェムが限界を迎えるほどの魔力を使用するとしたら……」

照井「それ以上戦うことは自殺行為になる」

翔太郎「だから、それ以上戦うことはないってことか？」

フィリップ「确实じゃないけどね……」

翔太郎「なら、何度もメモリブレイクすれば倒せるかもしれないってことか？」

フィリップ「もし、それが合っているならね…」

希望の見え始めていた中で、照井竜が口を開く。

照井「フィリップ。俺と左の二人ともお前に伝え忘れていたことがある」

フィリップ「え？」

照井「仮面ライダーに変身する前の奴の姿を見た。奴は『男』だったぞ。インキュベーターの話によれば、魔法少女は少女しかねないはずだ」

翔太郎「そう言えば…」

亜樹子「じゃあ…」

フィリップ「それすらもインキュベーターの嘘かもしれない。それに、奴の目的ですら判明していないんだ。分かっているのは、インキュベーターが鹿目まどかに執着しているって事だけさ」

「…」

フィリップの一言で、翔太郎達は黙っていた。

『見滝原総合病院』

翔太郎達の話し合いから数日後、上条当麻は順調に回復して行った。本来なら、一ヶ月は絶対安静の人間が信じられない速度で回復して

いったのだ。  
歩けるくらいに回復した上条には、医者も驚愕していた。  
その姿を見て少女達は、上条は本当に唯の人間なのかと疑問を持っていた。  
しかし、少年の体調が回復していないことも確かであり、包帯が体中に巻いてあった。  
さながらミイラ男のような姿に、杏子とさやかは上条の姿を見て爆笑していた。

『魔法少女サイド』

それから一日後、今日は杏子とさやかが見滝原のパトロールを行っていた。

最初は険悪な雰囲気醸し出していた二人も、すっかり仲良くなっていた。

さやか「…はあ」

杏子「どうしたんだ？」

さやか「ちょっとね…」

溜息をつくさやかに疑問を抱いた杏子はさやかに質問する。

しかし、さやかははぐらかすだけで杏子の質問に答えようとはしなかった。

少女の元気が無い理由は、もう一週間以上幼馴染の少年に会っていないからだ。

厳密には、美樹さやかの幼馴染である上條恭介に問題があるのだが…そんな美樹さやかを見かねた佐倉杏子は、彼女を連れて公園に向かう。

そこで、彼女はおもむろに買い物袋からお菓子を取り出し、食べ初めた。

杏子「食うかい？」

さやか「うん」

杏子から差し出されたお菓子を受け取り、食べるさやか。

さやか「それにしても…」

杏子「ん？」

さやか「最初は最悪の出会いだったのに、今はこうして一緒に見滝原の見回りをしてるなんてね」

杏子「まあね。それに、こっちの方が魔女を狩り続けるより効率が良いし、グリーンフィードが無くてソウルジェムを浄化できるからね」

さやか「へ？それってどういうこと？」

杏子「もしかして知らなかったのか？」

状況が飲み込めてないさやかに、グリーンフィードが要らない理由を説明する杏子。

説明を聞き終えたさやかは驚きを隠せなかった。

杏子「あたしはそっちが知らないことに驚いたよ……」

さやか「そうだったんだ…」

何度も魔女との戦いを目撃しておきながら、その事実について理解していなかったことに落ち込むさやか、そんな少女をみて杏子は苦笑いしていた。

何気ない会話を繰り返していた二人だが、そこで佐倉杏子は美樹さやかに告げた。

杏子「もしかしてさやか…あんたは、願いを他人の為に使ったのか？」

さやか「っ…！」ビクッ

杏子の一言にさやかは無意識に反応してしまう。

杏子「そうか…」

さやか「…」

杏子「なあさやか…幸せを願った少女の話って知ってるか？」

さやか「え…？」

佐倉杏子は以前、上条当麻にした話を美樹さやかにした。

話を聞き終えたさやかは呆然としていた。

他人の幸せを願った少女は結局、誰一人幸せにすることは出来ずに最悪の結末を作ってしまった。

杏子「それでもあんたは他人の為に生きるのか？」

さやか「私…は…」

杏子の真剣な表情にさやかは言葉が詰まる。

さやかを真剣な表情で見ていた杏子は表情を緩めると…

杏子「実はこの話、前に当麻にもしたことがあるんだよ」

さやか「上条さんに？」

杏子「あいつは『不幸な結末を迎えてしまったって事實はもう変えられないけど、少女が助けたいって思った気持ちは偽りなんかじゃない。それに、誰かを助けたいって気持ちは否定するのは間違ってる。一回失敗したからって誰かを助けちゃいけないなんて法則は存在しない』って言ってたんだよ」

さやか「…」

杏子「他にも『自分の為だとか他人の為だとか小難しいことは考えずに、自分がやりたいと思ったことをやった方がいいと思うぞ』ってわ」

さやか「自分のやりたいこと…」

杏子「あいつらしいって言えばそうだけども」

さやか「上条さんらしいね…」

杏子「まあ何が言いたいかって言うと、あまり思い詰めんなよ」

さやか「ありがとね…」

杏子「ん？何か言ったか？」

さやか「何でもない」クスッ

佐倉杏子の言葉を聞いて、美樹さやかは幼馴染である上条恭介に会うことを決意する。

自分の気持ちを少年に伝える為に…

『見滝原総合病院』

それから二日後、上条の病室の扉をノックする音が聞こえた。

上条「どうぞ」

ガラッ！

ほむら「…」

上条「暁美？どうしたんだ？」

ほむら「上条当麻。貴方に伝えなければならないことがあるわ」

上条当麻の病室に暁美ほむらが現われる。

上条「伝えなければならないこと？」

ほむら「今晚、美樹さやかが…（…）するわよ」

上条「な…！！！！」

上条はほむらの言葉に愕然とする。

ほむら「詳しく話している暇は無いわ。場所は(…)(…)」よ

そう上条に告げたほむらは病室から颯爽と出て行く。

上条はベッドから起き上がり、病室から出ようとす。

ガラッ！

「マミ」どうしたの上条君？」

巴マミが売店から病室に戻ってきた。

上条「美樹が危ない！急がないと…」

マミは上条の様子が普通ではないことを悟る。

マミは回復していない上条を止めるべきかと考えたが、上条が簡単に止まるような人間ではないことを理解していた。

「マミ」場所は！？私も手伝うわ！！」

少女は、上条に協力することに決める。

上条当麻と巴マミは病院を抜け出して美樹さやかの下へ急いでいた。

ドシュー！！グチャ！！

路地裏にて美樹さやかは使い魔を虐殺していた。

彼女の身体には夥しい量の血液が付着しており、ソウルジェムは濁りきっていた。

さやかは使い魔と戦う前に、ドーパントに遭遇していた。魔法少女として日の浅い彼女には、荷が重い相手だったが痛覚を完全に遮断してドーパントを撃退したのである。

さやか「痛くない…痛くないのに…何で…」

使い魔を倒した美樹さやかは一人涙を流していた。少女のソウルジェムは限界を超えていたのである。そこに、鹿目まどかと佐倉杏子が駆けつける。

まどか「さやかちゃん…」

杏子「お前…ソウルジェムが…!!」

さやか「ごめんね…」

さよかのソウルジェムが禍々しい光を放つ。

そして、美樹さやかは『魔女』となってしまうのだった…

## 第18話 少女達の『O』 / 闇を切り裂く閃光

『魔法少女サイド』

美樹さやかは幼馴染の上條恭介に自分の思いを伝える為に少年に会うことを決意していた。

少女は少年を探して、少年の実家に向かう。

しかし、少年は出掛けているとのことだった。

さやかは後日、恭介の実家に再び訪れることに決めた。

少女が自宅に向けて移動していた最中で上條恭介を見つける。

ただし、見たこともない少女も一緒だったが…

恭介「あれ？さやか？」

思いがけなかった出会いに動揺しながらもさやかは気になることを恭介に尋ねる。

さやか「恭介？そつちの子は？」

恭介「言っただけだった？僕の彼女だよ」

さやか「え…？」

恭介「入院している間に仲良くなったんだ」

恭介の隣にいる女の子がさやかに向かって会釈する。

恭介「そう言えばさやか。入院中に何度も世話になったのに無視するみたいな形になって本当にごめん」

さやか「…」

恭介「さやか？」

さやか「そつか…恭介…彼女出来たんだ…」

恭介「そうだけど…」

さやか「いや〜良かったじゃん！音楽馬鹿の恭介にも春が訪れたんだね〜」

恭介「音楽馬鹿って…」

さやか「とにかく…おめでとう恭介！」

恭介「ありがとうさやか」

さやか「そういや私用事あったんだ。てなわけで…じゃあね…恭介」

恭介「またねさやか」

恭介と隣の彼女に別れを告げて、その場から立ち去る美樹さやか。

少女は無意識に見滝原の公園に訪れていた。

そして、ベンチに座り少女は誰にも聞こえないような声量で呟く。

さやか「恭介…彼女出来たんだ…」

自分が想いを寄せる幼馴染に既に彼女がいたという事実。

さやか「っ…」グス

幼馴染の腕を治すことを条件に、死と隣り合わせの戦場に赴いた一人の少女。

見滝原を守ると誓った少女の気持ちに嘘偽りは無い。

しかし、その根底には上條恭介の存在があつた。

上條恭介には彼女が居た。

だからこそ少女の想いは決して報われることはない。

そのことを自覚した少女は…

さやか「な…んで…恭…介…」

全ての『希望』を失つたのだつた…

信じられない光景に、目の前の現実が受け入れられない鹿目まどかと佐倉杏子。

そんな二人の下に、上条当麻とバママミが到着する。

ママミ「二人とも大丈夫!？」

上条「あれって…まさか…」

魔法少女に変身するバママミだが、いつまでも放心しているまどかと杏子に違和感を覚える。

ママミ「二人ともどうしたの!？」

以前現われた魔女も、精神に直接攻撃するような手段を使っていることから何かされたのかと勘繰るママミ。

魔女に攻撃を開始しようとするママミ。

杏子「やめるマミ…！」

マミに向かって叫ぶ杏子。

彼女の様子が普段とはあまりにも違い過ぎることにマミは、ただならぬ事態であることを察する。

まどかは耳を澄まさなければ聞こえないほどの声で咳く。

まどか「さやかちゃん…！」

マミ「鹿目さん…どういふことなの…？」

杏子「あの『魔女』はさやかなんだよ…！」

マミ「え…？」

杏子の言葉が理解できない巴マミ。

目の前の魔女が美樹さやかと話す佐倉杏子。

まどか「さやかちゃんのソウルジェムが濁りきって…さやかちゃんが魔女に…！」

マミ「嘘…！」

上条「…」「ギリ

無言で変身する上条に杏子が質問する。

杏子「もしかして当麻…お前…知ってたのか…？」

？「とにかく美樹を止めるぞ…」

まどか「それってさやかちゃんを倒すって事なの…？」

？「殺さねえよ！！」

マミ「でも…どうしたら…」

？「巴と杏子はサポート頼む！！」

杏子「さやかを助けることができるのか！？」

？「分からないけどやるしかねえだろ！！」

上条の言葉を聞いて、魔法少女に変身する杏子。

上条はまどかの方を向くと…

？「美樹は絶対に助ける！だからお前も諦めるんじゃないぞ！！」

まどか「上条さん！！さやかちゃんをお願い！！」

魔女化したさやかとの戦いを開始する上条達。

魔女は凄まじい量の車輪を上条達に向けて放つ。

三人とも車輪を破壊していくが、圧倒的な物量に徐々に押されていた。

杏子「くそ！このままじゃ…！」

マミ「車輪の数が多すぎるわ！」

？「くっ…！」

まどか「さやかちゃん…！」

槍を變形させて車輪を破壊する佐倉杏子やマスケット銃を大量に召還するバマミとは異なり、？の基本的な攻撃手段は拳しかない。その上、魔女は上空に鎮座しており攻撃を当てる手段が無い。防戦一方の彼等に魔女は、先程までの車輪とは比較にならない大きさの車輪を射出する。

杏子「おいおい…！」

マミ「幾らなんでも大きすぎるわよ…！」

上条は『E』のメモリを取り出し、クロスドライバーにセットする。

『エクスペリエンス…！』

『エレクトロマスター…！』

？の身体が雷を連想させるような姿に変化する。

マミ「何をする気なの…？」

？「誰かコインとか持ってないか…？」

杏子「何言ってるんだよ…！」

まどか「わ、私持つてるよ！」

？「ちよつと貸してくれ！」

まどかから五百円玉を渡される？。

そして彼は、五百円玉を親指で上に向けて弾く。

五百円玉が？の正面に落ちる瞬間、上条の目の前に閃光が走る。

ドゴオオン！！

レールガン  
超電磁砲

それは、上条当麻が元居た世界にいる学園都市第三位の少女である御坂美琴の通り名でもあり、彼女の必殺技の名前でもある。

超電磁砲の直撃を受けた車輪は粉碎された。

魔女の攻撃を凌いだ彼等だったが、魔女は再び大量の車輪を発射した。

しかし、？が体中から膨大な電撃を発生させて車輪を次々に破壊していく。

魔女の攻撃を防ぐことには成功したが、彼等には決定打が無い。

？は杏子の方を向いて…

？「俺をあいつが居る所まで投げることが出来るか？」

杏子「ああ…出来るけど…」

？「じゃあ頼む！」

？が考えていることは理解できないが、おとなしく？に従う佐倉杏子。

彼女は？を手で掴み魔女の場所まで投げるようなことはしなかった。

？「あ、あの佐倉さん…ナゼ上条さんは槍に巻き付けられているの  
でせう？」

杏子「こっちの方がスピードが出るだろ？」

？は杏子の変形した槍に、身体を巻かれていた。  
そして杏子は…

杏子「じゃあ気合入れて逝って来い！！」

？「不幸だあああ！！」

凄まじい速度で投げられる佐倉杏子の槍（上条当麻付き）

一直線で魔女の場所まで飛んでいく？。

魔女も車輪を放ち、叩き落そうとするが？の電撃により打ち落とされる。

そして、魔女の目前まで迫った？は『E』のメモリを取り外し、『  
イマジン』と『ブレーカー』のメモリを強く押し込む。

『マキシマムドライブ！！』

？「うおおおお！！」

魔女が光に包まれる。

ズドオン！！

一方で攻撃を行った？は地面に激突していた。

光に包まれて魔女の居た場所には、美樹さやかが居た。  
当然、彼女も空高くにいたのだが…

杏子「よっと…」

佐倉杏子にキャッチされていた。

まどか「さやかちゃん…」

杏子「おい…意識はあるか!?!」

美樹さやかに呼び掛ける鹿目まどかと佐倉杏子。

さやか「う…」

まどか「さやかちゃん!?!」

杏子「さやか!?!」

マミ「美樹さん!?!」

さやか「あれ…あたし…」

美樹さやかは自分の顔を覗き込んでいる三人にの顔を見る。

マミと杏子は喜んでいて、まどかは泣いていた。

彼女達の様子を見て、さやかは自分の身に何が起こったのかを理解する。

さやか「あたし…」

まどか「良かった…本当に良かった…」

杏子「心配掛けやがって…」

マミ「どこか痛む所はない？」

自分を心配する少女達の姿を見たさやかは…

さやか「どうして…あたしなんか…」

上条「本気で言ってるのか？」

変身を解除した上条がさやかの目の前に立っていた。

さやか「え…」

上条「まどか達がどれだけお前を心配したのか分かってんのかよ…」

さやか「…」

上条「お前に何があったのかは知らない。」

さやか「…」

上条「それは、お前の人生を左右するほど重要なことだったのかも  
しれない」

さやか「…」

上条「だけど、まどか達はとうするんだよ？」

さやか「え…?」

上条「お前を助けるために必死に戦ったまどか達は、お前にとって『大切な存在』じゃないのかよ!？」

さやか「そんなつもりじゃ…」

よく見ると、杏子とマミと上条は所々出血していた。

上条「お前が自分自身をどう思っただろうが、まどか達にとってお前は『大切な存在』なんだよ」

さやか「何よそれ…まどか達が居たのに…あたしって…ほんとバカ…」グス

まどか「さやかちゃんが戻ってきてくれて良かった…」グス

少女が失ったものは、確かに人生を左右するほどのものだったのかもしれないが、少女に残ったのは『絶望』だけではなかった。

自分を心配してくれる人の存在を改めて認識した美樹さやかは涙を流していた。

上条「それにしても…さつきはよくも槍に巻きつけて投げってくれたな…」

杏子「別にいいじゃん…仮面ライダーは頑丈だしさ」

マミ「まあ確かにあの投げ方は良くないと思ったけど…」

上条「そつだよな!？」

マミ「砲台に詰め込んで発射したほうが効率的だったのに…」

上条「いや死ぬからね!？上条さんは砲弾じゃありませんのことでよ!？」

取り留めの無い会話をする少女達。

魔女の結界も消えて、一旦この場所から移動しようと考えていた上条達。

しかし…

パンン!!

乾いた音が鳴り響く。

上条「え…」

ドサ!!

「」「」「え…?」「」「」

まどか達は何が起きているのか理解できていなかった。

乾いた音が響いたら、上条が倒れていたのだ。

上条の腹部からは、大量の血液が流れていた。

まどか「上…条…さん…?」

異常な事態に混乱する少女達だったが、そこで近くの壁が崩壊して二人の男が吹き飛ばされていた。

W「くそっ…！」

アクセル「このままでは…！」

吹き飛ばされていたのは、仮面ライダーWと仮面ライダーアクセルだった。

マミ「何が…！」

杏子「ちっ…！」

すぐさま変身する杏子。

しかし、時既に遅く少女達は大勢の男に取り囲まれていた。

中央には、謎の仮面ライダーともう一人、仮面ライダーが居た。

少女達はその仮面ライダーの姿を知る由もないが、翔太郎達はその姿に見覚えがあった。

かつて風都を襲撃した『NEVER』と呼ばれる集団のリーダーが変身していた仮面ライダーエターナルに酷似していた。

強いて違うところを挙げるならば、その姿は漆黒に包まれていた。

謎の仮面ライダーだけでも、驚異的な戦闘能力を持つのに更に現われた強敵に絶体絶命の窮地に追い込まれるまどか達。

マミ「分が悪すぎるわね…！」

杏子「どうすりゃいいんだよ…！」

さやか「まどか…！」

まどか「上条さん…！」

まどか達に迫りくる敵だったが、少女達の下に一人の少女が駆けつけた。

ほむら「危ないところだったわね……」

まどか「ほむらちゃん……」

第19話 明かされる『K』 / 暁美ほむらの秘密（前書き）

主「ポイントが100を突破して驚きを隠せません。」

上条「本当にな…」

主「これからも頑張ってくださいですので、どうかよろしくお願いいたします！」

上条「よろしく〜」

## 第19話 明かされる『K』 / 暁美ほむらの秘密

『魔法少女サイド』

杏子「助けに来てくれたのは嬉しいが、一人増えたくらいでどうにかなるような敵じゃねえだろ……」

暁美ほむらがどの様な力を持っているの少女達は知る由も無いが、この状況を打開できるとは思えなかった。

ほむら「……」

「……え……?」「……」

少し前まで、大勢の敵に囲まれていたはずの少女達は、自分達が居た場所とは全く異なる場所に移動していた。

驚きを隠せない一同。

暁美ほむらが何をしたのか知っているものは、左翔太郎と照井竜、そして現在意識を失っている上条当麻の三人だった。

マミ「一体何をしたの……?」

ほむら「そんなことより、早く彼を病院に運んだ方がいいんじゃないかしら?」

ほむらの言葉で上条の方を見る少女達。

上条当麻は腹部から夥しい量の血を流して倒れていた。

幸い病院からはあまり離れていないため、少女達は急いで少年を病院に運んだ。

『見滝原総合病院』

上条を病院に搬送した後、緊急手術が行われることになった。何とか一命を取り留めた上条に安堵する少女達。その場所には、フィリップや亜樹子も集まっていた。

まどか「良かった…」

マミ「暁美さん、貴女に聞きたい事が沢山あるのだけれど…」

ほむら「…」

杏子「お前は一体何者なんだ？」

さやか「私も気になってたけど…」

まどか「ほむらちゃん…教えてもらってもいいかな？」

ほむら「…分かったわ」

ほむらは自身の正体を少女達に語る。

ほむらの話はまどか達によって信じ難いものだった。

目の前の少女が異なる未来の時間軸から来たなど、簡単に信じられる話ではない。

その上、彼女が元々居た時間軸では鹿目まどかが魔法少女であることに鹿目まどかは驚きを隠せなかった。

まどか「私が…魔法少女で…ほむらちゃんが友達…」

杏子「マジかよ…」

マミ「本当にどんな願い事でも叶うのね…」

さやか「でも…やっぱ…信じられないよ…」

暁美ほむらの話が正しいのならば、彼女が魔法少女の真実について知っていることにも納得できる。

しかし、そう簡単に信じられなかったさやかに…

フィリップ「彼女の話している内容は事実だよ」

突如、黙っていたフィリップが話しに加わった。

さやか「どうして分かるんですか？」

翔太郎「こいつは『地球の本棚』に唯一アクセス出来る人間だからな」

「」「」「地球の本棚？」「」「」

『地球の本棚』という言葉に聞き覚えの無い少女達は、フィリップに尋ねる。

フィリップ「簡単に言えば地球の記憶の全てが集約されている場所さ」

まどか「地球の記憶…」

マミ「そんなものがあるなんて…」

フィリップ「もちろん個人の情報も分かる」

さやか「プライバシーなんてないですね…」

フィリップ「『地球の本棚』で彼女について検索したけど、彼女は魔法少女になっていてる筈がないんだよ」

杏子「それはどういう…」

フィリップ「さっきも言ったけど、『地球の本棚』は全ての情報が集約されている。だから、暁美ほむらが魔法少女になっていないなら目の前の暁美ほむらは一体何者なんだって話になるのさ」

さやか「じゃあ転校生の話は本当ってことですか？」

フィリップ「うん」

杏子「でもそんな出鱈目な力が使えるってことは…」

フィリップ「察しの通り、僕は普通の『人間』じゃない。それに、一度死んでいるしね…」

「…え…?」「…」

こんな特殊な力を持っているのが普通の人間の筈がないと少女達は理解していたが、一度死んでいるという言葉は、あまりにも意外だった。

「…」

フィリップの言葉を黙って聞く翔太郎と照井と亜樹子。彼等は、フィリップが『死んだ』という事実を知っている。

フィリップ「僕はとある事故で一度死んだ筈なんだけど、落ちた場所の影響で肉体がデータで再構成されたんだ」

一度死んで蘇ったという事実にはただただ驚愕することしか出来ない少女達。

魔法少女のシステムもある意味不死と言っても過言ではないのだが、完全な死を迎えた後にその様な現象が起きるなどあまりにも異常だからだ。

フィリップ「でも、僕は自分を化け物なんて一度も思ったことは無いよ。それに、蘇ったおかげで翔太郎達にも会えたしね」

そう語るフィリップの表情は晴れやかで、彼の話していることに一切の嘘がないということを表していた。

少女達もフィリップのそんな表情を見て、静かに微笑んでいた。

マミ「暁美さん…あなたは何故この話を私達に話してくれたの？」

暁美ほむらの話を聞き終えたバマミが、少女に質問する。

ほむら「今回の時間軸には多くのイレギュラーが出現したからよ…」

杏子「イレギュラーだった？」

ほむら「そう。今まで私が動いてきた時間軸では、上条当麻と仮面ライダー、ドーパントなんて存在は現われなかった」

フィリップ「本来起きる筈の無い出来事が発生したと言っわけだね？」

ほむら「ええ。その上、上条当麻の力は魔女を人間に戻す力を持っているかも知れない…」

まどか「魔女を人間に…」

ほむら「美樹さやか。あなたのソウルジェムはどこにあるのかしら？」

さやか「え…？」

ほむらの言葉に反応して、自身のソウルジェムを探すさやか。

さやか「無い…」

まどか「ええ！？さやかちゃん大丈夫なの！？」

マミ「美樹さん！？」

杏子「どうなってんだ？」

ほむら「落ち着きなさい。美樹さやか。魔法少女になってみなさい」

さやか「う…うん」

渋々ながらもほむらの従っさやか。

さやか「あ…あれ？変身出来ない？」

ほむら「原理は不明だけど、ソウルジェムは消失しても美樹さやかは生きているし、魔法少女になることも出来ない。まるで『人間』に戻ったみたいじゃない？」

一度『魔女』になつてしまった『魔法少女』は殺すことでしか救済出来ない。

覆る筈の無い現実を破壊する力を持つ上条当麻の存在。

有り得ない筈の出来事が発生する時間軸だからこそ、暁美ほむらの行動も変化したのかも知れない。

杏子「だから当麻に協力を呼び掛けたってワケか？」

ほむら「ええ。彼の力はとても貴重よ。きっと、きゆうべえにとつても予期せぬ出来事だったんじゃないかしら」

まどか「でも…上条さんは私達のせいで何度も大怪我を負って…」

ほむら「貴方が気に病む必要はないわ。それに、例え私が彼と接触しなくても、彼は何もしないような人間だったかしら？」

まどか「…それは…」

ほむらの言葉に何も言い返せなくなるまどか。

それから、一定時間が過ぎて翔太郎達は寮に戻り、少女達は病院に残った。

上条の居る病室に移動した少女達。

さやか「それにしても…」

マミ「どうしたの美樹さん？」

さやか「どうして上条さんはここまでしてくれるんですかね？」

杏子「それは…」

さやか「上条さんは記憶喪失でどんな人生を歩んできたか、全く分らないし…」

少女達が抱く疑問は同じだった。

他人の為に自身の危険を一切考えず、行動する上条当麻の過去に一体何があったのか。

杏子「考えて分かる問題じゃねえだろ…」

マミ「でも、確かに気になるわね」

まどか「もしかしたら、家族の人に連絡知れないし…」

ほむら「彼の記憶があればの話よ」

さやか「やっぱり気になるなあ…」

少女達が話している最中に、眠っている上条の正面に『イメージメモリ』と『ブレイカーメモリ』が現われる。

そして、二つのガイアメモリが眩い光を放ち、病室が光に包まれる。

まどか「な、何!?!」

さやか「ちょ…!?!」

マミ「きゃあ…!?!」

杏子「眩し…!?!」

ほむら「何が…!?!」

病室で意識を失った少女達。

まどか「こ…こは…?」

さやか「う…ん…」

杏子「何処だよ…」

マミ「病室に居た筈じゃ…」

ほむら「何が起きているの?」

意識の戻ったまどか達は、何故か上条当麻が眠っていた病室ではなく、閑静な住宅街に居た。

何が起きているのか全く理解できていない少女達だったが、そこで彼女達は一人の少年を見かける。

幼稚園児位の年の男の子だったが、少女達はその少年に見覚えがあった。

ツンツンした髪が特徴的な少年で、現在とは雰囲気は違っているが、間違いなくその少年は上条当麻であった。

まどか「上条さん?」

さやか「何で子供？」

杏子「もしかして此処って…」

マミ「上条君の記憶の中なの…？」

ほむら「どうしてこんなことが…？」

夕暮れにの住宅街を歩く少年を見ていたまどか達だったが、そこで少年に向かって石が投げられた。

ガッ！！

「「「「「えっ…」「」「」

少年の頭に石が当たり、頭から血が流れる。

「よっしゃ！これで不幸がどっかに行くぞ！」

「どっか行けよ！化け物！」

「この疫病神！」

突然の出来事に呆然としていた少女達だったが、我に戻り少年達に向かつて怒る。

まどか「何を…やってるの…？」

さやか「あんなたちやめなさいよ！…」

杏子「てめえら何やってやがる!!」

マミ「上条君大丈夫!？」

ほむら「…」

石を投げた少年達に向かって怒りを露にするさやかと杏子。

上条の下に駆け寄るまどかとマミ。

しかし、彼女達の声は少年達に届くことは無い。

あくまで、上条当麻の記憶の中である光景に干渉することなど出来ないのだ。

上条自身が思い出せない記憶を偶然見ることになった少女達。

そこで、彼女達は少年の過去を知ることになる。

少年は生まれながらにして不幸体質で、両親以外の周囲の人間全てから陰湿ないじめを受けており、園児ばかりか、その保護者からも同様の仕打ちを受けていた。

少年が受けた仕打ちを見ていた少女達は、心を痛めていた。

誰かを傷つけるようなことをしているわけではない。

ただ、不幸という理由だけで理不尽な暴力を振るわれる。

両親以外の人間から、『化け物』扱いされ続けていた少年。

他人の悪意を受け続けていた少年。

しかし、少年の不幸は終わらない。

ある日、少年は借金を抱えた男に追い回され、包丁で刺された。

ドス!!

何度も何度も…

少年の身体から、夥しい量の血が流れ出ていてその場には血溜まりが出来ていた。

包丁で刺された少年は、一命を取り留めたが、長期入院することに

なってしまう。

その時、他人から何故死ななかつたんだという心無い言葉を浴びせられたりもした。

少年が病院を退院して、しばらく経った後、少年の噂を聞きつけたマスコミが『化け物』として少年をカメラに写した。

この世界はどこまでも残酷だった。

この光景を見せられた少女達の反応は様々だった。

鹿目まどかと巴マミは泣き崩れて、美樹さやかと佐倉杏子は上条の記憶の中でもということ忘れて、少年を助けようとした。暁美ほむらはその場に立ち尽くしていた。

少年の両親は幼稚園の卒業直後に、「オカルトの信じられない街」である学園都市に送ることを決意する。

親元を離れて小学生から、一人暮らしをすることになった少年。

結果的に、両親の判断は成功だった。

少年の右腕にはあらゆる異能の力を否定する力が宿っていることが判明した。

学園都市の小学校では、少年を『化け物』扱いする人間はおらず、むしろ不幸の避雷針として認識されてクラスメイトと仲良くなり友達も出来た。

学園都市でも少年は不幸な体験をすることが多かったが、不幸に巻き込まれようとしている人間を助ける機会が訪れて、少年は自身の不幸を誇りに思うようになる。

そして、学園都市に来て約十年の時が経ち、少年は自身の人生を変える出来事に巻き込まれる。

「私の名前はインデックスって言うんだよ！」

純白の修道服に身を包んだ少女との出会い。

少女を助けるために少年は奔走して、やがて少女を救う。

その代償として少年は記憶を失う。

そして彼は、以前の自分を演じて生きていくことを決意する。  
少年がインデックスという少女と出会い、僅か三ヶ月という期間で  
様々な出来事が起きた。

『普通』の人間ならば、一生かかっても起こり様のない出来事。  
少年が不幸だからこそ、助けることの出来た命。

誰よりも『不幸』だからこそ、他人の『不幸』を望まない少年。

再び光に包まれるまどか達。

少女達は病室に戻っていた。

彼女達は無言だった。

目の前で眠っている少年は、想像を絶する不幸に苛まれながらも他  
人を助けるために戦ってきた。

そんな彼に対する仕打ちは、記憶喪失という現実。

あまりにも報われない少年に少女達は静かに涙を流していた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7477w/>

---

絶望（げんそう）の終焉/仮面の戦士と魔法少女

2011年11月7日13時01分発行